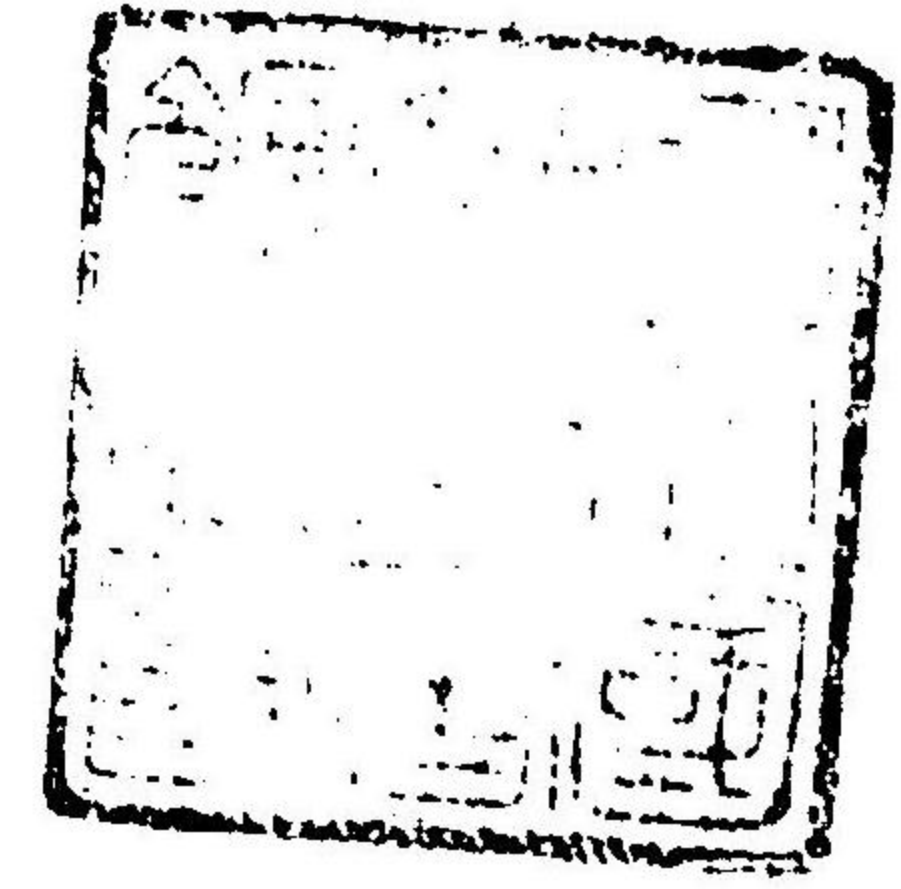


奧田鯨洋編著

三 版
日韓古蹟

合本

京城日韓書房發行



294536

2104970588n(3)

自覺區志
憲知為來

名哉書



日韓古蹟叙

日韓ノ交通ハ我日本建國ノ當初ニ始リテ以テ今日ニ至ル、實ニ二千五百年ノ久シキトナス、素盞烏尊ガ渡韓シテ居テ蘇尸茂里ニ定メ南韓ニ君臨シタルノ史蹟ハ今更メテ之ヲ言フノ要ナシ、三國ノ初メ、新羅ノ第四世脫解王ハ我倭人ヨリ出デ、當時ノ宰相トシテ權勢雙ヒナキ瓠公ハ實ニ我日本ヨリ渡韓シタル人ナリトナス、高麗金富軾ノ勅撰セル三國史記ノ記スル所實ニ此ノ如シ、我日本書紀ヲ觀ルニ神武大帝ヨリ持統帝ニ至ル八百年間ノ記述、殆ント韓國ト關涉セザルモノナシ、殊ニ崇神帝以降ニ至リテハ新羅、任那、百濟、高句麗ヨ

二
リノ朝貢相繼ギ、使節ノ慰問、物資ノ交易往來ノ頻繁、其跡ヲ絶タズ、吾人ハ之ヲ讀ンデ當時ノ三國ガ我日本歴史中ノ一領域内ニ屬スルト共ニ、亦タ帝國ノ實權的支配下ニ在ル一屬領タルノ感ナクンバアラズ、新羅統一後ハ朝貢ノ關係我ニ薄クシテ支那ニ厚ク、高麗朝、李朝ニ至リテハ全然支那ノ正朔ヲ奉シ、我トノ關係殆ンド一變セルガ如シ、然レドモ兩國民ノ交通ハ依然トシテ存續シ、韓廷歲時ノ慰問使亦タ時ニ之レナキニアラズ、殊ニ高麗忠烈王ノ時ニハ元寇ノ役アリ、李朝昭敬王ノ時ニハ豐公ノ征アリ、兩國ノ關係ハ武力爭衡ノ紹介ニ依リテ更ニ一層密接ヲ極メタリ、蓋シ日韓二千五百年ノ間、武力ヲ交ヘタル大ナルモノ、三トナス、

素盡烏尊ノ征服、神功皇后ノ征韓、豐公ノ征韓是レナリ、而シテ元寇ノ役ハ此ニ與ラザルナリ、是等上古以來ノ日韓史跡ヲ尋究シテ之ヲ闡明スルハ、嘗ニ日韓兩國人ヲシテ歴史的ニ親和スヘキ原由アルヲ知ラシムルノミナラズ、亦タ今日在韓セル日本人ヲシテ多大ノ興味ヲ感セシムヘシ、

社中奥田直毅君、平素好ンデ韓史ヲ讀ミ、史眼ニ明カニシテ文筆ニ健ナリ、曩ニ日韓古跡ヲ尋ネ、之ヲ京城日報紙上ニ載セテ頗ル讀者ノ歡迎ヲ博ス、頃日君、書肆ノ需メニ依リ、集メテ一冊ト爲シ、廣ク之ヲ世ニ傳ヘントス、其記スル所、近ク豐公壬辰役ニ過ギズト雖モ、當時兩國勇將猛卒奮戰快闘ノ跡、一勝一敗血ヲ流

二
リノ朝貢相繼ギ、使節ノ慰問、物資ノ交易往來ノ頻繁、其跡ヲ絶タズ、吾人ハ之ヲ讀ンデ當時ノ三國ガ我日本歴史中ノ一領域内ニ屬スルト共ニ、亦タ帝國ノ實權的支配下ニ在ル一屬領タルノ感ナクンバアラズ、新羅統一後ハ朝貢ノ關係我ニ薄クシテ支那ニ厚ク、高麗朝、李朝ニ至リテハ全然支那ノ正朔ヲ奉シ、我トノ關係殆ンド一變セルガ如シ、然レドモ兩國國民ノ交通ハ依然トシテ存續シ、韓廷歲時ノ慰問使亦タ時ニ之レナキニアラズ、殊ニ高麗忠烈王ノ時ニハ元寇ノ役アリ、李朝昭敬王ノ時ニハ豐公ノ征アリ、兩國ノ關係ハ武力爭衡ノ紹介ニ依リテ更ニ一層密接ヲ極メタリ、蓋シ日韓二千五百年ノ間、武力ヲ交ヘタル大ナルモノ、三トナス、

素盞鳥尊ノ征服、神功皇后ノ征韓、豐公ノ征韓是レナリ、而シテ元寇ノ役ハ此ニ與ラザルナリ、是等上古以來ノ日韓史跡ヲ尋究シテ之ヲ闡明スルハ、嘗ニ日韓兩國人ヲシテ歴史的ニ親和スヘキ原由アルヲ知ラシムルノミナラズ、亦タ今日在韓セル日本人ヲシテ多大ノ興味ヲ感セシムヘシ、

社中奥田直毅君、平素好ンデ韓史ヲ讀ミ、史眼ニ明カニシテ文筆ニ健ナリ、曩ニ日韓古跡ヲ尋ネ、之ヲ京城日報紙上ニ載セテ頗ル讀者ノ歡迎ヲ博ス、頃日君、書肆ノ需メニ依リ、集メテ一冊ト爲シ、廣ク之ヲ世ニ傳ヘントス、其記スル所、近ク豐公壬辰役ニ過ギズト雖モ、當時兩國勇將猛卒奮戰快鬪ノ跡、一勝一敗血ヲ流

シ骨ヲ埋メタルノ地、之ヲ兩國ノ史藉野乘ニ探リ、地理ニ考ヘテ當時ノ逸事ヲ描ク、光景宛然睹ルガ如シ、願フニ豊公征韓ノ舉、今日ヨリ之ヲ觀レバ瀆武ノ嫌ナキニアラズト雖モ、當時叢爾タル一島帝國ニ踰躋セル武力ノ争鬪ヲ一轉シテ外征ノ快舉ニ出ヅ、其意氣雄邁八荒ヲ吞ミ、六合ヲ蔽フノ概アルニ至ツテハ即チ之ヲ壯トセザルベカラズ、此著獨リ日韓戰史ニ資スルノミナラズ、士道ヲ鼓舞シ士氣ヲ振作スルノ効亦タ尠カラザルベシ、予ハ君ノ請ニ依リ、茲ニ數語ヲ叙シ終ルニ臨ミ、更ニ君ガ遡ツテ神功皇后ノ偉蹟ニ筆ヲ執ランコトヲ希望スルモノ也。

明治四十三年三月 京城日報社ニ於テ

長峽 大岡 力 謹ス

自序

韓半島七朝の興亡實に三千年、其短かゝらざる歴史を終始一貫するものは、内憂と外患と是れなり、就中其對外關係に在ては常に敗れ、毎に退き、岌々乎として危いこと累卵の如き運命なりき、則ち朝に明に頼り、夕に吾れに負ぎ、轉々幾度なるを知らず、而も今や日本帝國宗主權の下に座す半島の運命も亦奇ならずや。

歴史は繰り返す、若し夫れ半島の外交史を研究せんか、日韓關係の古きに及ぶものなきなり、斯の如くして日韓關係の今日ある其因縁や淺からずと謂つ可し、予や韓京に居ること既に年あり、好んで半島史を研究し、更に日韓戰史に及ぶ毎に、未だ嘗て豊太閤の偉蹟を思はざるなし、而も操觚の業に従事する身は匆忙充分なる講究を遂ぐるに遑なく、唯だ夫れ感興の臻るに委して菲才自ら揣らす、日韓史跡に筆を起しつ、京城日報紙上に連載し、稿成るに及んで空しく筐底に投ずるに忍びず、更に

講究補正を加へ爰に是を上梓して汎く同好の士に頒たんとす、引用の史書は浩瀚雜駁、一々是を涉獵したるも猶杜撰にして粗漏の點少なからず、識者希くば是正の勞を吝む勿れ。

予は茲に所謂豊公裂刪の全文を揚げて卷頭の序に更ゆと附云

庚戌三月

京城日報於編輯局

奥田 鯨洋

奉天承運

皇帝制曰、聖仁廣運、凡天覆地載、莫不尊親、帝命溥將暨海隅日出、罔不率俾、昔我皇祖、誕育多方、龜紐龍章、遠錫扶桑之域、貞珉大篆、榮施鎮國之山、嗣以海波之揚、偶致風占之隔、當茲盛際、宜纘彝章、咨爾豐臣平秀吉、崛起海邦、知尊中國、西馳一介之使、欣慕來同、壯叩萬里之關、懇求內府、情既堅於條順、恩可靳於柔懷、茲特封爾爲日本國王、錫之誥命、於戲、寵賁芝圃、襲寇裳於海表、風行卉服、固藩衛於天朝、爾其念臣職之當修、恪循要束、感星恩之已渥、無替欵誠、祗服論言、永遵聲教、欽哉

萬曆二十三年正月廿一日

勅諭

皇帝勅諭日本國王平秀吉、朕恭承天命、君臨萬邦、豈獨又安中華、將使溥海內外、日月照臨之地、罔不樂生、而後心始慊也、爾日本平秀吉、比稱兵于朝鮮、我天朝二百年、恪守職貢之國也、告急于股、朕是以赫然震怒、出偏師以救之、殺伐用張、原非朕意、迺再將豐臣行長遣使藤原如安來、具陳稱兵之由、本爲乞封天朝、求朝鮮轉達、而朝鮮隔越聲教、不肯爲通、輒爾觸骨、以煩天兵、既悔禍矣、今退還朝鮮王京、送回朝鮮王子、陪臣恭具表文、仍申前請、經畧諸臣、前後爲爾轉奏、而爾衆復犯朝鮮之晉州、情屬反覆、朕遂報罷、邇者朝

鮮國王李昞、爲爾代謂、又奏釜山倭衆、經年無譁、專俟封使、具見恭謹、朕故特取藤原如安來京、令文武群臣會集闕廷、譯審始末拜訂原約三事、自今釜山倭衆、盡衆退回、不敢復留一人、既封之後、不敢求貢市、以啓事端、不敢再犯朝鮮、以失隣交、披露情實、果爾恭謹、朕以是推心不疑、嘉與爲善、因勅原差遊擊沈惟敬、前去釜山、宣諭爾衆、書數留闕、特遣後軍都督府僉事、署都督僉事李宗城爲正使、五軍營右副將左軍都督府、署都督僉事楊方享爲副使、持節齎誥、封爾平秀吉、爲日本國王、錫以金印、加以寇服、陪臣以下、亦各量授官職、用溥恩賚、仍紹爾國人、俾奉爾號令、毋得違越、世居爾土、世統爾民、蓋自我成祖文皇帝錫封爾國、迄

今再封、可謂曠世之盛典矣、自封以後、爾其恪奉三約、永肩一心、以忠誠報天朝、以信義睦諸國、附近夷衆、務加禁戢、毋令生事干沿海、六十六島之民久事徵調、離棄本業、當加意撫綏、使其父母妻子得相完聚、是爾之所以仰體朕意、而上答天心者也、主干貢獻、固爾恭誠、但我邊海將史、惟知戰守、風濤出沒、玉石難分、效順既堅、朕豈責報、一切免行、俾絕後憂、遵守朕命、勿得有違、天鑒孔嚴、王章有赫、欽哉、故諭。

目次

一、東萊城の勇士……………南門上の紫氣……………一

二、清正の道案内……………偶然邂逅せし日本の漂流民……………四

三、鶴院關の陥落……………韓將等の逃亡……………六

四、烏嶺の嶮忠州の城……………風聲鶴唳……………八

五、先陣争ひ……………兩勇士の憤激……………一一

六、京城と文祿役……………宣祖蒼遑西に走る……………一三

七、韓將權慄の勇悍……………我軍の敗戦……………二〇

八、臨津江の戦……………韓軍輕擧して破る……………二二

九、開城の陥落……………老勇士鍊光の死……………二三

十、文祿役と平壤……………小西行長の敗走……………二五

十一、二王子の捕虜……………敵將の反逆……………三八

十二、清正と間島……………兀良哈外馬如龍……………四一

十三、清正の虎狩り……………小姓の仇き討ち……………四四

十四、元平山の戦……………日韓勇士の格闘……………四六

十五、碧蹄里の戦……………小早川隆景の奇捷……………四七

十六、菟山倉庫の焼失……………加藤遠江守の憤激……………五六

十七、巨濟洋の船戦……………我海軍の大敗……………五八

十八、碧波亭下の水戦……………協坂中務の奮闘……………六五

十九、閑山島……………韓將元均の最後……………七一

二十、順天海口の戦……………李舜臣の戦死……………七六

二十一、慶州の戦……………清正部下の敗及……………七八

二十二、晋州城の陥落……………屠盡す軍民二萬餘……………八〇

二十三、管六之助の銘刀……………大虎を斃す……………八六

二十四、蔚山新塞の戦……………島津義廣の奮戦……………八七

二十五、蔚山の役……………清正の悪戦苦闘……………九四

二十六、黄石山の戦……………清正部將の奮戦……………一一一

二十七、南原城の陥落……………守將の逃亡……………一二三

目次終

二十八、全州の敗……………明提督韓王を誅る……………一二五

二十九、稷山の戦……………基次、利安の勇戦……………一二六

三十、征韓軍の實力……………主將と兵數……………一二一

三十一、講和談判……………條約七ヶ條……………一二五

三十二、宣祖蒙塵の地……………猶ほ袖濡す松の下露……………一三一

三十三、征韓日誌……………文祿慶長兩役……………一三三

三十四、倭寇の事……………文祿以前に此の泉あり……………一三七

三十五、神功皇后時代……………馬山浦の孤雲臺と騷山亭……………一四三

三十六、文祿役と關羽廟……………其の靈驗を謝して……………一四五

三十七、梨太院の日本村……………確たる證據はなし……………一四六

三十八、慕華堂……………日本無双の不忠者……………一四九

三十九、日韓史上の釜山……………釜山と日本の關係……………一五四

四十、秀吉毒殺説……………可憐珍談……………一五八

日 韓 古 蹟

(一) 東萊城の勇士 南門上の紫氣

文祿元年、豊臣太閤秀吉が多年の野心は、遂に現はれて、征韓の大軍と變じ、即ち同年四月、我兵二十万、浮田中納言秀家等外二十有六將、加藤清正、小西行長を先鋒とし、月の十三日、行長先づ釜山鎮に上陸し釜山城を陥れ守將僉使鄭發是を斃し、破竹の勢を以て猛進東萊府に迫る。十五日、我軍城外に迫り、將に城内に肉迫せんとす。

是より先き、府使宋象賢なるもの、事の急を聞き、城内の民兵を盡く召集し、尙ほ近縣の兵を招いて、東萊城を守らしむ。慶尙道兵使李珪も亦兵を率いて來り助く。而も李珪は釜山城既に陥ると聞くと、大に恐れ、且つ流言して曰く。大將まさに蘇山驛に出陣すべしと。此の流言は幸ひにして一軍の意を強くし、軍威稍々震ふ。象賢熱々思ふに、此の薄弱なる兵力を以て、日本の大軍に對す、勝敗の數既に業に明なり、身は決死殉

國を心に誓ひ、慷慨衆を率ひて府城の南門を保守す。我征韓の大軍、決河の猛勢を以て蔘進し來り、忽ち府城を圍み。先づ木板に書して曰く。

戰へば即ち戰へ、戰はずんば即ち道を假せ。

象賢木板を視、憤然として、彼亦木板に大書して曰く。

死は易く、道を假すは難し。

茲に於て我軍愈々圍を堅ふする事三匝。劍戟日に閃めき、砲聲天に震ふ。象賢少しも恐れず、戰を督する事半日餘、我軍攻戰益々急なり。韓軍遂に支へ能はず、或は斃れ、又は逃走する者多し。助防將洪允寬なる者、

云つて曰く、

事將に迫れり、暫く退いて蘇山を守るべし。

象賢笑つて曰く。

只死の一あるのみ、何ぞ必ずしも紛紜せんや。

即ち指を噛み、淋漓たる流血を以て、扇面に題す。

曰く

孤城月暈。 列鎮高枕。

君臣義重。 父子恩輕。

書し終るや、之れを家奴に托し、歸りて家父に報せしむ。

時に我軍、北城を攀て、城内に突撃せんとす。允寬等能く防ぎ戰ふと雖も。克たずして皆死し、城遂に陥る。是に於て象賢は朝服を脱し、鎧を着け、牀几に倚つて動かさず。我兵望見、象賢を捕へんとして集る。軍中に平調益なる者あり（調益は何人なるか分明せず）曾て柳川豊後守調益に隨いて往來し、象賢と信を通ず。象賢之を待つに厚禮を以てす、調益竊かに之を感ず。是に及んで目を以て城傍の空地を示し、速に遁れしめんとす。然れども象賢應せず、調益未だ我意を覺らざるを思ひ、再三手を以て象賢の衣を牽く、象賢尙ほ知らざる者の如く装ひ、几を下り北方に向つて再拜し、拜終るや、再び几に倚らんとす。我兵急に彼れを生擒せんとして突進し來るや、象賢激怒、髮冠を衝き、靴尖を上げて之を蹴

る、我兵遂に之を殺す、象賢時に年四十二歳。其の死に臨んで亂れず。部下に云つて曰く。

吾腰下に患あり、豆の如し、以つて微となし、屍を收めよ。

既にして象賢死するや、調益等之を見て嘆悼し、棺を造り、歛めて城外に葬り、標を樹て、之を識す。是より南門上常に紫氣天に上る事數年滅せざりしと。其後二十七年、慶尙道兵使全應瑞蔚山に至り、鬼將軍加藤清正に見へ、其死状を述るや、清正之を義とし、家人の改葬を許す。後朝廷吏曹參判官を贈り、忠烈と諡し、開城の崇節祠に祭らる、世人谷泉先生と云ふ。

(二) 清正の道案内 偶然邂逅せし日本の漂流民

小西行長、諸將を賺して先陣す、加藤清正等大に怒り、即ち兵船を進めて漸く渡韓し、清正、行長の通過せし道路をだに踏を嫌み、熊川より、慶州に向つて進む。行く事十五六里にして、日本の雑兵五六十人、朝鮮

婦人十餘人を馬に乗せ引き來るに會ふ、清正恠で問ふ。雑兵等の曰く。

吾等は小西の手の者なり、東萊の邊り百餘里、殆んど人影を見ず、故に軍中洗濯物に困む、今漸く女等十餘人を探査し、誘ひ歸る處なり。

清正之を聞き、憤然色を正して曰く。

咄ッ。何等の奴ぞ、猥りに良民の婦女を誘致す、汝等禮儀を知らざるか、今吾婦人等を放還すべし、汝等疾く歸りて清正が放免せしを告げよ、行長は國家の大義を知らぬ奴なり。

直ちに部下に命じ、女を馬より下し尙ほ。

大日本先鋒將加藤清正之免。

なる十二文字を木札に大書し、之を各々其髻に結ばしめ、且つ銀錢を與へて放つ。女等大に喜び、三拜九拜の禮を盡して去る。

時に、路傍の觀者中より、白髪の一韓翁現はれ、清正の前に跼り、頭を地に付け、涙を淨べ頓首百拜して曰く。

卿の仁愛、遂に我等妻女の全きを得たり。

其の言語、日本語の巧なりしより、清正及び部下の諸將皆怪む。清正問て曰く。

汝何れの者ぞ、能く日本語を弄するに非ずや。韓翁謹で答へて曰く。

吾は日本平戸の産なり、名を徳五郎と呼び、常に漁業を職とす、今を去る事三十五年以前、漁業の爲め遙かの海上に出しが、偶々暴風に遇ひ難船し、漸く此の國に漂着す、以後韓國を生國と定め、老たる事此の如し、而も今姓名も亦相圓里と改めたり。

清正聞て大に喜び。

差れば、此の國の地理言語にも精通せん、我軍の道案内を命ず。

言遂に辭し難く、徳五郎其旨を諾し、之より軍を導て慶洲に進む。

(三) 鵲院關の陥落 韓將等の逃亡

京釜鐵道線路中、三浪津驛は馬山線分岐點なり、同驛を東に去る事約半里、鵲院關あり。線路に沿ひ、上は峨々たる巉岩を負ひ、下は絶壁數仞にして、碧潭に臨む。風光頗る佳にして、又た要衝の地たり。是れ即ち道中の堅砦にして、一夫能く万卒を禦ぐの嶮たり。

文祿の役、小西行長軍を進めて、鵲院關に至る。東萊の敗將李珪、密陽の府使朴晉等、此の嶮に倚つて以て我軍を防がんとす、行長其臣木戸作右衛門に五千餘人を與へ、密かに關の背後に向はしむ。作右衛門兵を提げ、枚を啣んで山に登り、藤葛に倚り、嶮坂を攀ち、岩角を踏み、絶壁に縋り、千辛萬苦漸くにして關の背後に下り、狼火を上げて前而行長が本陣に報す。行長急に本隊を麾いて突進し、前門後戸鯨波を作り大砲三百餘門を連發す。韓軍大に驚き、城將に重圍に陥りしとなし、狼狽出で戦ふ者なし。茲に於て城中既に亂れたるを知るや、行長、本隊を提げて前門より突入し、作右衛門亦た部下を麾いて後門より吶撃す、韓軍亂れ、朴晉先づ火を縱つて軍器倉庫を焚き、城を棄て、山に入り、漸く密

陽に逃走し。李珪亦た其愛妾を携へて走らんとす、城中洶々軍驚く事一夜四五、李珪遂に曉に乗じて逃走し、全軍皆潰走す。此の役に於て韓軍の死者二千餘人、負傷者算なく、行長長驅忠洲に猛進す

(四) 鳥嶺の嶮忠州の城 風聲鶴唳

文錄壬辰韓將申砬大軍を卒ひて小西行長の軍を鳥嶺に防がんとす。鳥嶺は天然の要害にして嶮岨比なく、守るに安くして攻むるに難し、明の萬曆二十年四月廿七日、申砬甲冑を脱ひて陣中にあり。夕陽將に落ちて天暮れんとす、時に急使あり馬を飛ばして至り。大聲申砬に告げて曰く。

倭軍既に尙州を陥れ、大舉鳥嶺に殺到す、將軍大いに備を嚴にすべし。申砬言を聞き戰慄禁する能はず、忽ち軍中に令し軍を忠州城内に退かしむ。

之より先き小西行長は尙州を陥落し勢に乗じて忠州に迫らんとす、軍漸く鳥嶺に達せんとし、斥候を出して先づ敵情を索らしむ、兩峽狭く相接して塞らんとし、嶮崖高く天に聳々、老松古杉雜木枝を交へ、天日爲めに暗く、蕙葉岩を縫ふて坂急に道嶮なり、大軍容易に進み難く、加ふるに山麓に一大川流廻り、即ち一夫嶮に寄れば万卒爲めに進み難き地なり、斥候歸りて是れを報す。行長先づ馬を進めて地形を見る、實に天嶮の要害なり、然れども此の嶮にして一人の守る者なきが如し。行長宗義智を顧みて曰く。

敵何ぞ此の要害に寄らざらん、彼、我軍をして道を開くに同じ。と呵々大笑し、直ちに急行軍を忠州に進む。鳥嶺を経るや軍を二分し其の城外に迫る。

是より先き申砬鳥嶺を捨て、退き忠州城に入る。翌日又た我軍の到るを報する者あり、申砬再び大いに恐れ城外に逃れ、城中爲めに混乱し其の狀實に例ふべからず、申砬密かに甲冑を捨て古き衣服を着し、城下の一

旅舎に隠れ、而して夜に乗じて逃れんとす。密かに憶ふ、吾れ倭軍討伐の重職にあり、何ぞ未だ敵の旗旌だに見ずして逃る、之れ我祖先の恥辱なり、他日世人亦吾れを何とか云はん、即ち出でざるべからずとなし、漸く旅亭を出づ。

申稜旅亭を出で城内に入り、斥候の首級を刎ね、自ら死を決して軍を卒ひ城を出で、河邊に陣す。

時に小西行長既に軍を進めて城外に至り申稜と相對して陣し將に戦はんとす。申稜遙かに行長が陣營を眺む、大小の旗旌風に翻り、刀槍日に映じて閃々、軍馬高く嘶て人皆勇み軍列整々堂々たり。茲に於て申稜又た戦ふの勇なく、身神自ら戦慄を禁せず。再び馬に鞭撻て逃ると雖も、遂に行く處を知らず、河中に投じて死す。陣中爲めに亂れ、軍卒狼狽上下混亂して止まず。時に行長之を知らずと雖も、敵軍中旗旌頻りに動き、入馬日々に出で、四方に通走するを見るや、之れ敵中必ず常ならざるを知り。直ちに全軍を傾して韓軍に突撃す、敵大いに亂れ、敢て戦ふ者な

く、或は河中に投じ又は兵刃の爲めに死する者數を知らず、時に韓軍中に金汝叻なる者あり、身長七尺、虎髯蓬々として長く左右に分れ、怒髪冠を衝き皆烈け、眼中血を注ぎ、汗馬に跨り手に大斧を携へ、大聲馬を行長が陣中に立つ。我軍敵する者なく、大斧の爲めに腦を碎かる、者多し、行長遙かに之れを眺め、槍を上げて進まんとすれども、待臣敵の猛威に恐れて諫止す。

眞壁新三郎は行長の勇臣なり、常に四尺餘の長槍を携へて軍に従ふ、單身馬を躍らせて進む、敵亦大斧を舞して戦ふ事二十余合、新三郎遂に危し。荒御田勘左衛門之れを眺め、又た馬を進めて戦ひ、遂に槍を延べて敵を刺す、敵落馬し従卒來つて其の首級を揚ぐ。此の戦に於て忠州の將大將李鎰亦た逃走して行く處を知らず、茲に於て忠州全く陥落す。

(五) 先陣争ひ 兩勇士の奮激

文祿の役加藤、小西、黒田、島津、福島、長曾我部等の諸將破竹の勢

を以て敵を破り、諸軍忠州に會す。忠清、慶尙、全羅の地皆我軍の猛威を憐れて敢て戦ふ者なく。庶民又た山林に逃れて、野に人影を見ず。我諸將忠州城外の廣野に集まり、之より京師攻撃の作戦を畫す、清正先きに行長に先陣の功を奪はれし事を云ふ。

行長之を聞き冷笑して曰く。
渡韓軍の先陣は吾れ太閤より命を享く、此の役も亦吾れ先陣たらん、
清正の曰く。

戦場の先陣は之れ勇者の常なり。

行長聞きも敢へず大いに怒り。

吾亦武勇に於て何ぞ汝に劣らんや、試みに武を争はん。

清正亦憤り刀を取つて立つ。

兩將部下の士も亦、皆一令のもとに起たんとす。黒田、鍋島、福島、毛利等の諸將漸く兩將を制し、清正行長も亦、島津、毛利等兩將の主唱を入れ、清正は忠州より陰城、竹山を経て京城の南大門に向ひ。行長は噫

洲、楊根を経て東大門に進まんとし衆義漸く一決、而して諸將直ちに軍を整へて發す。忠州は忠清北道の要所なり、舊釜山街道に當り南に鳥領を負ふ、小西行長攻落の地たり。

(六) 京城と文祿役 宣祖蒼遑西に走る

加藤清正、小西行長と忠州城外に其の先鋒を争ふ。
行長の曰く。

是より京城に到る、二道路あり、一は行程稍々近しと雖も、中に大河あり(漢江)、是れ南大門に至るの道なり、一は道遠しと雖も平地なり、是れ即ち東大門に入るの道なり。清正何れに向ふや。

清正曰く。

我、大河ありとも、其行程の近きに向ふべし。

茲に於て衆義一決、兩將互に出發す。清正の卒直、行長の狡猾、鬼將軍も亦遂に行長の智に及ばず、京城一番乗りの功亦た行長に奪はる。

行長の忠州を發するや、將士に云つて曰く。

我、清正と先陣を争ふ、今王城に入るに當り、清正に先んせられんか、只一死あるのみなり、諸將幸ひに我が爲めに盡力せよ。

軍卒命に應じ、勇を鼓して進む。途中の韓兵其の軍威を恐れて敢て戦ふものなく、皆岩を捨て逃走し、又た一矢を放つ者なし。

清正は行長と相分るゝや、猛進金山を陥れ、驪州、龍仁を経て漢江の南岸に至る。韓兵北に兵船百餘艘を繋ぎ、大旗小旗風に翻り、楫を連ねて嚴守す。

清正先陣に下知して筏を組み、數十人を乗せ、試みに川を渡らしむ。韓兵之れを見て、急に矢を放つ事雨の如し、我軍中敢て進む者なし。清正遙見切齒すれども、亦奈何ともする事能はず、日暮る。

斯くする事三日、清正日々江邊に出で、敵の動靜を伺ふのみ。四日目に至り其の曉鍋島尙重を伴ひ、遙に敵營を見るに、浮鷗の群敵陣に近く浮遊して敢て驚かず、或は旗上に飛翔し、又は陣頭に翔走するもの、皆

悠々たり。而して敵營亦寂として、人馬の音を聞かず、清正大に怪み尙重と計り、近士曾根孫六を遣はし、泳いで敵舟を奪はしむ。他の將士亦孫六に續いて渡る、渡れば敵營靜にして陣中空しく、既に韓兵の影を見ず。之より先き、韓の諸將南方に破るゝや、其報京城に至り、人心恟々たり。四月三十日拂曉、車駕西に巡る。申破去りて後ち、都人日々其捷報を待つ。前日夕陽仁王山頂に春くの頃、並笠を戴くもの二人、馬を飛して南大門より城中に入る、人争つて軍事を問ふ。

曰く。

巡邊使吉州に敗死せり、我等漸く身を脱して歸り來る。

滿城俱に震駭す。王其夕急に群臣を召し、出て避難を講す。遂に遷都に決し、平壤に赴き明兵の來助を待たんとす、而して尙ほ王子を諸道に分遣し、勤王の志士を招しめんとす。即ち臨海君は咸鏡道に領府事金貴榮、溍溪君、尹良然等之れに隨從す。順和君は江原道に、長溪君、黃廷成、護軍黃赫、同知李堅等之れに隨從す。赫か女は即ち順和婦人にして、而

して李璽は原州の産なり、故に並に之れを遣はす。右相留將となり。領相及び宰臣等數十人扈從して、即ち京城を發せんとす。内醫趙英瑛、政院吏申復麟等十餘人、大いに憤激し、未だ京城の棄つべからざるを唱ふ。俄かに李鎰の書狀南韓より至るも、宮中の守衛等既に脱れて見へず。漸く火炬を宣傳官廳に得て、李の書狀を讀む。

曰く。

今明日中敵必ず城中に至るべし。

城中益々戰慄震駭上下色を失ふ。

茲に於て芻遂に出で、蒙塵せんとす。三廳の禁軍奔竄し、昏黒に乗じ四方に逃走する者、市中互に相觸る。時に羽林衛、池貴壽、同輩二人と共に來りて芻に從ふ。龍輿、昌德宮を出で、景福宮の前を過ぐ、兩街の庶民皆慟哭す。承文院書李守謙、權臣柳成龍が馬鞍を執つて曰く。

院中の文書如何にすべきか。

柳答へて曰く。

其緊關なる者を收拾し來れ。

守謙諸々哭して去る。

西大門を出で沙峴に到れば、天將に明けんとす、回顧せば南大門内の大倉今の朝市場のある米倉町なり未だ倉趾あり火起りて焰々天に漲る。群臣一言を發する者なし。沙峴を過ぎ石橋に至れる頃、天急に大雨あり。京畿の監司權徵、馬を走せ、來つて漸く此の處より扈從す。車駕碧蹄驛に至れば、雨益々強く、一行皆沾濕す。之より又都城に入るものなし。之より先き、小西行長は廣州を陥れ、漢江の上流を渡り、幕進東大門に迫る。而も未だ城中車駕の蒙塵を知らざるが如し、金甲日に輝き、將卒破竹の勢を以て東大門に至る。城壁堅にして、鐵扉固く閉し容易に入るべからず。一軍の將士手を空ふして、只忙然たる斗りなりし。行長氣を焦つて殿しく將卒に命を下せども、壁高ふして攀る者は落ち、躊躇遂に巡す。時に陣中に一韓人の捕虜となる者あり、行長命じて城中に通すべき問道を問ふ。

韓人の曰く。

之より東方一里餘に水門あり、其廣さ越かに五尺餘、僅かに人を通ずべし。

行長大いに喜ぶ。

行長、捕虜の言を聞き、大いに喜び、直ちに水門に至れば、鐵柵を以て戸となす。部將木戸作右衛門、銃の臺木を脱し、銃心數本を一束に縛し、鐵柵の間に挿入れ、力を極めて引けば、他の軍兵等も亦、作右衛門を助けて鐵柵を破る。行長直ちに全軍に命を下し、水門より突入せしむ。一矢を放つものなく、又た人聲を聞かず、城中寂寥たり、行長商民を捕へて其理由を問ふ。

曰く。

大王、三日以前皇妃太子等と共に、群臣及び商賈を率ひて西方に蒙塵せり。

茲に於て、京城始めて我軍の占領に歸す。即ち行長先登第一なりとし、

直に事を名護屋の豊公に通す。而して行長城中に入るや、將士の横暴を制せんとして、軍令四ヶ條を認め、高札となし以て諸軍に示す。

其文に曰く。

一、軍隊列を混じて王宮に入るべからず。

一、民家に押し入り、濫りに金銭を掠め取るべからず。

一、酒家に入て酒を呑み亂醉すべからず。

一、貴賤を云はず婦女を犯し亂るべからず。

將卒之れを見て又た敢て反く者なく。東西南北及び其他の門に軍を分つて嚴守し、清正等の後援の至るを待つ。

清正、未だ行長の城中に入るを知らず、漢江を距て、韓軍と戦ふて利あらざりしに。韓將元榮、王の蒙塵を聞くと、守を脱き、夜に乗じて開城に去る。清正漸く漢江を渡り、軍を進めて南大門に至れば、行長の兵既に門上にあり、堅く守りて入るべからず。清正切齒するも及ばず、之より清正遂に城中に入らず、二王子を追ひ軍を停めずして北進す。

(七) 韓將權慄の勇悍 我軍の敗戦

我軍進んで京城に陣す時に韓將權慄なる者あり、兵二萬餘を率ひて、我軍に逆襲せんとす、我軍之を知り加藤遠江守、長谷川藤五郎、木村常陸介等兵二萬を提げて、先づ權慄を安南城に攻む。城は山により、要害無双なり加ふるに柵逆茂木を引て堅く守る。我軍の斥候先づ城後の山上より城中を窺ふに、人馬の影なく、城中静なり、敵既に逃れしとなし、直に前隊に報す。之より先き韓軍我軍の來り攻ると聞き、城中忽ち恐懼措く處を知らず、城を捨て南に逃れ漢江に至るや、水勢嵩くして渡るべからず。茲に於て將士死を決し、再び城中に入る。我斥候其の空虚を見、以て報す、我軍即進む。先づ斥候數十人を放ち、城外に近づかしむるや、韓軍急に城中より起り、矢石を投ずる事雨の如し、我兵死する者多く敗走す。加藤遠江守等、直ちに部下を麾いて城内に突入し、其の外廓を占領す、韓軍二の九に倚り能く防戦し、木石雨の如く、毒箭雹の如し、我

軍の大半爲めに斃れ、遂に支ふる能はずして廓外に潰走す。後援軍の將石田三成、大谷吉隆等、兵を提げて肉薄するも、韓軍防戦能く力め、更に乘すべきの機なし。我軍奈何共する能はず、暫時軍を退けて軍議す。時に城將權慄、一萬餘人を麾き、躬ら城門を開き、喊吶を上げて我軍に逆襲す。我軍大に破れ、潰走する事五六里、然れども權慄敢て長驅せず、再び城中に入つて又た出でず。我軍遂に鐘を鳴らして、敗卒を收め退かんとす。此の時に當り、沿道の韓軍我敗勢を望觀し、以つて機の乘すべしとなし、路傍の要所に據り、矢を放ち、石を投ずる事甚しく、我軍又大に破れ死する者數を知らず。加藤遠江守殿軍となり、能く戦ひ能く防ぎ、背走する事十四五里に到るや。全軍日に輝き、歩武整々堂々、金鼓の音勇まじき一隊の來るに遇ふ。之れ安南我軍の急を聞き、京城より加藤清正、小西行長、小早川隆景等の猛將、二萬五千の退兵を領し、援兵として將に安南に赴かんとすなり、茲に於て軍を合し、士氣大に振ふ、其より全軍大舉皆安南に向ふ。韓軍遂に城中より望見し、忽ち恐れ

鎧弓を棄て、走る、我軍一滴の血を見ずして城中に入り、之を占領し、翌日火を放ち、凱歌を上げて京城に歸る。

(八) 臨津江の戦 韓軍輕舉して破る

小西行長大軍を卒ひ、宣祖を追尾して臨津江に至る。江岸に到れば、韓軍既に船を奪ふて北岸に繋ぎ、壘を高うして嚴守す。刀槍霜の如く、旗旌江風に翻る。我軍遂に江を渡るを得ず、相對して陣し、敵動かす我亦進むべからず、斯の如き事十數日。行長一策を案じ、將士に命じて惟幕旌旗を撤せしめ、一夜陣を燒て退く。時に韓將申碯、遙に是を眺め、我軍の退却となし、直ちに船を出して追撃せんとす。

敵將金命元止めて曰く。

是れ敵の策なり、猥りに進むべからず。只我は嶮難の地を守りて、徐ろに敵情を視察し、而して進み戦ふも、尙ほ遅からざるべし。

申碯是を聞かず、急に權徹と共に軍を整へ、大船數艘に乗じて渡る。行

長の命を啣み、窃かに江岸にあつて敵情を窺ふ者、急に出て兜を落し、槍を棄て、狼狽して走る。申碯等其の情を知らず、勢に乗じて追撃甚だ急なり。行長是を山間の難所に誘ひ、機を見て鳥銃を發す。宗義智、小西主殿介、木戸作左衛門等命を啣んで峽間に伏す者、急に發して敵を掩撃す、韓軍狼狽なす處を知らず。行長、亦た馬を反して敵軍中に馳突す。申碯流彈に當つて斃れ、殘餘の將士、列を亂して潰走す。金命元、應寅等北岸にあり、未だ進まず、只だ戰慄するのみ。朴忠侃、蒼逸馬に乗じて先づ走る、總軍遂に止まるを得ずして潰走し、金元命、應寅も亦馬を並べて走る。行長直ちに江を渡りて追撃平壤に至る。

(九) 開城の陥落 老勇士鍊光の死

宣祖二十五年、即ち文祿元年、我征韓の軍連戦連勝、長驅京城を陥る、韓王北に走り、開城に蒙塵し、四方に義兵を募集す。時に博士に金鍊光なる者あり、年六十九、慶尙南道金海の人なり、直ちに募に應じて開城

に來り、宣祖に謁せんとす、韓王喜んで引見す、鍊光闕下に伏し、泣て曰く。

君父播遷す、臣子豈敢て自ら安んせんや。

闕を下り、糞を公廡の下に敷いて露宿し、且夜軍吏を指揮して糧を集め、戎器を繕い防守の計に汲々たり、然れども軍備未だ完ならず、時に我軍宣祖を追ひ開城に殺到す。王又出て走る。軍吏風を望んで四方に奔竄し、令を發するも亦一人の應ずる者なし、茲に於て左右鍊光を諫めて曰く。

暫く軍の銳鋒を避け、徐ろに後計を爲すも亦可ならざるや。

鍊光是を聞て、色を正し怒つて曰く。

我れ封疆の臣となり、死すとも尙ほ避けず。

大喝、部下を叱し、乃ち朝服を着け、印綬を手にし床座に移る。既にして府の門外震騒し、我軍先を争ふて突入し、直ちに鍊光を捕へ、先づ其の指を切て降服を勸む、鍊光目を張り、憤慨し我軍を罵嘲して止まず。我軍遂に如何ともする能はず其の首級を上げ、頭を樹上に懸けて梟す、

子、賀孫、質孫其の骸骨を收めて京畿道長潭に葬る、遺篋中絶命の詞あり曰く。

淮山礫々、淮水滄々、孤城踰闕、事與心違、萬古長夜、知我者誰、温序有魂、外往從之。

讀む者皆泣く、鍊光斬らるゝの日、其妾床後に立つ鍊光顧みて是を去らしむ。

妾の曰く。

公は國に死し妾は公に死す其義一なり。

我軍中に來る、我軍直に是を斬る、茲に於て開城陥落し我軍亦北に向ふ。

(十) 文祿役と平壤 小西行長の大敗

文祿の役、三道の我軍連戦破竹の勢を以て城砦を抜き、清正一軍を率ゐて會軍に二王子を虜にす。小西行長等の諸將、韓王を追蹶して平壤に至り、大同江に對して陣す。

平壤城中には韓王宣祖、群臣を引見し、明に援兵を乞はん事を議す、議論百出又た禁すべからず。

時に小西行长奸智を弄し、韓王と和を講じ、以て直に明に入らんとす。一日練光亭上より敵の我軍を見るに、行长の陣中より小具足の一武者、竿頭に紙片を狭み是れを砂上に樹て、軍扇を開き、亭上の敵を招くもの如し、韓の宰相柳成龍望見し、直ちに火砲匠金生麗なる者を使はし持ち來らしむ、生麗即ち小舟に棹して至れば、武人刀を帯びず、生麗の手を握り極めて感勸なり、而して書を生麗に附して送る、生麗書を得て歸り之れを宰相に致す。

書に曰く。

朝鮮國禮曹判書李公閣下に上ると、蓋し是れ調信及び僧玄蘇より李德馨に與ふるの書にして、其の大意、即ち德馨を見て和を講せんと欲するにあり。

茲に於て德馨亦た扁舟に棹し調信、玄蘇等と相見へんとす、時に明の萬

曆二十年六月九日なり。即ち我軍よりは柳川豊前守調信、禪僧玄蘇の兩人、亦扁舟を出して、德馨と大同江の中流に相會す、而して相勞問する事平日の如し

玄蘇先づ云つて曰く。

抑も我國の大軍を動かすや明國を制せんが爲めにして、只貴國に道を借るのみ。

德馨答へて曰く。

吾が國は即ち大明の屬邦なり、何んぞ倭軍に道を借さんや、速かに軍を却け而して後和を議せん。

調信忽ち怒つて曰く。

咄ッ、我が和を議せんとするは只貴國の憐れむが故のみ、何んぞ軍を却けて和を議せん。

德馨又た曰く。

然らずんば我れ之れを聞くを得ず。

互に目を怒らし直ちに船を返して分る。

行長議のならざるを聞くや大いに憤り、直ちに平壤を討たんとし、即ち宗義智と兵を合せ江東の岸上に陣を張り、一舉平壤を掩撃せんとす。

此の夕平壤中の韓群臣等遙かに之れを望見し、百官戰慄上下顔色なく、韓王宣祖亦惶惶を發して寧邊に蒙塵す。大臣崔興源、俞泓、鄭徹等僅かに扈從す。左相金元帥、李巡察、元翼等留まりて平壤を守る。

即ち左相金元帥李巡察及び宰相柳成龍等練光亭上に居り、本道の監司宋信愼は大同門を、門樓の兵使李潤徳は浮碧樓以上江灘を、慈山郡守尹裕俊は長慶門を、何れも能く固守すと雖も、城兵士卒民夫を合せて僅かに三四千、城堞に分配して部伍明かならず。

而も駕一と度平壤を去るや、其の混亂云ふべからず。分配の指揮亦宜からずして互に相喧騒し、別に衣服を松樹に掛けて疑兵と云ひ、以て行長が軍に備ゆ。

城中より江を隔て、望めば我兵亦甚だ多からず、東大院の岸上に一列

の陣を聯らね、紅白の旌旗大同江の川風に翻つて、敢て動かざるもの、如し。時に十餘騎我陣中より現はれ羊角島に向つて江に入る、水馬腹を没し皆輿を按じて並列し、將に大同江を渡らんとす、而して猶ほ堤上に三々五々我軍の往來する者あり、日光大劍を照して閃々、敵亦敢て出でず。別に銃卒六七小銃を以て江邊より敵に向つて放つ、銃聲甚だ壯にして彈丸亦江を越へ、遠きは大同館に至り瓦上に落ち、近きは柱樓に碎けて深く入る事數寸、城中震撼す。

我軍中より赤具足を着せる一武者、小銃を携へて江邊に現はれ、遙かに練光亭上に諸將の會座するを望見し、沙濬に立つて彈を練光亭に送る、亭上の二人銃聲に應じて斃る。

柳成龍軍官姜士益をして防牌の内より片箭を以つて矢を送らしむ、矢沙上に飛來すと雖も我軍に亦一人の負傷者を出さず。茲に於て金命元射を善くする者を選び、快船に乗じて中流に出で我軍を射る。敵船中より玄字銃大箭椽の如きを放つ。箭飛で江を過ぐるや、其勢大にして我軍驚き

仰視し、其の地に落つるや争ひ聚つて之れを見る。

我軍大同江畔の沙上に駐屯し、分つて十餘營となし草を結んで幕となし日を過す事茲に累日、未だ江を渡るべからず、而かも敵の外出を思はずして警備頗る怠る。敵將金命元城上より之れを眺見し、我備なきを知るや、夜襲を以て逆撃すべしとなし、精兵千四百餘騎を擇び、高彦伯をして之を領せしめ、浮碧樓より綾羅渡を下り、潜に舩を以て渡り、三更に至り全軍相共に事を舉げんと約し、而して時の至るを待つ。時至るも全軍機を失して渡るを得ず、渡れば既に味爽なり。行いて諸帳中を見るに我軍猶ほ未だ起きず。敵大聲呐喊、我第一陣たる小西行長の營を急襲す。我軍大いに驚き陣中忽ち亂れ、甲を着るに隙あらず、狼狽して敵に打たる、者數百人なり。隣陣なる黒田、小早川等小西が陣の急襲を聞くや、蹶起將卒を督し銃を連ねて敵を迎撃す。茲に於て敵將に破れんとす。時に敵軍より士兵の將任旭景なる者、戟を舞はして我兵を斬る事數を知らず。小西行長遙かに之を眺め、馬を進め槍を上げて大聲任旭景に迫る。

任亦馬を回し戟を提げて行長に向ふ、鎗戟相打ち馬鞍爲めに濕ふ。一迎一撃、一行一去、戦ふ事少時にして任遂に打たれて馬より落つ。敵將高彦伯之を眺め、馬を反して逃走す。

此の戦に於て我軍將に敗走せんとし、軍馬三百餘頭空しく敵の手中に落ちんとせしも、幸にして黒田、小早川の兩將馬を陣頭に立て、士卒を麾いて迎撃能く戦ひ、敵遂に敗走す。我軍亦追撃甚だ急にして敵舩に登るの隙なく、舩人亦我軍を恐れて舩を舩する事能はず、敵兵の河に投じて死する者甚だ多し、餘衆漸く玉城灘より流れを亂して渡る。我軍始めて江淺くして渉るべきを知り、其夕全軍皆渡る。敵の灘を守る者眺見するも能く一矢を放つ者なく、我軍の渉るを見て四散す。茲に於て我軍一舉城外に迫るも、城中の警備あるを疑ひ、遅回して進むを得ず。其夜斗壽、金命元門を開いて、盡く城中の人を出し、軍器火砲を風月樓の池水中に沈めしめ、夜に乗じて普通門より順安に走る。我軍之れを知らず、従事官金信元獨り大同門を出で、舩に乗じ江流に遡つて江西に走る。翌

日我軍牡丹臺に上り城中を望見し、既に其の空しきを知るや、總軍等しく城内に入り、直ちに各城門を嚴守し平壤城全く陥落す。

我軍平壤城を占領し敵を北方に追ひ、小西行長、宗義智二萬餘人を以て城を守り、大友義純、黒田長政、久留米秀兼、小早川隆景等京城、平壤間の要塞を守る。事あらば乃ち首尾相應せんす。

此の秋に當り韓王救を明に乞ふ。明帝大に驚き、直に遼東の軍將祖承訓及び史儒の兩將に命じ、精兵三萬人を領して赴き助けしむ。兩將軍を領して鴨綠江を渡り、義州に到らんとす。時將に七月の候に屬し、霖雨甚だしくして兵を進むる事容易ならず、即ち平壤城の北五十餘里安定館に止まる。韓王大いに喜び柳成龍を使はして明軍を勞らう。承訓は遼左の勇將にして屢々北虜と戦つて功あり。

彼れ嘉山(平安北道)に至り人に問て曰く。

倭軍未だ平壤にありや。

人答へて曰く。

猶あり。

承訓酒を舉げ天を仰ぎ祝して曰く。

倭軍猶未だ去らず、天我をして大功をなさしめよ。

祝し終つて哄笑一番。

賊尙はあるか、此の行我必ず、大功を奏せん。

柳成龍傍より諫めて曰く。

將軍の言然らざらん、我倭軍を見るに勇壯尋常の及ぶ處にあらず、利劍骨を切る事草の如し、軍器には大小銃器備はれり、人壯にして馬強し、將軍輕舉敵を輕んず勿れ。

承訓聞かすして即ち三更軍を發し。史儒を先鋒とし順安より進みて平壤の我軍を逆襲せんす。

七月十九日明兵平壤城に迫る。

時に天大に雨ふり城上の我兵備を怠る、明の先鋒七星門より入る、城内狹路委巷多くして馬蹄を屈ぶる能はず、小西行長、宗義智敵の來襲する

七月十九日明兵平壤城に迫る。

時に天大に雨ふり城上の我兵備を怠る、明の先鋒七星門より入る、城内狹路委巷多くして馬蹄を屈ぶる能はず、小西行長、宗義智敵の來襲する

と聞き、城壁の險隘により小銃を發し、矢を放つ事雨の如し。

先鋒の明將史儒先づ銃丸に當りて馬より落つ。木戸作右衛門、丸茂新五郎、白田清兵衛、荒木圓書等皆行長旗下の士にて一人當千の勇士なり。精兵數百人を廳き急に城門を開き、大刀を揮つて敵軍に突撃し、激戦縦横敵を切る草を薙くが如く、敵忽ち潰走せんとす。雖も、前後相混亂し加ふるに連日の霖雨泥深くして進退自由ならず。行長、義智等機に乗じ門を開いて突出す、敵の討たるゝ者數を知らず。承訓亦馬を反して走り安定館に至る。翌日行長數千騎を領し急に安定館を襲ひ殘餘の敵を織す。承訓漸く身を以て逃れ走つて遼東に歸る。抑も承訓初め兵三萬を提げて至るも、茲に於て共に遼東に歸る者繼に五六千に過す。

小西行長、宗義智、明將承訓等の大軍を撃退し、さらに全軍の銳氣を養ひて大舉北進せんとす。

時に明の遊撃將軍沈惟敬なる者、黃袱を以て背を裹み、一人の從者に負

はしめ、騎馬普通門より入り、行長と會見せんとす。行長之れを聞き城北十里の外、降福山下に至り惟敬と相會す、惟敬は七ヶ條の誓約を以て和を講せん事を云ひ、而して五十日間を以て明帝の確答を得るの期となす、行長之を諾す。

而も猶ほ彼我の協約に曰く。

期間内に於ては日本軍は平壤の西北十里の外に出づる事を得るも、擄掠する勿れ。韓人亦十里の内に入るも日本軍と闘ふべからず。

境界に木標を樹て相別れて去る。乃ち休戦を約す。

明の萬曆二十年十二月、我文祿元年、明大兵を發して大いに我軍を掩撃せんとし、李松如を以て提督となし、兵部右侍郎宋應昌を以て經略となし、兵部員外郎劉黃裳、及び主事袁黃を以て贊畫軍務となし遼東に駐る、如松、三營の李如栢、張世爵、揚元及び南將駱尙志、吳惟忠、王必迪等の兵四萬餘を卒ひて鴨綠江を渡る。

一説に曰く。

如松十二月月上旬兵十五萬人を整へて猶ほ少なしとなし、さらに漢南より三萬人を徴し、其他合せて總勢二十萬、山海關を出づとも云ふ。行長少しも之れを知らず、只だ惟敬の契約期間に明帝の答書を齎さるるを怪む。十二月惟敬再び平壤に來り明帝の和を容るゝを云ふや、行長等大いに歡び、玄蘇をして報書せしむ。玄蘇記後一絶を賦して贈る、乃ち。詩に曰く。

扶桑息_レ載服_二中華。

四海九州同一家。

喜氣忽消_レ寰外雪。

乾坤春早太平花。

然るに十二月如松密かに安州に至り城南に營し策戰の計畫をなす。副總兵查大受先づ順安に進む。平壤の我軍未だ之れを知らず日夜宴を張る。石田三成密かに心痛し、行長をして守を嚴にせしむ。翌年正月四日、明大兵を出せしと聞き、行長初めて驚き平好官(此人名詳ならず)をして二十餘騎を卒ひて斥候せしむ、查總兵誘つて是れに酒食を供す、我軍何の故なるかを知らず。忽ちにして四邊伏兵突起し、我斥候を掩撃して幾んど

全滅し、僅に三人難を逃れて平壤に歸る。我軍初めて敵の大舉逆撃し來るを知るや、直ちに使を大友義純の陣に送り、赴き助けしめんとす。

當時敵の大軍己に肅川にあり、日將に暮れんとする頃、如松馳せて順安に到る、諸將之れに従ふ。翌朝進んで平壤の我軍を攻撃す。時に正月五日也。

城中の我軍總て二萬八千人、小西、宗、石田、大谷、増田等の諸將各々火箭を飛ばして防ぐ、敵普通門、七星門を攻る事甚だ急なり、敵の火箭至る所に發火し防戰最も力むと雖も大友の軍未だ至らず。砲聲天に響き火箭空に布きて織るが如く。烟氣漂々天を蔽ふ。敵將駱尙志、吳惟忠等邊兵を提げて城壁に蟻附す。前者轉落せば後者又た續く。楊元、張世爵は進んで牡丹臺を陥落せんとす。我軍奮戦力闘すれども敵は雲霞の如く殆んど其の兵數を知らず。宗義智衆を排して出で、我今敵を破るべしと。行長大いに喜び精兵三千餘人を與ふ、即ち義智大刀を提げ城門を開いて敵陣中に馳突す。

敵大いに驚き討たる、者數を知らず。然れども敵は大軍にして容易に退かず。翌日明兵三方より関を合せて肉迫し来る。漢南勢雖も勇悍にして七星門を撃破し城中に亂入す。我軍遂に如何ともする能はず。如松陣頭に馬を進め、頻りに全軍を指揮す。我兵己に守るの勇なく日も亦將に暮れんとし、如松鐘を打ち軍を集め、明日一擧城を陥れんとす。我兵の死する者實に千六百餘人。而も義純未だ至らざるなり。城遂に支ふる能はず、行長等其夜密に氷上を越へ、六千餘人の軍兵と共に平壤城の守を棄て、京城に敗走す。

(十一) 二王子の捕虜 敵將の反逆

文祿の役、南韓の敗報、日夕京城に達するや、城中震駭、民其の塔に安んせず、韓皇宣祖亦臨海、順和の二王子等と共に北走す。二王子始め江原道に蒙塵し、行く／＼義兵を募るも、我軍追蹙日に益々急にして、侍臣等戦々恟々、王を勸めて北韓に走り、會寧府に至りて城將鞠景仁に

寄る。鞠は地方の豪族にして、二王子を城中に奉迎し、我軍の至るを待つ。時に清正二王子を追跡して、將に會寧府に至らんとするや、鞠景仁遙かに清正の威風を聞き、大に驚き、部下の諸將を召し、軍議を開いて曰く。

吾聞く、日本軍の將、鬼將軍清正、遙に二王子を追尾して、將に會寧府に来るべしと、清正にして一度此の地に到らんか、我等の能く防ぎ戦ふ處に非ず、如かず速に二王子を縛し、以て清正の軍門に降らん。諸將鞠の言を聽いて、愕然色を失い、皆其の言を然りとす。二王子、及び從臣等を縛し、清正の來るを待つ。

清正即ち到るや、先づ鞠は使者を清正の陣中に送り、其の遠來の勞を慰め、而して降を乞ひ、猶ほ告るに王子捕縛の事を以てす。清正大に喜び、直ちに降を入れ、通辨後藤治郎なる者を使はし、速かに捕虜を出さしむ。治郎は韓人にして能く日本語を爲す者、清正通辨として常に陣中に侍せしめ是れを愛す。治郎即ち行いて鞠に清正の旨を通す。

鞠答へて曰く。
王子、及び諸官人皆縛せりと雖も、清正入城するに非んば渡し難し、且つ城中今や兵食盡き、又奈何ともす可からず、速かに糧食を整へ入城すべし。

清正之を聞き、直ちに山海の珍珠を携へ、木村又藏、飯田覺兵衛等の近臣十餘人を率ひ、別に酒肴を携へ城中に赴く。時に清正鎧上に羽織を着し、軍扇を振り、威風堂々たり。鞠等王子を縛して清正に見参す。茲に於て清正直ちに王子及び侍臣等の縛を脱かしめ、携ふる處の酒肴を出して一同を勞ひ、而して別に鞠景仁以下の將卒に金銀を與へ、其の功を賞し、猶ほ事を名護屋に急報す。

清正漸く其の目的を達し、兩王子を輿に乗せ、將に咸興に歸營せんとす、時に侍臣等王子の或は害されん事を恐れ輿を圍んで哭泣す、清正將士に命じて會寧を發せしむ、彼亦武装之に従ふ。途にして漆溪君、尹卓然等病と稱して岐れ、深く別害堡に入る、李塹は始め王子に従はず江原

道に留まりしより、暫く此の難を免るを得たり。

(十二) 清正と間島 兀良哈外馬如龍

清正、咸鏡北道に軍を進めて會寧府に至り、臨海、順和兩王子を擒にす。

時に兀良哈の軍此の事を聞き、朝鮮は我隣國なり、今や日本の軍勢至り、而して其の一隊は既に會寧府に來り、韓の兩王子を擒にすと、是より我國を犯すや必せり、空しく手を束ねて待たんよりは、速に出て日本軍の不意を襲ふに如かずと、即ち數萬騎國境に來襲す。清正大に怒り、兩王子を咸興府なる鍋島尙重の陣に送り、自ら兵に將として發せんとし、會寧府の降將鞠景仁、手兵五百餘騎を以て先導す。行程五里餘にして敵と戦ひ、大に之を破り、追撃する事三里餘にして一城に達す。城、背後に山を負ひ、要害甚だ嚴なり。清正選兵を出し、城後の山に攀ぢ登らしめ、大石數個を轉落せしむ。城門忽ち碎け、人馬の死する者多し、清正機に

乗じ諸軍に先頭して進み、城直に陥落す。追撃益々急にして、行くく十三ヶ所の城を抜く。

途に一要害あり、清正が勇將森本儀太夫、貴田孫兵衛城門に挺身肉迫、一躍城中に亂入せんとす。時に城中より長身虎鬚、堂々たる勇士二人現はれ、互に戟を舞して、森本、貴田に迫る。儀太夫直ちに其の一將と格闘す。孫兵衛は槍術の達人なり、大身の槍をしごき、他の一將と戦ひ、漸くにして敵の綿嚙を刺す、敵轉倒し、劔を孫兵衛に投ず、孫兵衛爲めに左肩に負傷す、儀太夫亦漸く敵の首級を得たり。

敵の二將の斃るや、清正馬を躍らせて城中に突撃す、城遂に陥る。之より兀良哈内又た我軍に向ふ者なし。茲に於て清正軍を反して安邊府に至らんとし。途濟州の海濱を通ず、通譯を呼び、安邊道の行程を問はしむ。

漁民答へて曰く

安邊は將に近し、貴軍は日本勢ならん、さらば此の海岸より遙かに見

ゆるは、即ち日本の名山なり。

清正言を聞き、欣然として云つて曰く。

或は然らん。

直ちに馬を下り、槍を杖突いて瞥見する事數時、手を合せて再拜す。軍中傳へ聞き、互に故郷の天を眺む。萬里異域外征の將卒、爲めに暫時望郷の袂を絞る。

清正の兀良哈を撃しは、會寧を北に去る八里以上の地なりと云ふ、之を按ずるに、今の豆滿江附近より間島なり。尙ほ兀良哈なる名は、何れより來りしやと云ふに、昔時(二千餘年前)扶餘北韓に其威を逞ふせし、時、鮮卑族は滿州の野に猖獗を極め、諸方蠻族皆其の旗下に従はざるなし、依つて其の勢に乗じて扶餘と戟を交ゆる事數度、扶餘敵を呼ぶに互討判、即ちオランカイと云ひ、判は胡狗の儀にして、互討は想の意なり、而して女眞も亦オランカイと稱せられたりと云ふ。

(十三) 清正の虎狩り 小姓の仇を討つ

征韓の役加藤清正の虎狩りは、巷間の走卒に至るも猶ほ知らざるなきも、清正が其行に就ては多くを云ふ者なし、されば之れ亦隠れたる史蹟か。

抑も、清正一隊の將士を卒ひて、咸鏡道に二王子を擒とし、全軍無双の高名を現せし後、江原道春川附近の城砦、金山、橋中の守將、加藤與左衛門及び九鬼四郎兵衛、天野助左衛門、山内甚三郎等、韓將元豪、鄭大任、權應珠等の諸將に包圍せられ、惡戦日に甚だし。清正之を聞くや、部下の諸將と共に、自ら一萬餘騎に將として來り援け。急に撃つて、韓兵の包圍を破る。大任は森本儀太夫に討たれ、應珠は井上大九郎に捕縛され、元豪亦た清正に刺されて斃る。是に於て韓の諸軍決河の如く潰走し、清正勝関を上げ軍を勞い山麓に野宿す。

其夜清正が陣後の山中より、一匹の猛虎現はれ、馬を浚つて行く處を

知らず、軍卒等大に恐る。清正が小姓に秋月左膳なる青年あり、清正常に近侍せしめて愛顧す。左膳亦夜中猛虎の害に遇ふて斃る。清正大に怒り、翌朝を期して猛虎を討たんとし、曉より數千の軍兵をして山を包圍し、鐘鼓を鳴らして狩る。然れども猛虎出ず、漸く午下に至り、叢中より一匹の猛虎現はれ、其吼ゆる事百雷の如く、猛進して軍兵に迫る。軍兵大に恐れて遁走せんとす、清正傍觀軍兵を叱咤し、靜に銃を携へて岩上に立つ、猛虎狂暴將に清正に迫り、岩下十四五間の位置に突進し來る、近侍の士等狼狽、百餘人銃を揃へて發せんとす。清正之を制して、神色自若たり。猛虎益々接近し、口を開き、一躍前脚を以て清正を撲たんとす。清正銃を上げて發す、彈丸口中を貫通し、後頭部に入り、猛虎遂に斃る。尙ほ附近を狩れども虎影を認めざれば、清正大に歎び、虎を荷つて咸興の銅島尙重の陣に歸る。

之依觀是、江原道春川附近、今日尙ほ虎害甚だしきを聞く、清正が猛虎を獲しも亦此地なりと云ふ。

(十四) 亢平山の戦 日韓勇士の格闘

鍋島尙重、加藤清正と共に太子を追ふて深く北韓に入り威興に陣す。其の北方八十里に亢平山あり、韓將李希徳、金義元數万騎を以て守る。尙重行いて之れを討たんとし、即ち手勢四千餘人を領して攻む。韓軍城により矢石を飛ばし大木を投じ、以て我軍を防ぐ、我軍爲めに躊躇す。敵機を見て城門を開き、我軍中に突入す、我軍支ふるを得ず將に潰走せんとするや、尙重望見して大いに怒り、自ら騎して大槍を上げ、大聲叱咤敵軍中に突撃し、右を討ち左を斬り奮撃突戦敵の十餘人を斃す。茲に於て軍氣大いに振ひ鍋島平左衛門、小川市左衛門、水野、大木、千下、藤井、南里等の一騎當千の勇臣櫛を並べて奮戦す。士卒爲めに決死を以て敵に當る。李希徳先づ馬を返して走り、全軍遂に潰ゆ。軍中に衣笠宗兵衛なる士あり、敵の首二級を得、小河の堤上に添ひて馬を進む。忽然として一敵將あり、身の丈七尺、眼光炯々人を射る、虎

群蓬々として相貌鬼人の如し。手に短劔を持し堤上より宗兵衛を見るや、急に劔を脱いて討たんとす。宗兵衛亦大刀を懸して戦ふ、敵將巧みに其の劔刃を避け、長袖を擧げて宗兵衛が刀に纏ひ、腕を延べて宗兵衛を捕ふ、宗兵衛遂に落馬す。茲に於て敵將宗兵衛を腋下に挿み水邊に至り、彼の頭を水中に浸す事數度。宗兵衛脱せんとするも力及ばず、苦悶水を飲む。敵將又た宗兵衛を水中より上げ其の面を眺めて笑ふ。時に田路勘四郎なる士あり、強弓の精兵なり、會々堤上を行く、途に之れを眺め大に驚き、直ちに背後より敵將の肩を斬る、宗兵衛漸く虎口を逃るゝを得たり。鍋島が總軍遂に亢平山を陥る。

(十五) 碧蹄里の戦 小早川隆景の勇戦

小西行長平壤城に圍れ、防戦甚だ力と雖も新進の明軍、攻撃日に益々急にして部下將卒の死する者多く、只後援の來るを待つのみ、然るに後營なる大友義純は性怯懦にして、行長の大軍に圍まると聞くや大いに驚

き、蒼皇軍を卒いて京城に退却す。茲に於て平壤遂に支るを得ず行長夜に乘じ城の西門を出で、密かに大同江の氷上を渡つて走る。黒田、久留米等の諸將亦此の報を聞き相議して曰く。

行長既に平壤に破れ、明軍二十餘万追撃長驅我諸軍を攻めんとすと、今や臘月にして寒氣凛烈たり、加ふるに我兵戦に強しと雖も寒氣には克ち難し、敵は戦に弱しと雖も能く寒氣に堪ゆ、而も今此の寡兵を以て新銳の敵に對せば、勝算將に歴々、只だ士卒の多くを失ふを恐る。聞却途次大河ありて容易に渡り難しと。

諸陣軍を出すに躊躇す、而して又た道路の風説に曰く、

明軍李如松既に平壤城を出で南下すと。

茲に於て宗、石田、増田、大谷等沿道の諸將亦各々兵を卒ひて京城に歸る。時に小早川隆景は開城府の要害に陣し、諸將の退却するを見るも敢て動かざるなり。時に浮田中納言秀家京城にあり、行長平壤に破ると聞き、大に驚き使を黒田、久留米、小早川等の陣に走せ、云はしめて曰く。

明軍大舉殺到すと、速に京城に歸り總軍一致共に防禦を議すべし。

小早川隆景大いに怒つて曰く。

我海を越へて此地に来る、原より生還の望なし、今や明軍大舉襲來すと雖も、何ぞ恐るゝに足らんや、我は只戦ふて屍を戰場に晒す、之れ只老後の思出なり、汝歸りて速かに事を中納言に傳へよ。

使者之れを報す。時に諸將既に京城に集まる者報を聞いて驚く。石田、増田等心中密かに忸怩たる處あり、即ち相議して曰く。

小早川等退陣せざらんか、必ず一大打撃を蒙るや明かなり、さらば彼如何に應せざらんも狂げて諸將の意に従はずべしと。

是に於て大谷刑部をして行いて説かしむ。刑部元來辨舌の士なり開城の隆景の陣中に赴くや、先づ其の要害を視、而して云つて曰く。

今我此要害を見る。其の堅や驚くべく、其の整備や古今に比なし、然れども熟々考ふるに今や明の大軍二十萬、長驅殺到すと聞く、寡を以て衆に當る既に勝敗の決あり。然り而して開城の地や狭くして且つ四

西山を以てす、防ぐに難くして攻むるに便なり。前日宣祖此地に走らば、我軍一舉開城を攻む、殆んど能く防ぐ者なし。今二萬の軍を以て敵の二十萬に當る、名將剛士を以つてするも、猶ほ能く其の捷算や明らかならざるなり。足下もどより智勇絶倫の士、此の寡兵を以て戦ひ、一旦急あらば何にを以て豊公に答へん。死は易くして生は難し、足下幸ひに我が言を入れ、京城に敵の鋭鋒を避け、而して後日再び戈を交ゆるの時、先陣以つて今日の怨を雪ぐ亦何ぞ後しとせんや。

隆景も亦遂に否むを得ず。

我今足下の言に従ふ。後日戈を取るの時、我必ず先陣たるべし、足下之れを證するや。

刑部言を聞き呵々大笑して曰く。

然り足下何ぞ憂ふるに足らんや、我必ず神盟に誓つて之れを爲さん。

茲に於て隆景、黒田、久留米、の諸將と共に軍を卒ひて京城に退く。

刑部の辨漸く隆景を説き、黒田、久留米等の諸將と共に軍を卒ひて開

城より退くと雖も。然れども隆景心中密かに憂ふる處あり、故に軍を先づ京城の西、高陽郡碧蹄里に停め、自ら少數を以て京城に入る。時に李如松大軍を領し、正月二十五日坡州に来る。我諸將之れを聞き大いに恐れ、城中日を連ねて軍議すと雖も決せず。

浮田秀家、石田三成等の曰く。

今や我軍明の大軍と戈を交へんか、野戦に於ては捷算難し、如かず、諸門を嚴守し以て籠城防禦すべし。

座中に立花將監宗茂あり。忽ち座を蹴つて立ち、刀柄を握り目を瞑らし、色を作して曰く。

咄ッ。何等の言ぞ、敵剛なれば吾先づ馬蹄に懸けん、誰れか退いて京城に籠城する者ぞ。

隆景又座中にあり、直ちに馳せて陣中に歸り先づ軍を分つて備ふ。小早川の勇臣粟屋四郎兵衛、村上彈正、野島掃部三千人を以て先鋒たり。立花宗茂、久留米秀包、毛利元康等八千餘人を領して右方三丁を隔て、陣

し、之れを奇兵と稱す。本陣は隆景自ら一萬三千餘人を以て守り、旌旗北漢山脈に翻つて燦然、二萬の人馬皆勇む。

二十六日東天漸く紅を潮し、朝靄濛として寒風凜烈、時に斥候の者馳せ歸つて明軍の來るを告ぐ。隆景急に全軍に命じて敵を背後にして陣せしむ、諸將皆是れを怪しむ。軍中野田主膳なる者あり侍大將たり。主膳焼飯十個餘を出し之れを木葉に盛り以て隆景に勸む、隆景大いに喜び採つて五箇を食す、主膳亦二箇を食し餘を近習の士に與ふれども一人の能く食する者なし。明軍既に里餘に迫る、而も隆景未だ動かざるなり。

時に黒田長政歩卒六七人を領し隆景が陣中に来り。

足下の勇真に羨むに堪へたり、吾幸にして此の戦に加ふるを得ば光榮なり。

隆景謝して曰く。

足下の言多謝す、先鋒の軍粟屋が兵寡なり、幸ひに足下の來援を得ば幸甚なり。

長政喜色滿面に溢れ。

公吾が言を入るか、速かに赴かざるべからず。

走せて粟谷が陣に至る、粟谷大いに喜び全軍の士氣爲めに震ふ。

之より先き李如松我軍を追ふて坡州に至り、翌日副總兵查大受及び韓將高彦伯を其の先鋒となし、兵數百を領し進んで礪石嶺に至る。隆景茲に於て急に軍を回轉し、先づ銃隊に命じて射撃せしむ、砲煙漠々天を蔽ひ銃聲轟々地を動かす。長政水牛の兜を頂き大槍を提げ馬を敵軍中に走せ縦横奮戦敵を斬る事草の如し、士卒爲めに勇氣百倍し、各々刀槍を舞して敵軍中に突撃す。查大受高彦伯等亦能く戦ふ。我兵皆三尺乃至四尺の大太刀に長柄を續ぎ、一見薙刀の如くにして非ず、其の精銳能く敵の甲を切り冑を斬る事容易なり、敵兵爲めに大いに恐る。

李如松時に後陣にあり、之れを開き馬を躍らせて查大受等を救ふ、惠陰嶺に至り馬蹶きて地に墮つ。時に我軍礪石嶺を後にして匿れ、別に數百人を出して敵情を偵察せしむ。如松望見し急に軍の兩翼を放つて我偵察

隊を包圍せんとす、我兵嶺を下り將に敵と相會はんとするや、久留米、毛利の奇兵八千餘人、山後より急に嶺上に出で、以て敵の不意に乗せんとす。敵之れを見て大いに懼れ敢て戦ふ者なしと雖も、時既に刀乃相接して又解くべからず、而も如松の軍は皆北騎にして火器を携へず、只短劍の鈍劣を持つのみ。我軍急に之れを撃つ、陸景亦一萬餘人を卒ひ正面より殺到す。

李如松前軍の急なるを見、直ちに後軍を發せんとすれども、後軍未だ至らずして前軍既に破れんとし、我軍皆死を決して戦ふ。敵の鈍刀は能く我兵の甲冑を斬るに足らず、我兵皆之れを鐵袖に支へて長刀を振り大槍を上げ、愈々益々敵の中堅を突撃す。立花右近將監宗茂は單騎長槍を携へ衆に先んじて敵陣中に馳突し、提督如松を尋ねて戦ひ、遮る者あれば槍を上げて討つ、皆敵する者なし。宗茂亦敵の首四級を馬上の鞍に結び、敵衆之れを見て皆恐怖す。陸景亦如松を獲んとして頻りに軍を進め、躬ら亦槍を振つて敵を刺す事十餘騎。黒田、久留米等も亦共に大いに戦

ふ。時に京城の我軍報を聞くや、勇氣急に百倍し。浮田中納言秀家、岐阜中納言秀信、丹波中納言秀勝、木村常陸介、糟谷内膳正、長谷川藤五郎、中川右衛門大夫、淺野左京太夫等總軍八萬餘人、皆軍を進めて到り、大いに明軍中に突入す。茲に於て明軍大に亂れ討たる、者數を知らず、全軍爲めに潰走せんとす、李如松も亦頻りに軍を進めて戦ふと雖も死する者既に半を過ぎ又た奈何ともするを得ず。

陸景の臣に井上五郎兵衛なる士あり、武勇軍中に勝る、此の日亦長槍を撃して頻に戦ひ亂軍を馬蹄に破る。偶々如松五郎兵衛と會合す、五郎兵衛其如松なるを知らずと雖も、其の軍裝の常ならざるを見、忽ち馬を躍らして追ふ、如松大いに驚き轡を返して走らんとす、馬蹶いて落つ、五郎兵衛槍を延ばして刺さんとするや時に明軍二百餘人急に五郎兵衛を包圍して迫る。如松隙に除じ漸く馬を求めて走る、是に於て敵の全軍潰れ、殘兵三千餘人漸く坡州に逃走す。之より明軍我軍を恐る事全く神の如し。

(十六) 龍山倉庫の焼失 加藤遠江守の憤激

文祿二年正月二十七日、小早川隆景碧蹄里に一度び明軍を撃破するや、明軍坡州に潰走し又た來り戦ふの勇なく、大將李如松將に敗軍を卒ひて明に歸らんとす。我軍の諸將京城に歸り直ちに明軍を追撃せん事を議す。議論紛々として決せざるなり。

時に京城の西南、漢江河畔には我軍先に糧食庫を建て、宏大なる事數十間、貯ふる處の糧米實に千餘石なり、以て我全軍の糧となす。浮田秀家又龍山に陣し、糧庫を建て數萬石を貯ふ。明軍の將查大受、夜中部下若干を卒ひ、潜行して龍山に來り、我糧庫に放火す。炎煙天に漲り全軍の將卒大いに狼狽し、力を盡して鎮火するも火勢猛烈、加ふるに寒風煙焰を煽つて近寄るを得ず。遂に倉庫の全部灰燼と化し全軍の落膽云ふべからず。而して日に其の缺乏を告げ、重ぬるに従つて愈々窮す。茲に於て諸將相會して其の方法を議す。

浮田秀家の曰く。

今や糧食飲乏久しく京城に陣せば、明軍再び來らん、然る時我に食ふの糧食なくして何ぞ能く戦ふを得んや、速かに全軍釜山浦に退き、再び運送の糧食を得て重ねて進撃するも亦可ならん。

座中に加藤遠江守三保あり。

直ちに膝を進めて曰く。

今や清正、尙重深く進んで北韓にあり、王城食乏しきとて何んぞ加藤、鍋島を捨て、退かんや、食乏しければ加藤、鍋島に力を合せ、何んぞ糧を敵地に取らざるや。

秀家之れを聞きて曰く。

食既に盡く又た如何せん。

三保大聲罵つて曰く。

咄ッ、中納言、食無んば砂を食へ、吾は今より清正を援けん。席を蹴つて立つ。

黒田、伊達、久留米、立花等の諸將大に三保の言に賛じ、直ちに兵を卒ひて出發せんとす。時に清正の使者來り告げて曰く。清正明日歸着すべし。諸將茲に於て止む

(十七) 巨濟洋の船戰 我海軍の大敗

文祿元年四月、我海軍の將九鬼義隆、藤堂高虎、脇坂安春、加藤嘉明等の諸將巨濟島附近に至るや、慶尙右水使元均兵船を撃へて待つ、高虎一夜密かに敵船に進み寄り、急に撃つて小船三艘を奪ふて歸る。元均大に驚き是より備を嚴にして敢て出でず。我諸將義隆が陣中に集り作戰を議す。

加藤左馬介嘉明曰く。

今日の戰は速戰にあり、急に敵を攻むるにしかず。

衆敢て答ふる者なし。

左馬介密かに旗下の勇士塙團右衛門と謀を合せ、一日物見船と稱し、團右衛門部下數十人の選兵と共に、波濤を切つて急進す。左馬介の部下遙かに之れを見て、蛇の目下り藤の船標は是れ我軍なりと、急に艦を並べて進む。大將九鬼義隆望見し。

左馬介に云つて曰く。

貴下の兵船皆軍法に反す。

左馬介欺いて曰く。

我兵何の爲めに進むを知らず、乞ふ直ちに制せん。

左馬介亦兵船を出して追尾す。然れども初め左馬介、團右衛門と密謀する處あり。茲に於て左馬介大聲船軍を止めんとすれども、團右衛門等聞かすして益々船を進め、既に敵船と相去る事四五間。互に矢を飛ばして戰ふ。

時に左馬介大刀を磨し、敵の船中に躍入す。家臣河合壯太夫、同壯治

郎、狹野作左衛門、鍵掛武助等其他猛勇の士數十人、亦續いて敵船中に突入す。敵兵狼狽なす處を知らず、皆船底に隠る。圍右衛門及び佃治郎、加藤權七等も亦敵を斬る事數を知らず。

此の戦に於て、河合壯治郎生年甫めて十六才、奪圍敵を斬る事無數、遂に誤て海中に落ち遂に行く處を知らず。

始め九鬼義隆等左馬介の返り來らざるを怪み、而して左馬介の將に敵と相戦ふと聞くや。直ちに急を全軍に傳へ、急航左馬介等を助け、敵を包圍して激戦頗る壯なり。

元均避易して先づ圍を破つて走る、全軍遂に潰ゆ。

此の役に於て敵船を捕獲する事、實に百餘隻、敵を切る事六千餘なり。

慶尙右水使元均破れて走るや、戰艦百餘隻及び火砲軍器を海中に沈め、部下の裨將李英男、李雲龍等と船四隻に乗じ、奔りて混陽海口に至り、上陸して逃走せんとす。

時に英男元均を諫めて曰く。

公、命を受けて水軍節度たり、敵に相會ふや僅に一戦にして破れ、且つ軍を棄て、陸に逃る、後日朝廷其の罪を按せば、何を以てか之れに答へん、若かず、兵を全羅道に請ひ、敵と猶ほ一戦を試み、勝たずして逃るも未だ晚からざるべし。

茲に於て元均其の言を容れ、即ち英男をして全羅道に遣り、水軍節度使李舜臣に援を乞はしむ。

舜臣曰く。

各々分界あり、朝廷の命令以外擅に境を越ゆべからず。

英男要を得ずして歸る。

斯の如き事五六度。元均猶ほ英男を遣つて援を請ふ事頻なり。

舜臣漸く請を容れ、即ち全羅右水使李億謀と約し、兵船四十隻を率ひて巨濟洋に來り、元均が殘餘の兵と合し進んで見乃梁に至り、我軍と相遇ふ。

之より先き舜臣創めて龜缸を造る木を以て其の上に鋪き、形穹隆龜の如

し、兵士糧夫皆其の内にあり、左右前後多く火砲を載せ、縦横出入梭の如し。

我軍の將士亦相議し、徒らに日を空ふせんよりは進んで敵船を掩撃すべしと、全軍船を進む。見乃梁に至るや、敵の戦艦數十隻、將に逆襲を試みんとするもの、如し。九鬼、藤坂、藤堂、加藤の諸將各々兵船を進めて、敵の船列を粉碎せんとす。旌旗海風に翻つて、刀槍日に閃き、將士腕を扼す。砲聲天に響き、硝煙海を閉ぢ、海若爲めに狂ふ。而して我軍硝煙に乗じて、敵船に突入せんとす。

我軍發砲能く戦ふと雖も、敵は龜缸を連ねて之を禦ぎ、爲めに敵兵の損する者なく、而も敵は矢を放ち我兵の斃るゝ者多し。脇坂安春望見して曰く。

敵船は之れ乃ち我盲船に同じと。

大聲部下を叱咤し、自ら舷頭に現はれ、鎧袖を脱し、鏢を傾け、大刀を以て飛箭を薙ぎ、猛進敵の船間に漕入せしむ。加藤、藤堂、九鬼の諸將

も亦續いて進む。敵の矢に當り或は斃れ又は海中に落ち死する者算なし。脇坂安春自ら熊手を以て敵船に懸け、身を跳らせて敵の船中に入る。家臣小山、岡、池崎、桑原等の勇士、殺いて敵船に躍入し、龜缸の甲板を破り、敵を殺し其一隻を捕獲す。初め敵將李舜臣我船軍と相遇ふや。舜臣の曰く。

此地海狭くして、水淺し、回旋自由ならず、若かず、偽りて退き、敵を海澗に誘ひ一戦にして懺さん。

元均憤怒、直ちに前んで博戦せんとす。

舜臣笑つて曰く。

公、兵法を知らず、此の如き必ず敗るべし。

時に我軍進んで敵を討つ、舜臣旗を振り全軍皆退く、我軍勢に乗じて敵を追ひ、漸く隘口を出づ。舜臣機逸すべからずとなし、鼓を鳴らす事一聲。敵船齊しく船頭を回へし、海中に擺列す、彼我相距る事僅かに數

十歩。舜臣鼓を鳴らす二聲。忽然として龜缸中の大小火砲を我軍に向け連發す。黒煙濛々として咫尺を辨せず、爲めに我船の焚かるゝもの大半。舜臣舷頭に立ち、軍扇を揚げて全軍を麾けば、龜缸左右に開き、元均等の船硝煙に乗じて來襲す。茲に於て我軍の討たるゝ者多く、全軍破れて漸く巨濟島及び釜山に退く。此役に於て舜臣舷頭に立ち、諸軍を指揮するや、飛彈其左肩に中り、流血淋漓腫に注ぐ。而も舜臣苦痛を言はず、戰終り刀を以て肉を割き丸を出す、丸深く入る事數寸。舜臣自若として談笑す、觀る者皆恐る。

我船軍一度巨濟洋に破るゝや又た敢て出でず。

李舜臣之詩

水國秋光暮、 驚寒雁陣高
愁心輾轉夜、 殘月照弓刀

(十八) 碧波亭下の水戰 脇坂中務の奮闘

慶長二年の秋、日本軍再び京城を襲ふとの説あり。漢陽の上下爲めに震駭し、宣祖亦西方に蒙塵せんとす。明將麻貴、副將李如梅等、兵數萬を領し、再び京城に着し、關門外に屯して嚴守す。茲に於て城中の人心漸く安堵するを得たり。然るに十月初旬、釜山浦に屯せし金吾中納言秀秋、使者を諸營に出し云はしめて曰く。

朝鮮の水將李舜臣、古今島附近に來る、軍船を備へ、我運送船を犯して糧食を横奪し、爲めに海上の往來絶ゆ。事既に難事たり、諸軍將に深く敵地に入り、一朝寒氣の迫るあらば、忽ち糧餉に乏しく、其不利云ふべからず。今や幸に山谷未だ降雪なし、速かに釜山浦に退き、春來暖氣を待つて、而して再び王城を攻むるも亦遅からざるべし。諸將夫れ奈何となす。

淨田、毛利等の諸將、直ちに議に贊し、暫時退營して先づ李舜臣が船軍

を撃破し。後患を除き、以つて再び一擧王城を撃つべしとなし、各將軍を従へて要害の地域に退く。即ち清正は蔚山に屯し、行長は順天に入り、尙洲、梁山、大邱、密陽、金海、東萊、泗川等牙營數十里に亘り、連綿として城を構へ砦を築き、以て持久の計をなす。

時に李舜臣珍島に至り、兵船を收拾し十餘艘を得。之より先き沿海の諸人、船に乘じ亂を避る者數を知らず。舜臣の來ると聞き、皆喜悅し相招呼し、遠近集り來る者雲の如く。舜臣之れを軍後に置き、以て軍事を助けしむ。

茲に於て我軍の將、脇坂中務太夫、相良宮内少輔、毛利壹岐守、秋月三郎、中川主馬太夫等、總軍二萬餘人、船兵四百餘艘を率ひ、珍島海峽碧波亭下に至る。

抑々珍島たるや、全羅南道の西南海中の一島にして、大陸を去る事少許、潮流の急なる事實に其の比を見ず。我軍水戦に習はず、頻りに船を進む。舜臣常に潮流を測り、以て我兵船を待ち、而して豫め鐵鎖を海中

に沈め、龜缸を島陰に隠し、別に兵船數十艘を出し我軍を誘ふ。

我軍櫓を急にして追撃し、頻りに銃彈を放ち、火箭を飛ばす。舜臣後陣にあり、戦況を眺め急に令して鐵鎖を引く。我軍の船底既に鐵鎖の上になり、擡夫水夫等頻りに櫓を立て、揖を動かすと雖も、兵船の進退自由ならず。舜臣忽ち精兵を率ひ、龜缸を出して逆襲し來る。我軍狼狽、船列直ちに亂れて、又た奈何とも仕難く、士卒討たる者數を知らず。而して舜臣又た伴り退く、我軍之を追ふて淺水の處に至れば、兼葭繁茂する事林の如く、航路其間にありて、東西を分つべからず。西すれば南に出で、北すれば東に出づ、暗々迷々、我軍大に困む。脇坂中務後陣にありて望見し、之れ敵の吾を誘拐するの策なり、速かに退くべしとて、別に小船を飛ばして案内せしむ。而も我兵船の大半は既に兼葭中に没し、又た出で來るものなし。

此の時に當り、敵陣中銃聲の響く事五六。即ち之れ舜臣が軍令にして、糧料忽然として十數艘現はれ、兼葭を包圍して火を放つ、西風甚しく吹

き狂ふて、炎煙見る／＼盛んに、忽ち海上は猛火を以て包まれ。煙に乗じて風上より、敵の大船艙を並べて掩襲し來る。我軍の諸將大に狼狽し、直に軍を退けんとするも、東西南北航路を知らず。加ふるに四方の猛火は、既に船列に近く、黒煙海上を遮つて、又た咫尺を辨せず。敵船巧に黒煙を利用して猛襲し來り、蒼遑狼藉する我兵船に矢を飛ばし、銃を放つ事驟雨の如し。敵兵猶は勝に乗じて、我兵船中に侵入す、我兵今や猛火と、強敵とに遇ひ、勇氣沮喪し能く闘ふ者なく。敵襲益々猛烈にして、我軍將に全滅せんとす。

脇坂中務太夫後陣にあり、自ら船頭に立ち、大刀を振りつゝ、今や我軍敵の謀計中にあり、全軍將に亡滅すべし、速かに赴き助けざるべからずと。三十餘艘を率ひて進む。

時に舜臣叢中にあり。脇坂が船軍を眺め、距離を計りて大小砲を急發し、我船隊を横撃す。百雷一時に落下し、乾坤動き海若爲めに震ふ。我船二十餘艘、砲彈を蒙り、粉碎沈没し、生を全ふする者稀なり。而して中務

漸く身を以て逃る。事茲に至る、勇將も亦進むべからず。我軍只手を空ふして望見するのみ。

時に我軍の兵船中、辛くも猛火を潜り、敵襲を突破して叢中より遁れ來るものあり。之を見るに悉く船碎け、艦破れ、總軍半死半生、船亦半ば沈没す。敵船其の後ろに追撃甚だ急にして、見る／＼我兵の死傷する者多く、或は水に落ち、又は敵の鈍刀に斃れ、自刎する者等數を知らず。舜臣本陣の船上にあり、舷頭に立ち小旗を振り、全軍を指揮して進み來る。我兵將に全滅せんとし、一人の亦生還する者なきを思ひ、脇坂等望見爲す處を知らず。

時に釜山浦の方面より、日本の兵船十餘艘、艙を並べて急行す。軍威正々堂々たり。而して今や勝ち誇りたる敵船の中央を指し、金鼓を鳴らし、彈丸を送り、眼中又た敵なきが如く、左撃右突、舷々相摩し、刀劍日に輝き、忽ち敵を斬る事無數。我敗戦の將士、今や此の援軍を得、漸く叢中より逃れ、幸ひにして全滅を免る。應援の將は自ら舷頭に立ち、大刀

を醫して全軍を癒さ、又た敵船中に突撃し、縦横奮戦力闘、敵を斬る事草の如く、全軍皆驚く。之れ即ち肥前名護屋の領主波多野三河守なり。是より先三河守は征韓の軍に従ひ、諸方に轉戦す、而して功なく、遂に大友義純等と共に怯情の士として豊公より譴責に會ひ、又た食邑を沒せらる。後黒田長政の部下に屬し、家の面目を雪かんとして、再び軍に従ふ。今舜臣の大軍、我海軍を破ると聞き、家臣七十餘人と共に赴き、血戰數刻能く我軍を九死の中に援ひ、身も亦家臣等と共に戦死す。豊公之を聞き、更に其子孫を召し、新地千石を與ふ。

此の戦に於て、我軍の死する者實に四千餘人、傷者數ふべからず、全軍破れて釜山浦に歸る。

因に左水營にありし錨は此の時我軍の敵に占領されしものにて今は東京博物館にあり

李舜臣槩の句

誓海魚龍動、

盟山草木知

(十九) 閑山島 韓將元均の最後

明の萬曆二十五年八月七日(慶長二年)統制使元均閑山島にありて、常に軍事を治めず、日夜酒色に耽り、更に憚る所なく、時に忠士の是を諫言する者あらば、或は遠ざけ、又は殺し、横暴日に甚だし。島中に一堂あり、運籌と稱す。

初め李舜臣此の堂を築き、諸將と共に此の堂内に居り、常に兵事を講じ、苟も軍事を論せんとする者は、其の一兵卒たりと雖も、來り談するを許し、専ら軍情に通せん事を力め、一度戦を開かんとするや、悉く將卒を招いて以て計を問ひ。策成るに及んで、則ち後ち軍を發す。故に將卒能く力を協せ、殆んど破るゝ事なし。

然れども、元均は舜臣に反し、愛妾を携て其堂内に居り。重帷を造り、堅く内外を隔て、諸將をして猥りに其の内に入るを禁ず。將卒爲めに元均の面を見る事罕なり。又た酒を嗜み、日に醜怒を事とし、刑罰度なく、

軍中怨言堪へず。

將卒竊かに耳語して曰く。

戦へば只だ走るのみ。

全軍相譏笑して稟畏せず、爲めに號令總て行はれず、軍氣日に亂れ、亦如何ともする能はざるなり。

小西行長、竊かに元均の暴戾を聞き、以て大に喜び。要時羅なる韓卒を遣り、韓將金應瑞、權慄等に説かしめて曰く。

今や日本の兵十五萬、後援として釜山浦に至るべし、我々能く水戦に習ふと雖も、倭兵は水戦の法を知らず。速かに兵船を出し、是れを海上に迎撃せば、勝敗の決既に明なり。

權慄等大に喜び、直に元均に出船を命ず。元均元來戦を好まずと雖も、命令又た奈何ともするなし。李億謀と共に、船兵を整へて軍を發す。戦艦實に五百餘艘なり。

我軍謀の成るを喜び。岸上の斥候、先づ馳せて敵の來るを告ぐ。茲に於

て小西、浮田、島津、加藤、蜂須賀、長曾我部等の諸將、亦兵船五百艘を率ひ、元均の水軍を絶影島附近に待つ。

時に天候急に變じ、暴風怒濤、天地暗慘として、而も日將に暮れ、海上濤々冥々。兵船の操縦甚だ危険なり。我軍此の間に際し、一舉に敵船を掩撃せんとす。

時に元均が率ゆる兵船の水夫樞夫等、閑山島を發し、終日櫓を動して休息するを得ず。加ふるに、狂風怒濤進退自由ならず、且つ飢渴交々迫りて、身軀疲勞綿の如し。我軍是を望見し、全軍櫓を揃へて急進突撃す。元均我軍の來襲を見て驚き、狼狽直ちに船を返さんとす。李億謀大に怒り。豎子又た事を破ると、自ら舳頭に立ち、部下を叱咤して我軍に迫る。茲に於て命令一途に出です。船列忽ち亂る。我軍亦伴り走り、敵を誘ひ益々疲勞せしめんとし、敢て鋒を交へず。時に夜深くして風濤益々盛んに、敵船互に離れて、風浪の間に漂流す。我軍急に櫓を返し、敵船を包圍し襲撃甚だ急なり。

此の海戦に於て、敵の死する者將士四百餘人、億謀亦海中に落ちて死す。元均僅に身を以て遁れ。加徳島に至り渴を醫せんとして上陸するや、行長嘉明の兵、此島を守る者急に撃て殘餘の將士を殲す。元均、又た漸く逃れて恭川島に至り、權慄に會んとす。權慄大に怒り、元均を答撃して更に進ましむ。元均忿滿酒を冠つて醉臥す。夜半我軍急に三度元均を襲ふ。元均狼狽海邊に至り、舟を棄て岸に登り、更に走らんと欲すれども身體肥大にして急に走るを得ず。松樹の下に座す、我兵追跡是を捕ふ。之より先き韓將裴楔、屢々元均を諫めて曰く。

無謀の舟師必ず敗れん。
是の日亦た曰く。
恭川島は淺窄にして船を行ふに利あらず。
元均皆聽かず。

楔私かに閑山島に歸り、我軍の來襲を知るや、火を縱つて厩舎糧穀軍器を焚き、島民を率ひて逃走す。我軍閑山島を占領し、勝に乗じて海陸共に南原に迫らんとす。

李舜臣扇面之詩

閑山島。月明夜。上戍樓。撫大刀。
深愁時。何處差。笛一聲。更添愁。

(二十一) 順天海口の戦 李舜臣の戦死

慶長三年八月、明四道より大軍を進め、大に我軍と戦はんとす。即ち一隊は麻貴等十萬に將にして蔚山に向ひ、李如梅、董一元亦た十餘萬を率ひて泗川を攻めんとし、劉挺八萬を率ひて小西行長を順天に攻め、陳隣別に水軍六萬餘人、兵船數百艘に將とし、李舜臣と軍を合し、共に海路より是に應せんとす。九鬼、藤堂、脇坂、鍋島等我軍の諸將も亦、兵船を率ひて敵の海軍と戦はんとす。八月十日、我兵急に發し、順天を救はんとして海口に至る、陳隣望見し大に笑つて曰く。

倭奴來る、速に一戦是を殲すべし。

直ちに船を發して戦はんとす。李舜臣之を止めて曰く。
公は甚だ輕舉なり、日本軍今や戦に馴れ、進退共に戦法を得、公宜しく策を定めて戦ふべし。

陳隣笑つて曰く。

我聞く、朝鮮人は柔弱にして戦はゞ必ず敗すと、今公の言を聞て、其の眞なるを知れり、我敵を見る、尙ほ小兒の如し、何ぞ謀計を用ゆるの要あらんや。

大言壯語、自ら先頭に立ち、軍を發す。兵船五百餘艘、舳舻相啣んで進む。舜臣天を仰いで嘆じて曰く。

愚なる哉陳隣、必ずや破れて其の退路に窮すべし、然りと雖も、我亦是れを棄つべからざるの責あり、奇兵を以て敗軍を救はざるべからず。直ちに部下三百餘艘を二分し、一隊をして海口に備へしめ、一隊を崖に沿へる兼葭中に隠し、海口の一隊をして、詳つて進み戦はしむ。我軍是を知らず。船を進めて戦はんとす、敵忽ち退く。我軍急には是を追撃す。

陳隣望見、直に舟軍を麾き、藤堂、脇坂が船列を包圍し、盛んに箭を飛ばして戦を挑む。藤堂等未だ、應せず、船を進めて陳隣の舟陣に近づき、急に大小銃砲を發射す。硝煙波上を蔽ひ、砲聲殷々、海若爲めに驚く。陳隣の將士、弾に當つて驚るゝ者數を知らず。藤堂等機に乗じて急撃し、熊手を以て敵船を引き、大刀を翳して敵の船中に入り、悉く敵兵を斬る。陳隣大に驚き、且つ怒り、自ら方天戟を舞して奮戦す。我兵討たるゝ者忽ちにして七八。此の時に當り、敵の船列は既に亂れ、東西に漂ひ、南北に敗流す。偶々飛彈あり、來つて陳隣の左腕に當る、陳遂に戦ふ能はずして船底に隠る。我軍陳の船列を包圍し、將に其船軍を全滅せんとす。舜臣遙に之れを望見し、自ら海口の軍を率ひて來り助く。我軍舜臣の應援を見、陣を整へて迎撃せんとす。舜臣亦戟を杖き、自ら舷頭に立ち、大聲命を下す、風采堂々たり。我軍亦是を見て頻りに銃砲を放つ、舜臣能く戦ひ、遂に我軍に火を放つ。海風猛火を煽つて、炎煙海上に漲り、我軍狼狽、船列散亂し皆櫓を返して走らんとす。舜臣大聲叱咤、急行我

軍を追撃し、而して南海の界に至る頃、飛彈あり、舜臣の胸を貫き、其の背後に出づ。將士驚き、扶けて船中に入る。舜臣左右に云つて曰く。戦方に急なり、慎んで我死を言ふ事勿れ。言終つて死す。舜臣の甥に荒なる者あり、膽量拔群、其の死を秘して督戦す。戦甚だ急にして、軍中是を知らず、荒部下を麾いて陳を包圍より援ふ、我軍遂に破れて退く、戦終り舜臣の死を知る者、將卒共に天を仰いで哭せざるはなし。

(二十一) 慶州の戦 清正部下の敗死

加藤清正、鍋島尙重と共に北韓に轉戦し、咸鏡道二十二郡の地は皆兩將の領する處となりしが、就中清正の勇威韓人の恐るゝ事神の如く、而して清正の戦ふや必ず、南無妙法蓮華經の大旗を樹て、以て敵陣に突入し、至る處敵の風靡せざるはなきなり、而して一度其の旗影を見る者は、忽ち呼ぶに鬼將軍の名を以てし、頭を抱へて逃れ、又た戟を交ゆるの勇なく、茲に於て清正の勇名八道を震撼す。

時に明將李如松大軍を領して南下し、平壤爲めに陥ると聞くと、韓の敗將殘卒等急に四方に烽起す。韓將朴晋はかつて密陽にありて我軍と戦ひ大敗して山林に隠れて出でざりしが、今明軍來援の報を聞くや、民軍五六千を募集し義兵と稱して慶州の城を攻む。城中には清正の臣齋藤立本、坂川采女等五百餘人之れを守る。朴晋部下を指揮して攻むると雖も城兵能く防ぎて落ちず。

韓軍中に李長孫なる一將あり、能く火術に妙を得たり、長孫一大々砲を發明し震天雷と稱し軍中に携ふ。一夜長孫大砲を發して城中を撃つ。砲弾地に墜つ、城兵其の何物たるかを知らず、即ち怪み走せ蟻集して是れを見る。砲彈忽ち爆發して爲めに死する者多し。城兵爲めに大いに恐る。朴晋長孫に命じて頻りに砲撃せしむ、城兵大いに狼狽し遂に防禦の策を知らず。朴晋機を見て城門を破つて突入す、城兵支ふる能はず遂に潰走す。齋藤、坂川等防ぎ戦ふと雖も遂に如何ともする事を得ず、城を捨て、清正の陣に走る。茲に於て慶州陥落し朴晋等皆城に入り、猶ほ勢に乗

じて兵を出し清正が勇臣加藤與左衛門が釜山の城碧を攻めんとす。

(三十二) 晋州城の陥落 屠盡す軍民二萬餘

加藤清正、小西行長先鋒となり、更に毛利秀元二萬餘を卒ひ、別に小早川、黒田、淺野、伊達の諸將之れに屬し、島津、鍋島、長曾我部、蜂須賀、立花の諸將浮田秀家に屬し、總軍實に六萬餘人、旌旗雲を貫き、刀槍日に耀く。

抑も晋州城たるや、洛東の大江帯の如く城下を貫流し、岩石高く峻つて、絶壁、削るが如く、城墻を岩上に構へ、狭間を切つて城門となし、守將徐禮元、二萬餘人を卒ひて固守す、又た明將劉綎、三千餘人を領して大邱に陣し、以て晋州城と犄角の勢を示す。

我軍大舉城下に迫るや、城峻にして禮元能く守り、直に抜くべからず、茲に於て我軍梯を組み、或は楯板竹束を並立し、又た熊手繩梯子等、萬般攻城の具を準備し、而して一擧関を作つて肉迫す、然れども城堅にし

て、加ふるに城中の將卒死力を盡して防ぎ、大石巨材を投じ、矢を放つ事蝗の如し。我軍爲めに逡巡す。時に黒田長政の家臣に、後藤又兵衛基次なる士あり。厚板を以て龜甲形の箱を製し、内部に強き梁を設け、外面には牛皮數十枚を張り、之れを積輜車と名け、基次自ら逞兵數十人と共に箱内に入り、以つて楯となし、而して櫓下に迫り、鐵槌を揮つて城門を破碎せんとす、城兵見て以て大に驚き、火箭を放つ事雨の如し。然れども車箱堅にして損ずる處なし、基次等漸く城壁の隅石一箇を破碎す、石垣爲めに崩壊する事七八間。

時に韓の助將千鎰が率ゆる兵は、皆京城市井より召集せし者にして、時に望んで敢て用をなす者なく、加ふるに千鎰亦た兵事を知らず。

殊に守將徐禮元を悪みて、兩將相猜み、號令乖違し、守戰の議一致せず、部下の將卒亦た互に反目し、稍もすれば相闘んとす。而して城中既に亂れ、勇將惟黃進又た東城に防戰中、我軍の飛彈に當つて斃る、土氣爲めに振はず。

又兵衛基次續韞車を進め、千益が守備する北門に肉迫し、石垣を碎き將に城中に突入せんとす。

此の秋に當り清正が陣中より、南蠻鐵の鎧を着、餘尾の冑を頂き、長槍を腋下にせる勇士一人、馳せ來つて城中に入らんとし。大聲叫んで曰く。

加藤清正が臣、森本儀太夫、當城の一番乗りなり。黒田の舊臣栗山備後守、遙に之れを眺むるや、亦た挺身衆に先んじ、森本と共に城中に入らんとす、敵矢を放つ事雨の如く、儀太夫爲めに内兜に一矢を負ひ、城壁より轉落す。

備後守是を見て叫んで曰く。

栗山備後當城の一番乗りなり。

時に清正の臣に飯田覺兵衛なる士あり、勇膽を以つて軍中に鳴る。今儀太夫の矢を蒙つて落ち、栗山備後守一番乗りの名乗を聞くや、疾風の如く馳せ至り、栗山が上帯を掴んで引き下し、敵の注射を恐れず城壁に攀

ち、南無妙法蓮華經の旗サト戦風に翻しつゝ。

大呼して曰く。

清正の臣飯田覺兵衛、晋州城一番乗りなり。茲に於て加藤、黒田の兩軍、関を上げ、先を争ふて肉迫す。守將千益城既に落ちたりとなし、軍を亂して潰走す。

清正、長政轡を並べ、部下を麾き、兩軍潮の如く城中に亂入するや、毛利、小早川、淺野、伊達の諸將、皆兵を提て西方より進み、浮田、島津、鍋島、長曾我部、蜂須賀等の諸將亦東門より、関を上げて突進す。時に驟雨沛然として至り、四顧濛々たり、我軍以て機に乗ずべしとなし、直ちに進んで内城の城壁に蟻附す。敵狼狽矢を送り、石を投すと雖も、雨雲低く垂れて狙撃する能はず、忽ち其の防禦は破れ、四方に遁走せんとするも、我軍既に包圍せしを以て城外に出るを得ず、城中の者悉く我軍の爲めに斃す。千益は崔慶會と共に蘆石樓上に逃れ、戰場を觀望し、其の遂に遁るの途なきを知るや痛哭し、兩人手を携へて、樓上より壁下

の江に投じて死す。城將徐禮元亦奮戰身に數創を蒙り、逃れて城外の竹叢中に隠る。浮田秀家の臣、岡本權之丞の爲めに捕へられて斬らる。城に於て全く陷落す。此の戦に於て、敵將の死する者十八人、軍民の死する者實に一萬五千三百餘人、其他江に投じ、或は岩石に觸れ、又は壁上より身を投じて自ら死する者數千人、且つ城中城外の牛馬雞犬に至る迄殆んど生物なく、只僅かに數人の郡民漸く身を以て遁るを得たるのみ、晋州城内又た人影を見ず。

史を按ずるに文祿、慶長の役に於ける古戰場も多しと雖も、就中晋州城の激戦以上に其の慘憺たる歴史の傳へられしは吾人の未だ耳にせざるの處なりとす。

晋州府南江に義娘岩あり文祿の役郡妓論介岩上

に上り我一將を欺き共に江に投せし處にして役

後義妓祠を建つ徐有英の義妓を詠じて曰く、

義妓崑兮高復高、石臺如盤而江阜、上登百尺之飛閣、下莅千尋之層濤

憶昔龍年值陽九、晋州被圍相持久、群倭蟬集飛砲火、肉薄登城恣蹂躪
積死滿巷血流津、白晝昏黑漲烟塵、義膽忠肝凡幾鬼、六萬人中稱三仁
是時忠烈出娼家、其名論介顏如花、偷生還耻遭汚辱、寧如引頸俟賊刃
蹇裳直到南江上、獨立峭岬與誰抗、紅粧艶冶照水妍、翠袂嫋娜隨風颺
綠崖粉堞俯澄湖、賊皆環視空踟躕、中有虜酋號驍勇、下躡層梯捷如驅
方其來進伴歡喜、抱腰四旋翻投水、殲其巨魁不勞兵、豈知一技能辨之
娥眉至此死尙樂、至今汗青垂芳名、廟門棹楔仍俎豆、教坊生色揚風聲
君不見宋朝義娼毛惜々、爲國効死奮罵賊、正氣鐘人無貴賤、又况介娘
起巾幗、今我試登盪石樓、盡日絲管添客愁、尙想芳魂遊崑畔、萬古山
青水自流、

盪石樓は嶺南第一の大觀なり鶴金峯の詩に曰く

盪石樓中三壯士、一盃笑指長江水、長江之水流滔々、波不竭兮魂不死

(二十三) 管六之助の銘刀 大虎を斃す

か 服の役、明と平和將に成らんとし、我諸軍退いて釜山浦附近に陣す。一 黒田長政の陣中急に叫ぶ者あり、大虎來ると諸將驚いて走せ到れば、一匹の大虎馬屋に入り馬を食ふ。士卒皆恐れて近寄る者なし。内に管六之助政利と云ふ者あり、大刀を指げ馳せ來る、虎政利を見るや一吼肉迫す。政利は軍中の勇士なり、忽ち大刀を上げ、大虎の腰を斬る事八寸餘。虎益々怒り、政利急なり。後藤又兵衛基次遙かに政利の急を聞くや走せ來り、虎の肩より背部を斬る、政利間を得、再び虎の眉間を討つ、虎遂に斃る。

亦一説あり。黒田長政機張にて虎を狩る、時に老虎現はれ、六之助が部下二名を斃す。此の日六之助朱塗の鎧を着け、最も群衆の注目する處となれり、老虎亦六之助の甲冑を見、急に六之助に近る、六之助腰間の刀二尺三寸備前吉次の刀を抜て虎を斬ると。

兩説同じからず、文中釜山浦とあるは釜山にして、機張は釜山、蔚山間の一都會なり。尙ほ吉次の刀に就ても説あり。初記に依れば六之助歸朝後、林羅山、刀銘を作りて南山と號し其銘に曰く。

節彼南山、山惟劍鋒、苛政除去、酷吏逃藏、截邪斬佞、惟刀在箱、惟其言虎、有若真傷、傳之萬世、爲子孫常。

之れ周處が白頭虎の故事なり。後記に従へば紫野大徳寺春庵和尚其の刀に斃秦と號く。

即ち戦國の秦は、虎狼の國なりしより斯く名けしなりと。羅山文集には言虎の下に、失色の二字あり

(二十四) 蔚山新塞の戦 島津義廣の奮戦

慶長三年八月、明軍の左將麻貴、新たに十餘萬に將とし、再び蔚山を攻めんとして、温井に屯す、而も清正の勇を恐れて敢て兵を動かさざるなり。清正亦、寡兵を以て明の大軍に當るの不利なるを思ひ、堅く城を

守つて出でず。
 時に島津又七郎忠常蔚山の新塞にあり。忠常は兵庫頭義廣の男にして、一萬餘騎を率ひて新塞を嚴守す。軍威慶尙、全羅、忠清の三道に震ひ、又た望津、永春、昆陽等に砦を築き、部下の將を使はして之を守らしむ。金海、固城を左右にし、東陽に軍糧を置く。而して新塞の地たるや、三方海に面し、漫々たる湖濤岸を洗ひ、僅かに一方は陸地に通すと雖も、嶮坂を利し、壘を高ふして、猥りに敵の進入を許さず。父義廣亦泗川に屯し、陝川、宜寧、咸陽、高麗の諸邑を領し、軍威甚だ盛にして、父子奇角の勢を示す。

明將李如梅之を攻む。董一元亦晋州に陣し、李如梅の泗川を攻むると聞き、彼亦新塞を襲はんとして、頻りに軍議を凝す。時に莽國器が部下の士にして、營の夜警をなす者、一女を捕へて來る、國器之を見るに韓人に非ずして明人なり。大に驚き、怪んで其の何者たるかを問ふ。女一言を發せず、懷中より携ふる處の一封を出して國器に示す、國器益々怪し

み、其の書を見るに。

文に曰く。

此女、今敵兵に虜となり、既に日本に誘拐されんとす、吾見て慙然に不堪、即ち大金を投じて身体を贖ひ、其の郷に歸らしめんとす、大明の軍悉く憐を垂れ、或は犯し、又は辱むる事勿れ、幸ひに道を與へよ。而して我が性を知らんとせば、即ち云はん、曰く、令公の後、埋兒の父、名は即ち或あるの口、手無きの按なり。

然れども國器等、其の何者たるかを知らず。之を軍中に示して問ふ。軍中に諸葛鏞と云ふ者あり、能く隱語を知る。國器鏞を召して書を出し、之を判せしむ。諸葛鏞の曰く。

令公は唐の郭子儀なり、埋兒の父は二十四孝中の一人、郭巨にして、則ち此の性は郭氏ならん、或あるの口とは、國、手なきの按とは、安なり。然れば、之れ郭國安なるべし。

國器手を打つて大に喜んで曰く。

吾、先に郭國安の日本軍に虜となりしを知る、今隠語を以て吾に示す、之れ新塞内の情を通ずる者ならん。

直ちに部下に命じて女を送らしめ、韓國商人三名を招き、計を設け、書翰を携へて城中に赴かしむ。商人等郭が望津の城内にあるを聞き、直に行いて國器の書を示し、郭が計を聞く。郭大に喜び、密かに語つて曰く。

今月廿日の夜、吾、望津の糧食庫に放火すべし、機に乗じて明軍突撃し來らんか、日本軍如何に猛なりと雖も、何ぞ支へ戦ふの勇あらんや、汝等歸つて速に之れを將軍に告げよ。

商人意を諒して歸り、直に國器に告ぐ、國器大に喜び、三萬餘の大軍を領し、月の廿日望津に向ふ。我軍望見迎へ戦はんとし、急に城門を開く日既に没し、兩軍陣を整へて未だ戦を交へず。國安機の逸すべからざるを見、密に糧食庫に放火す。煙焰天に漲り、城中大に狼狽し、軍を退けて鎮火せんとす。國器計の既に成れるを見るや、自ら馬を陣頭に進め、小旗を振り、兵を隨いて急襲す。我軍爲めに大に亂れ、討たるゝ者寡な

し。明軍勢に乗じて望津城内に亂入し、所々に放火す。我軍益々騒亂し、遂に潰走す。

明將董元一も亦國器と計を合せ、不意に永春城を攻落し、尙ほ進んで昆陽を包圍す。我軍力戦能く戦ふと雖も、衆寡遂に敵せず。全軍逃れて泗川に入る。

島津義廣亦新塞にあり。望津、昆陽、永春の敗戦を聞き、直に兵を出して之を救はんとせしも、諸城既に陥落し、敗兵皆新塞に集まらんとして、又た救ふを得ず。時に明將董一元、使を新塞に遣り、金銀絹布を送り、和を講せん事を求む。義廣使者を引見し、大聲罵つて曰く。

咄ッ、汝等謀計を以て吾を欺かんとするか、是れ、虎の鬚を撫づるが如し、吾何ぞ狗輩の術に陥らんや、汝等もし和を講せんとするも、吾之れを許さず、速に歸つて我言を汝が將に告げよ。

即ち金銀を碎き、絹布を裂き、士卒に命じ使者を縛し、是れを城外に放擲せしむ。董一元此の事を聞くや大に怒り、直に大軍四萬を卒ひ、先づ

泗川城を攻め、勢に乗じて一舉新塞を屠らんとす。泗川の守將、伊勢兵部少輔貞昌は義廣臣下の勇將なり。三百餘騎を以て城を守る。明の大軍城外を包圍すと雖も、未だ敢て戦はず。敵の城に接近すを見、全軍一齊に射撃す、敵の死する者算なし。而も雲霞の如き大軍、叢爾たる一城を重圍し、東西南北皆敵ならざるはなし。

茲に於て貞昌、三百餘騎を卒ひ、急に城門を開き、櫓を並べて敵軍中に馳突す。明軍爲めに躊躇し、先鋒先づ破る。時に敵の先鋒の將に盧得功なる者あり、強勇軍中に鳴る、忽ち陣中より進み、偃月刀を舞して戦ふ。貞昌遙に是を望見し、長槍を上げ、部下を麾いて鬪を挑む。龍旗虎搏、刀槍交して相磨する處光茫閃々。盧得功急に馬を返して走る、貞昌大聲叱咤、馬を躍らせ槍を延べて盧を刺す。槍尖肩を貫き突出する事尺餘、敵遂に潰走す。遙かに頭を回せば、明軍既に城中に入り、紅白の旗旌天を蔽ふ、貞昌亦城を捨て、部下を卒ひて蔚山新塞に赴く。

此の秋に當り明將茅國器、棄邦榮、彭信古等も亦昆陽の糧食庫を焼き、

破竹の勢を以て新塞に迫る、城兵能く防ぐと雖も、明軍雲の如く、旌旗城外の山川に滿ち、一見皆敵ならざるはなく、先鋒斃るれば中軍之を補充ひ、而して城に肉迫し、以て放火せんとす。敵軍中火藥を填し、以て城門を破壊せんとして進み來る者あり。偶々火を失し、火藥急に爆發す、黒煙濛々敵陣を掩ふ。敵兵爲めに死傷算なく、陣中亦大に亂る。又七郎忠常之を望見し、櫓の乗すべしと爲し、千餘人を卒ひ、城門を開いて急襲す。敵陣忽ち亂れ、湖の如く後陣に亂走す後陣の兵之れ支へて退くを得ず。我軍長槍を上げ、大刀を提げ、襲撃益々急なり。敵の先する者は討たれ、混亂の狀亦た云ふべからず。討たる者忽ち三千餘人、全軍遂に潰走す。大將茅國器自ら一萬餘の退兵を領し、大聲軍に令して曰く。

敵既に城を出づ、備なきに乗じて進め。

敵の諸軍更に鋒を揃へて進む。時に義廣五千騎に將として城中にあり、敵の城に迫るを見、材木を投じ箭を飛ばし、銃彈を送つて防戦甚だ力む。敵の死する者二千餘人。茅國器、益一元等遙かに部下の利なきを見、自

ら精兵を率ひて来る。義廣亦城門を開き。之を迎撃し、明將徐世卿を生擒し遂に是を斬る。而して逃るを追ふて敵を斬る事實に數を知らず。此の戦に於て敵の首級を得る三萬餘、捕虜は皆耳鼻を刎り、是を大樽に詰め、以て遙に豊公に贈り勝を報す。

(二十五) 蔚山の役 清正の悪戦苦闘

加藤清正蔚山に陣し、將士を督して城を築き、家臣加藤清兵衛をして守らしめ、自ら西生浦の城砦を修理して居る。

慶長二年十一月明將刑玠、兵數十萬を率ひて鴨綠江を越へ、同月二十九日京城に至り、總軍を三分して南下し、我軍を討たんとす。左軍は李如梅を以て將とし、盧德巧、董正誼、茅國器、陳演、陳大綱等之れに屬す。右軍は李芳春、解生を以て將とし、牛伯英、方時、新鄭、勸盧繼、陳恩開等之に屬す。中央は刑玠自ら大將として、高策、租承訓、麻貴、李寧、李花、進忠、吳惟忠等を率ひ、總軍實に十四萬餘。發するに望み刑玠自

ら京城に祭壇を築き、香を焚きて天神地祇を祭り、諸將と血をすゝつて盟約し、直ちに軍を發して慶州に向ひ、蔚山を襲撃せんとす。

時に淺野幸長、毛利の家臣穴戸備前守及び太田飛彈守等と兵を合せ、蔚山に赴き助けんとす。吳惟忠、高策等數萬に將として梁山の南方に陣し、我軍情を窺ひ、蔚山、釜山浦間を横断せんとす。幸長斥候兵六人を出して明軍の事情を探らしむ。明軍之れを知り、六人を捕へて殺す。幸長大いに怒り、我今斥候の者六人を殺し、悠然として城中に居るに忍びず、直ちに出で、一戦すべしと。既に兵を督して出で戦はんとす。穴戸、太田之を止めて曰く。

今我寡兵を以て敵の大軍と戦ふ、勝敗の決既に分る、只城を護るに如かず。

幸長當年二十二才、血氣甚だ盛にして、穴戸等の諫めを聞かず、自ら旗を進めて突出す。穴戸、太田等も亦共に軍を進む。明軍望見して其の兵の寡きに乘じ、我軍を包圍せんとす、幸長自ら長槍を振り、敵を斃す事

七八人。穴戸、太田等も亦鯨波を上げて強襲し、縦横突撃、敵を斬る事草の如し。

我兵如何に勇なりと雖も、衆寡既に敵せずして討たる、者數を知らず。幸長亦馬を返し、戦ひては退き、退きては又戦ふ。而して身も亦數劍を蒙る。家臣龜田大隅守之れを見て走せ來り、臣幸ひに殿せん、公速かに城に歸れど。言終るや、馬を躍らせて敵軍中に馳突す。明の部將安順仁、栗得商大隅を見、戈を舞はして來り戦ふ。大隅先づ栗得商を一撃の下に馬より突き落し、勢に乗じて安を斬る。安恐れて馬を返して走る。蔚山の守城加藤清兵衛、遙かに城中より望見して曰く。

彼の馬印は淺野、太田等の紋所なり、速かに出で、援助すべし。

茲に於て小代下總、佐々平左衛門、齋藤立本等五百餘人の退兵を領し、木戸を開いて突出す。淺野、太田等戦ひ將に勞れたる處に、今此の援兵を得、新に勇氣百倍し、再び馬を直して戦ふ。明軍爲めに大に破れて退く。幸長等漸く蔚山城に入る、穴戸備前守は明軍に横撃され、幸長等と

共に城に入るを得ず。漸く間道より來る。抑も蔚山城は少にして明の大兵を防ぐに足らずと雖も、守將清兵衛城中に下知し、自ら淺野幸長と俱に、大敵を防禦す。穴戸備前守は後門を、毛利秀元は左右の各門を嚴守し。別に太田飛彈守の兵を以て遊軍となし、防禦薄弱の所に赴かしむ。之より先き清正の蔚山に來るや、百姓皆其德に懷き、遠近より來つて城下に住する者多く、其數亦二萬餘人なり。明軍蔚山城を包圍せんとするや、百姓等皆驚き恐れて城中に入る。城中爲めに人を以て埋む、而して貯ふる處の糧食少許にして又た如何ともする事能はず。明將刑玠全軍を進めて重圍す、時に候十二月の嚴寒に際し、寒威凜烈將士指を落す者あり。幸如梅、楊登山、擺賽等三萬餘人を提げて屢々城外に來り、火箭を飛ばして戦を挑む。

城中より城外の明軍を望見すれば、槍旗遠く天に連り、實に其數を知らず。城兵敵の大軍を恐れ、色を失ふ者多し。守將清兵衛は智勇兼備の勇士なり。寡兵を以て今敵の大軍と戦ふ、而も城中糧食少なし、徒らに

日を送れば或は味方の士氣沮喪せん事を恐れ、淺野幸長と謀り、今明軍新たに來りて城を包圍す、未だ準備全く完ざるが如し、急に敵を撃たんと。兩將部下六百餘人を率ひ、不意に城門を開いて突撃す。明軍震駭し討たる、者數を知らず、兩將速かに再び部下を従へて城中に歸る、其の疾き事風の如し。明軍爲めに驚き、之より敢て進撃せず。清兵衛城中より盛んに小銃を放つて敵を斃す。明軍亦陣を列ねて重圍す。蔚山城北方、三町を去る處に島山の砦あり、井上大九郎、毛利秀元の兵を合せて守備す。明將李芳春、解生三千餘人を率ひ來つて攻む。此地巖石嶮岨にして、容易に攀づべからず、麓に一大川あり、滔々として蔚山城との間を隔つ。明軍附近の民家に放火し、其煙に乗じて來襲せんとす、大九郎忽ち銃卒二百餘人に命じ、眼下して大砲小銃を放つ事雨の如し。明軍大いに破れ、李芳春、解生も亦僅に身を以て逃る。明將麻貴、茅國器等五千餘人を領し、未だ李、解の敗戦を知らず。民家より煙の登るを見て、島山の砦既に戰酣なりと思ひ、蔚山城の搦手を攻むる事急なり。

守將穴戸備前守能く防ぐ。

麻貴大に怒つて曰く。

我兵蔚山を攻めて未だ一戦の勝利だに得ず、今ま島山の要塞戰將に酣なり一舉に之れを陥落し、士卒の勇を勵まし、其勢を以て蔚山城を撃てば、蓋し必ず勝つべし。

彼れ亦兵を返して島山に向ふ。

明將麻貴、茅國器は李芳春、解生等が島山の敗を知らずして來り攻む。守將井上大九郎、精兵を城壁の狭に隠し、鳴を静めて明軍を待つ。明軍之れを知らずして城に蟻附せんとす。城兵一時に銃砲を發す、明兵死する者三百餘人。麻貴遙かに之れを見て大に怒り、兵を麾いて進み來る、金鼓天に震ふ。

然るに城砦の下嶮岨にして容易に攀づべからず。麻貴躬ら先頭に馬を進む、道狭くして且つ屈曲多く、直ちに城に到り難し。城中より眺見し、敵漸く城下に迫るや、忽ち大木巨石を投じ、銃砲を連發す、明兵の又た

死する者數を知らず。而して大九郎謀つて各兵を城外の岩角樹蔭に潜ませ、潛走する明兵を狙撃せしむ。明兵我軍を大軍なりと誤り、麻貴先づ馬を返して走る。大九郎選兵三百餘人を麾き、城門を開ひて突撃す。明兵大いに亂れ、又た討たるもの八百餘人。大九郎速かに兵を麾いて城中に歸り、又た再び出でず。

加藤清正時に西生浦に居り、陣を張機に列ね、軍威四方に輝き、郡民皆清正に懐く。明の大軍蔚山を包圍し、淺野幸長、太田飛彈守、宍戸備前守等、守將清兵衛と共に重圍に陥り、日に惡戰苦闘すとの報を得てより。

徐ろに虎鬚を撫して曰く。

吾れ彈正と友として親む、幸長は其の息なり、かつて彈正我に語つて曰く、恐息幸いに軍に従ふ、未だ血氣なり、乞ふ公我爲めに彼れをして名を辱かしむる勿れと、言猶ほ耳にあり、行いて助けざるべからず乃ち五百餘人を率ひ赴き助けんとす。

清正蔚山の重圍を聞き、直ちに部下五百餘人を兵船十餘隻に乗せ、以て船路蔚山城に向ふ。清正自ら赤革絨、胴丸の甲を着、兜録冑に銀の蛇の目の紋打ちたるを猪首に着なし、青具柄の長刀を杖き、南無妙法蓮華經の大旗を河風に翻させ、悠然と舳頭に立ちて諸船を指揮す。即ち山陽の「清正自蒙銀兜蓋杖薙刀立船首」と云ひしは但し此の時なるべし。而して明軍亦清正が威風を眺めて敢て近寄るものなく、清正右顧左睨徐ろに蔚山城に入る。城兵大に喜び、上下士氣益々振ひ、勇氣亦百倍す。然れども城中貯ふる處の糧飼乏しく、將士亦將に餓へんとす。

時に明將刑珍令を傳へて曰く。
我軍大兵を以て城を圍む事既に二十餘日、而も一として敵を破りし事なし、清正今や小勢を以て城に入る、我兵之れを傍觀すとは何事ぞや、速かに迫つて城を抜くべし、明日を期して全軍城に迫らん。

即ち翌日、明軍城下に蟻附す。清正士卒に命じて大木巨石を備へしめ、敵の壁下に集まるを見、一時に之れを壁上より投ず。明軍爲めに死する

者多く、之より敢て進み來る者なし。時に明軍楊鎬が部將に、鄭景岡なる者あり。

一日楊鎬に云つて曰く。

城中軍民將に二萬を越ゆべし、而して糧食將に盡きん、我軍須く城中の水源を斷つべし、然る時は城自ら陥らん。

楊鎬之れに従ふ。

蔚山の城中米粟既に盡き、明軍又水源を斷ち、將卒爲めに大いに困む。而も渴して堪へざる者は、密かに堀水を汲み、以て咽喉を濕すと雖も、堀中には敵味方の死屍多く沈み。而も日を経るに従つて腐敗し、堀水爲めに變じ、惡臭忍ぶべからず。然れども將卒争ふて之れを汲む、堀水遂に飲むべからざるに至れば、各々尿を汲んで飲み、餓に堪へざる者は馬を屠る。馬盡く、遂に群民の携ふる處の牛を屠る、牛亦盡く、紙を嚼み、壁土を食ひ、夜は城外に出で、敵の死屍を探り、腰間の燒米炙牛の一片を得、漸く其の餓を凌ぐに至り。城中の慘又た云ふべからず。清正城中

にあつて、士卒の餓に困むを見、遂に堪ゆべからず。密かに思ふ、我如何に勇なりと雖も、食せざれば立ち難し、今城中の様見るに忍びず、斯の如くんば將卒皆餓死し、城亦陥落する近きにあらん、如かず我城中を出で、敵將を欺き、互に相刺して死せば、其の間隙に乗じ、諸將突撃敵を破り以つて城の安全を見るべしと。一夜密に近臣鵬平次、古橋平助を召し、命を含めて明將楊鎬の陣に赴き云はしめて曰く。

今や城中糧食盡き將卒共に餓死せんとす、我將清正座して此慘を見るに忍びず、即ち諸將に變り貴軍に降らん、將軍幸に愛憐を垂れ給へ。

楊鎬聞いて大に喜ぶ。

清正將に心中決する處あり、即ち明日を期し、城を出で、明將楊鎬と相會し、直ちに之れを刺殺せんとす。城中者皆之れを知らず。

時に淺野幸長も亦他と共に困む、たまく清正降を乞ひ、明日敵中に到るべしと告ぐる者あり。幸長大に驚き、直ちに清正を訪ひ。

涙を流して曰く。

公の一身は之れ全軍の將たり、而して豊公朝鮮を討つ、其の功の期すべきは、公と小西行長のあるに非ずや。今公輕々城を出で、敵に降らんか、何の面目あつて豊公に見へん。今城中糧食盡き將に落ちんとす、何ぞ僅に此の一城を死守するの要あらんや、速かに全軍を以て敵中に突撃し、釜山浦に至り諸將と合し再び敵と戦ふに如かず。乃ち眉を上げ肩を怒らして諫む。

清正の曰く。

嗚呼我誤てり、實に足下の言の如し。直ちに幸長の言を入れ、翌日再び楊鎬に人を遣はし、清正は神孫なり、何を困しんてか瘦狗の如き汝等に降らんや。汝若し清正に見參せんと欲せば、速かに馬を陣頭に立てよ、劍戟に間に相見へんと。楊鎬大に驚き且つ怒り、咄ッ、汝我を欺くか、明日兵馬の間に相遇はんと。云ひ終るや、直ちに全軍に令を傳へ、一舉にして城に迫らんとす。時方に嚴寒の節にして、士卒皆凍へて發する者なく、諸將又令を聞かず。

或る夜、清正士卒三百餘人を卒ひて城中を巡視す。漢南の兵數萬人、明軍を助くる者北方の山頂にありて城中を眼下にす。清正將に二の丸より三の丸に至らんとし、中間の廣場を過ぐ。時黄昏なりと雖も、遙かに清正の勇姿を眺め、急に大砲を放つて襲撃す。砲彈囂々山嶽に震ひ、的中する物多く、士卒爲めに死する者三十餘人。清正下知して皆地に匍匐せしめ、少しも動かざらしむ。漢南の兵山上より望見し、城中寂として人馬の音なきは、之れ必ず砲彈の命中を誤りしものなるべしとなし、さらに砲口を上げて連發す。飛彈數發三の丸の芝上に落ちて暴發し、城爲めに震ふ。

清正猶ほ士卒に令して曰く。

敵、城中の靜なるを見て、其の的中を誤りしものとなし、さらに砲口を轉じて發射すべし、今徒らに動くべからず。

敵愈々再び的中を誤りしとなし、又た砲口を轉じて發す、飛彈皆城に當らず。茲に於て清正士卒に先だち、大聲呐喊を上げて城中に走る。敵望

見し飛彈城中に的中し、城中大いに震駭するものとなし、盛んに巨砲を發すと雖も、彈丸皆當らず。

時に年又た暮れ、慶長三年、即ち萬曆廿六年を迎ふ。清正城中より四方に使者を走せ、以て諸將に助けを乞ふ。小西行長八千餘人を率ひ、順天より海路蔚山に向ひ、毛利、黒田等、亦三萬餘人を領し、長曾我部、蜂須賀は二萬五千餘人、島津、久留米は四萬餘騎に將とし、皆何れも赴き助く。即ち之れ正月朔日にして、寒氣凜烈士卒又た指を落す者あり。

明將楊錦解生等蔚山の援兵將に至ると聞き、大に驚き諸將を集めて軍議し、遂に京城に退却せんとす。城中にても亦日ならず援兵の來ると聞き、將士雀躍し、明軍を前後に狹隘せんとす。夜二更に至るや、明軍數萬の篝火を焚き、烟煙天に冲し、附近白晝の如し、城兵之れ必ず敵の夜襲なるべしとなし、益々守備を嚴にす、子を過る頃、明軍大巨砲を發す、城兵愈々散裂となし、楯を並べて待つ、而も人馬の音を聞かず。城中大いに疑ひ、斥候をして軍情を窺はしむ。明軍は篝火を滅し、夜陰に乘じ

て城に肉迫するもの、如く、城兵夜を撤して守備すれども、一人の又た城に近寄る者なし。

之より先明將吳惟忠、茅國器等我後援の軍を恐れて退却せんとし、而も城兵の追撃を惶れ、夜襲の如く城兵を欺き、其間に乘じて走らんとす。時に援軍の將、毛利秀元將に蔚山城の北方山頂に登りて陣す、翌朝敵陣を見るに旌旗頻りに動く、秀元望見し之れ必ず敵の退却なるべしと、總軍に命じて突撃せしむ。明軍爲に驚き、諸陣皆亂る。我軍中に一將あり、年未だ若く、長槍を上げて敵軍中に馳突し、縦横奮戰敵を刺す事數人。吳惟忠、茅國器亦頻りに馬を馳せて軍の亂れざらん事に力め、自ら亦戟を舞して戰ふ。

吳、茅兩將逃走する者を斬り、頻りに部下の潰走を止めんとするもの、如きも、一人の應ずる者なし。小西、黒田、長曾我部、蜂須賀、島津、鍋島等の諸將亦毛利勢と力を合せて、明軍を突撃す。吳、茅の二將射手六百餘人を小丘に登らせ、飛箭雨の如く我軍を射る。我軍爲めに躊躇す。

時に山上の漢南勢も亦、明軍の潰走を見て陣形大いに動く、山麓の毛利勢斥候を出して漢南の軍情を探らしめば、大軍將に退却せんとすと告ぐ。茲に於て再び精兵を進め、漢南陣を急襲せしむ。又た一將あり、先頭馬を進めて敵陣に突入し、敵を斬る事十餘人、明軍中よりも亦一人あり、馬を躍らし、双手大劍を提げ、虎鬚鬚を蔽ひ、眼光熒々たる巨漢、大聲叱咤我先頭の將と戦ふ。劍鎗相打ち、閃々として電光迸り、劍尖結んで脱けず、龍攘虎闘、兩軍の將卒其勇姿に驚かざる者なし。巨漢忽ち馬を進め、大劍を上げて我將を打たんとす、我將亦馬を躍らせ、長槍を抛げ、陣刀を翳して相闘ふ事數時。我將猛進途に巨漢の右手を切る巨漢馬上に支るを得ず轉落す。時に秀元後陣にあり、望見して直に全軍を進めて戦ふ。漢南の軍既に四方に遁竄し、一人の防戦するものなし。長曾我部元親其の退路を遮らんとし、急に兵を進む。漢南軍大に亂れ討たる、者百餘人。而して漸く路を求めて走る者等、薄氷の川上を渡らんとし、氷碎けて溺死し、又たは岩角より轉落して幽谷に至り、身体粉碎して傷算な

く、殆んど生還する者なし。

加藤清正城中より戦況を望見し、毛利勢中より先頭奮戦せし勇士の名を問ふ。

從卒答へて曰く。

中國勢にして二つ引輪の馬印は、彼れこそ吉川藏人廣家なるべし。

清正手を叩いて曰く。

若年の將、勇膽眞に愛すべし。

稱賛して置かず、直ちに秀元の陣中に、人を使はし云はしめて曰く。

吾、今貴軍の戦況を見るに、諸將士の勇闘奮戦、吾軍の如きに非ず、而して常に先頭に青年の將あり、長鎗の術、太刀打の構へ、向ふ處敵なし、清正只感激して止まず、戦後幸いに吾陣中に請せん。

秀元之れに答へて曰く。

公の言身に餘れり、若將は一家の士廣家なり、戦後直ちに公が陣中に誘はん。

從卒歸り報す、清正大いに喜び、吾今夕廣家と共に語らんと。時に東南の天急に黒雲蔽ふ、須臾にして城上に飛來すれば鶴群なり、將士仰ぎ見て怪まざる者なし。

清正士卒に云つて曰く、

吾れ此國にある事既に七年、而も未だ鶴の生棲するを見ず、是天神の加護ならん、諸士夫れ奮勵せよ。

云ひ終るや忽ち肥馬に跨り、城門を開いて突出す、士卒先を争ふて附從し明軍を討つ。應援の諸將亦清正と共に敵陣を強襲す。明軍遂に支ふる能はず、逃るを追ふて首を斬る事五千級、吳惟忠、茅國器等も漸く身を上り。茲に於て初めて蔚山の重圍脱け、清正諸將を城中に誘ひ、大いに戦勝の祝宴を張る。

(二十六) 黄石山の戦 清正部將の奮戦

慶長の役、慶尙道の觀察使李元翼、元帥權慄等道内の山城を修理し、我軍を防がんとす。公山、金鳥、龍起、富山等の諸城を改修し、而して公山、金鳥は最も民力を用ひ、悉く傍郡の兵器糧餉を收め、且つ守令を督し、盡く老幼男女を城内に入らしむ、故に遠近騒然たり。加藤清正、西生浦より西して全羅道に入り、將に小西行長等が水路の兵を合し、南原を收めんとす。權慄等皆風を望んで去り、令を四方の小城に出し、鬼將軍清正來ると告ぐ。各城兵皆解散す。義兵の將郭再祐、獨り昌寧の火王山城に據り、以て死守せんとす。我軍山下に到り、仰いで城廓を見る城内寂として、人馬の音を聞かず、即ち去る。

安陰縣監の郭俊、亦黄石山城にあり、前金海府使白士霖、亦た城中に來る。霖は勇士にして衆皆其の到るを喜ぶ。

清正が軍既に城下に着し、城を包圍し、盛んに銃彈を送る事雨の如し。

城内忽ち亂れ、霖先づ搦手の城門を開いて逃る。我軍の伏兵急に起ち、城門を破つて突入す。城將郭俊自ら其子郭祥、郭厚及び女婢柳文虎と共に、追手の城門を開き、戟を舞し、馬を並べて我軍中に突撃し來る。我軍爲めに討たる者多く、士卒遂巡す。木村又藏、井上大九郎、齋藤立本、庄林隼人等。是を見て、大に憤り、槍を上げて戦ふ。大九郎直ちに郭俊を刺し、郭俊馬より落つ。文虎亦た又藏と戟を合す事二三合、馬を返して走らんとす。又藏鎧を掴み、馬上に之を生擒す。郭祥亦た立本の爲めに討たれ、郭厚單身漸く逃る。時に郭氏の女にして則ち文虎妻、遙かに城中より父夫兄弟等の戦死を望觀し、身を躍らして、城上より崖下に投じて死す。城將趙宗道、後門にありて能く戦ふ、前門既に破るゝと聞き、妻子を刺して刎死す。其の辭世に曰く。

空峒山外生猶喜。

巡遠城中死亦榮。

(二十七) 南原城の陥落 守將の逃亡

南原は全羅道の鎮なり、黃石山の戦破れ、又た閑山島の舟師崩へ、韓軍南原城に入つて死守す。

我海陸の兩軍、慶長二年秋八月下旬。慶尙、忠清兩道の國境なる昂洲に至り、兵を合す、其數實に十餘萬人なり。南原の守將、明の楊元及び全羅兵使李福男等、壘を高くし渥を浚へ、大小の銃砲を連ね、以て我軍の到るを待つ。

時に韓軍は雲峯に權慄、李元翼の兩將あり、全洲には陳恩衷數千騎に將として守備し、一朝急あらば、相應じて互に援助せんとす。

清正、先づ黃石山に郭俊父子及び柳文虎を斃すと聞くや、權慄、李元翼戦を交へずして城を棄て走る。陳恩衷未だ之れを知らず、即ち我諸將全洲を攻めて陳を捕縛せんとし、諸將皆其先を争ふ。茲に於て鬪を以て決す。鳥津義廣、加藤嘉明當選し、直ちに兵を領して全洲に向ふ。浮田、

毛利、及び加藤、小西等の諸將は、八月廿三日を期し、南原城を攻む。城中の將士、能く防戦して我軍容易に進む能はず。遂に重圍して其の食道を絶つ事三日三夜。而も權慄、李元翼等南原の急を聞くも敢て來らず、城中大に困む。行長一策を案じ、一日圍を解いて退くこと二里餘。城將楊元遙かに之を望見し、諸軍の將に城を出で追撃せんとするを止め、未だ敢て城門を開かず。行長兵卒に命じ、稻禾柴薪を徵發せしめ、以て一大東となし、夜中竊かに城外に運ばしめ、皆濕に投ず。濕爲めに埋む。行長直ちに、軍を麾いて城中に突進す、城中大に亂れ、將卒皆四方の門を開いて潰走す。城將楊元、遂に其の爲す無を知るや、衣を脱し、破笠を頂き、變裝して漸く海洲に走る。金孝義、李榮芳、劉之鶴等も亦皆走る。榮芳は長曾我部元親に討たれ。之鶴は長政の部將森太兵衛に捕へられ、孝義は水田中に身を潜めて漸く逃るゝを得たり。韓軍の死者三千餘人、捕虜千二百人

(三十八) 全州の敗 明提督韓王を誥る

全州は全羅北道の都なり、慶長の役、陳愚衷軍民二萬餘を以て之れを守り、糧食武具を納めて嚴守す、時に南原は我軍の爲めに包圍せられ、急旦夕に迫り、全州に援兵を乞ふ事甚だ頻なり。

茲に於て、陳愚衷兵を領し南原に赴き助けんとして發す。途中島津義廣、加藤嘉明等の兵五千餘騎と會ふ。陳愚衷大に驚き、走せて城に歸り、門を閉ちて死守す。義廣、嘉明之を追ふて直ちに包圍し、火箭を飛ばし、銃彈を送つて攻撃甚だ急なり。然るに南原既に陥落し、楊元逃れ李福男等死すると聞き、城中の軍民大に恐れ、資財を抛げ、妻子を伴ふて逃れんとす、愚衷頻りに之れを制すと雖も、士民皆聞かず。愚衷大に怒り、汝等我言を聞かずんば悉く斬殺すべしと、劔を抜き直ちに一人を捕へて殺す。士民憤り、忽ち城内の糧食庫に放火し、門を開いて逃走す。義廣、嘉明等城中火の上るを見、忽ち軍を進めて城内に入る。愚衷狼狽、城後

の間道より逃る。

斯の如くにして南原先づ落ち、而して全州破れ。是より全羅道内又た我軍に抗する者なく、軍威四方に振ひ、韓庭爲めに震駭す。明の提督此の報を聞くや。

韓皇に謁して曰く。

明、貴國の爲めに大兵を出して戦ふ、然るに韓軍の更らに出て戦はんとする者なく、只、明軍の將卒に戦を任せ、敢て國家の爲め力を致さざるは何故ぞ、南原、全州の敗、全く國王の責にあり。

而して大に宣祖に面迫し、猶ほ聞かれずんば、直ちに軍を率ひて歸國せんとす。宣祖大に驚き、更らに八道の兵を徴し、以て日本兵を撃退せんとす。

(二十九) 稷山の戦 基次、利安の勇戦

慶長二年九月朔日、我總軍南原に屯し、再び北上の策を講ず。

總指揮官毛利秀元諸將に謂つて曰く。

先きに文祿の役、韓王都に破れたるに懲り、今や京城附近、新たに城砦を構へ、加ふるに明の大軍を以つて守ると。然れども未だ事の眞疑を知らず、先づ黒田長政の軍を以て之を探らしむべし。

諸將直ちに之れに賛し、長政亦軍を率ひて發す。

先鋒の將後藤基次、栗山備前守利安等、韓民を捕へ耳鼻を削いで軍威を示す。道路の諸民傳へ聞き大いに恐れ、京師に至りて我軍の再來を告ぐ、京城爲めに震駭す。

時に明軍の將解生等、王城防備の者、之を聞き直ちに兵を發して、途中我軍を迎撃せんとす。長政も亦是を探知し、戦備を整へ進んで稷山に至る、曠原肥野茫漠として、前に大山あり、山麓の道路矩曲し、大なる横穴あり。基次、利安等の部下、將に穴前を横切らんとす。明兵穴中にありて、箭を放つ事雨の如く、我軍爲めに斃る者五十餘人。基次、利安大いに怒り、直ちに進んで戦はんとし、部下を指揮すと雖も、道曲つて

前方を見る能はず、將卒爲めに躊躇す。時に部將井口與市の從者に、山崎喜兵衛と云ふ剛士あり、單身斥候として、大刀を提げて進み、將に短道を曲らんとして敵の伏兵に遇ふ。喜兵衛刀を上げて忽ち敵を斬る事五人、更らに踵を返して我軍を麾く。基次、利安直ちに軍を進めて呐喊す、明軍大いに驚き、陣形既に動く。基次、利安自ら敵陣中に突入し、奮戦敵を斃す事無數、解生が部下の將、揚登山、牛伯英。基次、利安の兵を包圍して掩撃し來る。兩將亦列を整へ、刀鎗を翳して敵軍中に突撃し、直ちに是れを突破せんとす。明軍忽ち潰へて走る。

基次、利安、小勢を以て、敵の大軍を長驅するは戦の法にあらずと、則ち軍を止めて、本隊の至るを待つ。明軍望見し、以て我軍の退却となし、再び潮の如く我軍に逆襲す。時に長政の本隊將に至り、直ちに明軍と戦を交ゆ。旌旗秋風に翻つて、刀鎗閃々。楊登山、牛伯英等戦はずして先づ走り、途中大橋を撤し、楯を對岸の堤上に並べ、以て我軍の進撃を防がんとす。我軍敵を追ふて大川に至るや、橋落ちて渡るを得ず。不

軍爲めに躊躇す。長政の家臣に船曳左衛門なるものあり、一子守菊年僅かに十六歳、父と共に軍に従ふ。今大川の堤上に至り、諸將士の馬を止むるを見云て曰く。

川心の深淺は計り難きも、今流に立つ橋桁を見るに、川心甚だ深からざるが如し、乞ふ我先頭せん。

先づ駒を水中に入る、諸將皆之れに従ひて全軍轡を並べて渡る。渡れば敵の堤上にあるもの、鏃を揃へて亂射する事甚だ急なり。我軍亦矢を射して敵の陣中に突撃せんとす。敵既に之れを知り、又た潰走せんとす。長政の小姓に野村市右衛門、久野治右衛門の兩人あり。互に十八才、而も若年にして能く戦ふ。各々三十餘騎を麾き、大聲敵中に突入するに、明軍中よりも亦、鮮麗なる若武者現はれ、戈を舞して走せ來る、治右衛門先づ槍を上げて馬を進め、將に戦はんとするや、馬驚き誤つて落馬す。敵將馬を躍らせ、戟を延べて將に治右衛門を刺さんとす。市右衛門之れを望見し、馬を飛ばせて來り、敵將の背後より組み、互いに馬より落ち、

遂に之れを刺す。治右衛門漸く間を得て逃る。時に明將李益喬さらに新來の部下を卒ひて來り、我軍を撃たんとす。

明將李益喬、精兵を麾て逆襲し來る。長政の臣後藤又兵衛、銃隊三百人を下知し、潮の如く來襲する明軍中に銃彈を送る、硝煙未だ散せざるに乗じて、森太兵衛、吉田壹岐、竹森清左衛門、菅六之助、原彌右衛門、黒田三左衛門、栗山備後守利安等を首とし、黒田の勇士數百騎、吶喊を伴て突入す。明軍爲めに亂れて走る。

森太兵衛友信は當日赤革の甲冑を着し、三尺六寸の大槍を提げて、敵を刺す事無限、敵亦友信に向ふ者なし。此の衝突に於て明の先鋒既に破れて走る、解生、李益喬、楊登山、牛伯英等、猶ほ止まつて能く兵を指揮すと雖も、我軍の銳鋒を遂に支ふる能はず、將に全軍潰走せんとす。時に毛利秀元一萬餘人を率いて來り、長政の軍と更りて戦ふ。明軍今新來の大軍に會ひ、狼狽成す處を知らず潰走す、毛利、黒田の兩軍、隊を亂して追撃する事甚だ急なり。

基次、利安之れを制して曰く。

小勢を以て大勢を追撃す、悉く兵法あり、敵の山間に逃走するは、但し吾を誘はんが爲なるべし、之れを長驅するは、之れ大いに兵家の忌む處なり。

時に日巳に春かんとす、兩將軍を收めて追ふ事を止む此の戦に於て敵の首級を得る事實に六百二十餘級にして、捕虜亦三十人を得たり。

(三十) 征韓軍の實力 主將と兵數

豊臣秀吉征韓の軍を起し、文祿元年三月十三日附を以て、諸將に命ぜし軍隊編製は實に征韓軍の主力を明かにするものにして、今之れを揚ぐれば左の如し

- 第一軍——五千人羽柴對島侍從宗義智——七千人小西攝津守行長
- 三千人松浦刑部法印——二千人有馬修理太夫——一千人大森新

八郎——七百人五島大和守以上合計一万八千七百人

第二軍——一万人加藤主計頭清正——一万二千人鍋島加賀守——八百人相良宮内大輔以上合計二萬二千八百人

第三軍——五千人黒田甲斐守長政——六千人羽柴豊後侍従(大友義純)以上合計一萬千人

第四軍——二千人毛利壹岐守——一萬人羽柴薩摩侍従(島津義廣)——二千人高橋九郎其他——以上合計一萬四千人

第五軍——四千八百人福島左衛門太夫——三千九百人戸田民部少輔——三千人羽柴土佐侍従(長曾我部元親)——七千二百人蜂須賀阿波守

第六軍——一萬人羽柴筑前侍従(小早川隆景)——千五百人羽柴久留米侍従(毛利秀包)——二千五百人羽柴柳川侍従(立花宗茂)——八百人高橋主膳——九百人筑紫上野介廣門以上合計一万五千七百人

第七軍——三万人安藝宰相(毛利輝元)

第八軍——一万人對馬在陣備前宰相(浮田秀家)

第九軍——八千人壹岐在陣岐阜宰相(毛利秀勝)——三千五百人壹岐在陣丹波少將(細川忠興)以上合計一万千五百人

以上第九軍を總計すれば實に十五万八千七百人にして、旌旌天を蔽ひ、帆影支海を壓して、威風堂々たりしは、既に雞林の山河を呑むの慨ありしなるべし。

右は第一回渡韓軍の編製なるが、其後和議破れて秀吉再び第二回の渡韓軍を編製す、時に慶長二年二月廿一日なり、其の主將及び兵數は左の如し

第一軍——第二軍——一万人(三々なへ)加藤主計頭清正——七

千人小西攝津守行長此兩人先手二日替へ但し闇臥非番は二番目に可備也——千人羽柴對馬侍従——三千人杉浦刑部法印——二千人有馬修理太夫——千人大村新八郎——七百人五島大和守以上四々なへ合計一万四千七百人

第三軍——五千人黒田甲斐守以下七將略す(三)合計一万人

第四軍——一万二千人四(三)鍋島加賀守、同信濃守

第五軍——一万人三(三)羽柴薩摩侍從

第六軍——三千人羽柴土佐侍從——二千八百人藤堂佐渡守——二

千八百人池田伊豫守——二千四百人加藤左馬之助——六百人來島出

雲守——千五百人中川修理太夫——二百人菅平右衛門(以上四(三)な)

合計一萬三千三百人

第七軍——七千二百人蜂須賀阿波守——二千七百人生駒讃岐守——

千二百人脇坂中務少輔(以上三(三)な)合計一萬千百人

其の他三萬人(五(三)なへ、同勢)安藝宰相、一萬人備前中納言(此兩人先陣交

り)ふさんかいの城(釜山浦城?)一萬人筑前中納言、御目付太田飛彈守

あんこうらいの城(東萊城?)五千人羽柴柳川侍從、五百人高橋主膳正、か

とくの城(加徳城?)五百人筑紫上野介、竹島の城千人羽柴久留米中納言、

せつかいの城(西生浦城?)三千人淺野左京太夫、城中在番衆を合して計二

萬三百九十人、總軍實に十四萬千五百人にて、釜山海、壹岐、對島、名護屋には寺澤志摩守を置き朝鮮各地よりの報告送附の任に當らしめたり。

然りと雖も不幸中途にて秀吉病に斃れ、遂に大志空しく水泡に歸せしは吾人の大に悲むべき次第にて、我國力發展上に於ても亦多大の打撃と云はざるべからざるなり。

(三十一) 講和談判 條約七ヶ條

韓皇宣祖、平壤より更らに西に逃れ、連戦連敗遂に社稷の危きに瀕するや、頻りに使を明庭に遣はして救を哀訴する事甚だ切なり、而も明庭亦滿哥の亂ありて容易に兵を動かすを得ず、廟議百出一定せず。時に司馬石星なる者あり建議して曰く。

今や倭軍連戦破竹の勢を以て朝鮮を柔躪し其の先鋒既に平壤を陥れ將に進んで鴨綠江を渡り大明に侵入せんとすと、今に於て倭軍の防禦に

備ふる處非すんば後日悔ゆとも及ぶべきなからん。然れども今や我國滿哥の亂ありて直に大軍を動かすを得ず、如かず策を回らして倭軍の銳鋒を避けざるべからず。臣思ふに今朝庭使を遣はし倭軍と和を講じ以て彼の急進を止め、徐ろに謀を回らすも亦可ならずや。

衆議一決し即ち遊擊將軍沈惟敬を遣し平壤に至らしむ、行長惟敬と會し其の術中に陥り和を講せんとす。

惟敬曰く。

回答の期は以後五十日を以てせよ。

行長之れを諾す、惟敬行長の條件を携へて明に歸る。

然るに此の秋に當り、滿哥の亂平ぎたれば、明庭は其の征討將軍たりし、李如松を軍の總司令官となし、大軍を領せしめ朝鮮役援軍として來る。

小西行長先づ平壤に破れ、京師の諸將驚愕す、然りと雖も小早川隆景寡兵を以て碧蹄里に勝ち誇りたる如松の大軍を擊破し、之れより明軍意氣揚らず。而して惟敬等再び來つて行長等に和を説き、遂に議成なりて七

事を約す、其の條文左の如し。

- 一、和平誓約無相違者、大地縱雖盡、不可有改變也、然則迎大明皇帝之賢女、可備日本之后妃事。
- 一、兩國年來依間隙、勘合近年斷絕矣、此時改之、官船商船、可有往來事。
- 一、大明、日本通好、不可有變更旨、兩國朝權之大官、互可題誓約事。
- 一、於朝鮮者、遣前驅追伐之矣、至今彌爲鎮國家、安百姓、雖可遣良將、此條目伴件、於領納者、不願朝鮮之逆意、對大明、割分八道、以四道並國城、可還朝鮮國王、且又前年從朝鮮差三使、投木瓜之好也、餘濫付與四人口實。
- 一、四道者既返投之、然則朝鮮王子、並大臣一兩員、爲質可有渡海事。
- 一、去年朝鮮王子二人、前驅者生擒之、其人非凡間、不混和平、爲四人度、與沈遊擊可歸舊國事。
- 一、朝鮮國王之權臣、累世不可有違却之旨、誓詞可書之、如此旨趣、

四人向大明勅、縷々可陳說之者也

文祿二年癸巳六月二十八日

石田治部少輔

增田左衛門尉

大谷刑部少輔

小西攝津守

之れと同時に、秀吉の明國敕使に報告すべき條目として、各諸將に交付したる書は左の如し。

一、夫日本者神國也、神而天帝、天帝而神也、今無差、依之國俗帶神代風度、崇王法、體天則地、有言有令、雖然風移俗易、輕朝命、英雄爭權、群國分崩矣、子懷胎之初、慈母夢日輪入胎中、覺後驚愕、而召相士策之、曰、天無二日、德輝彌綸、四海之嘉瑞也、故及壯年、夙夜憂世憂國、再欲復。聖明於神代、遺威名於萬代、思立不止、纔歷十有一年、族滅凶徒姦黨、

而攻城無不拔、國邑無不有、乖心者自消亡矣、已而國富家娛、民得其處、心之所欲無不遂、天之所授也。

一、日本之賊船、年來入大明國、橫行干處々、雖成寇、予曾依有日光照臨天下之先兆、欲匡正人極、既而遠島邊陲、海路平穩、通貫無障礙、制禁之、大明亦非所希乎、何故不伸謝詞、蓋吾朝小國也、輕之侮之乎、以故將兵欲征大明、然朝鮮見機差遣三使、結隣盟乞憐、丁前軍渡海之時、不可塞糧道、遮兵路之旨、約之而歸矣。

一、大明、日本會同事、從朝鮮至大明、啓遠之、三年內可及報答、約年之間者可偃干戈旨、諾之、年期已雖相過無是非之告報、朝鮮之妄言也、其罪可逃乎、各自已出、怨之所政也、此故玄歲春三月、到朝鮮遣前驅、欲匡違約之旨、於是設備築城、高壘防之矣、前驅以寡禦衆、多々刎其首、疲散之群卒伏林櫛、恃窟臂舉蟹戈雖窺隙、交鋒則潰散、追北數數千人討之、國城亦一炬成焦土矣。

一、大明國救朝鮮急難、而失利、是亦朝鮮反問故也、於此時大明勅使兩

人、來于日本名護屋、而說大明之繪言、答之以七件、見于別副、為四人可演說之、可有返章之間者、相追諸軍渡海可遲延者也。

文祿二年癸巳六月二十八日

石田治部少輔

増田左衛門尉

大谷刑部少輔

小西 攝津守

條約の主眼は韓半島の占領にあり、然るに惟敬等其の間に居て徒らに小策を弄し、辭を變じて以て明庭に復命して曰く。秀吉封冊を望むと告ぐ。茲に於て慶長元年明使楊方亨等至りて秀吉に謁し、携ふる處の國書を捧ぐ、文中封冊の事あるも亦割地の事なし。秀吉忽ち激怒し書を裂き、明使を追い、再び第二回征韓の大軍を興す(封冊文は本書巻頭にあり)

三十二 宣祖蒙塵の地 猶ほ袖濡す松の下露

我軍連戦、破竹の勢を以て北上し、將に京師を攻めんとす。敗報續々京師に至り、京師爲めに震駭す。即ち文祿元年四月三十日、曉を冒して車駕敦義門(西大門)を出で、碧蹄驛を過ぎ、雨を冒して臨津江を渡り、東坡驛を經、五月一日東坡を發して開城に向ふ。百官饑に泣く、即ち南嶽が糶米二三斗を索め、漸く口を糊するを得たり。此夕開城府の南門外に次す。三日我軍京師に入ると聞き、開城亦支ふべからずとなし、更らに北して金郊驛に次し、同日興義、金岩、平山府を過ぎ、寶山驛に至る。始め開城を出るや、倉卒の間、宗廟神主を穆清殿に置き、遂に忘れて來る。茲に於て守室一人號泣し、神主を敵に委すべからずとなし、即ち晝夜人を走せて、開城に赴き奉還せしむ。五日安城、龍泉、劔水の諸驛を過ぎ鳳山郡に至り、六日進んで黃州に至る、七日漸く中和を過ぎて平壤に入る。宣祖平壤城中に居る事三十四日、即ち六月十一日、我軍の攻勢

又た猛烈ならんとして、再び平壤を出で率邊に向ふ。時に大臣崔興源、
俞泓、鄭撤等僅かに扈從す。博川に至る比、遼東の鎮撫、林世祿來援す。
宣祖車軒に御し問ふて曰く。

平壤守るべきや。

時に宰相柳成龍坐にあり。

答へて曰く。

人心頗る守るべきに似たりと雖も、援兵を速にせざるべからず、臣、
爲に此處に来る、大臣天兵明軍を迎へて、速かに馳せ援はんことを請
はんとして至れり。

然れども、未だ明軍の至るを見ず。平壤遂に陥り、宣祖亦た嘉山に至り、
東宮は廟社主を奉じて博川より分れて嘉山郡に入り。而して更らに義州
に走る。

文祿二年四月十二日行長惟敬と和を定め名護屋に至り、我諸將京城よ
り軍を却け、五月釜山に還るや、月の十五日宣祖漸く義州より京城に歸

る。京を去つてより茲に至る實に滿一ヶ年なり。

三十三 征韓日誌 文祿慶長兩役

豊公征韓の役に用ゆる曆日は、能く日曆及び明曆を混同する事あり、
されば或は之れに迷ふ者も多からんを以て、今當時の日曆の日誌を掲ぐ
れば左の如し。

後陽成天皇六年(西曆千五百九十二年)即ち文祿元年(壬辰我紀元二千二百
五十二年、朝鮮宣祖二十五年、開國二百一年)正月五日秀吉征韓の軍を部
署す、同十八日小西行長、宗義智等秀吉の命を奉じて朝鮮の助靜を窺ふ。
四月朔行長、有馬、宗等と對馬大浦を發して釜山に航す、十三日行長
釜山城を陥る、十四日直ちに進んで東萊城を抜き、十六日梁山に至る、
十七日密陽を占領す時に加藤清正、鍋島尙重釜山に至り、黒田長政安骨
浦より進んで金海を陥る、二十日清正慶州を抜く、二十三日長行善山に
至り、二十五日秀吉大本營を名護屋に進む、二十七日行長忠州を攻め、

二十八日清正外諸將等と忠州に會す。
五月二日行長東大門より京城に入り、三日清正亦續いて南大門より京城に入る。

六月三日秀吉諸將に命じて猶ほ進んで討明の實を上げむ事を命ず。十四日黒田長政、宗義智等平壤を陥落す。

七月十六日行長明の援兵を平壤城外安定館に擊破す。

八月二十九日明の遊撃將軍沈惟敬平壤に來り行長と降福山麓に會して七ヶ條を約す。

十月二十七日明將李如松、李如柏等大軍を率ひて山海關を發し鴨綠江を渡つて朝鮮に向ふ。

十一月十四日沈惟敬再び平壤に來る。

文祿二年正月三日如松の大軍平壤に着す、八日如松牡丹臺を焼き行長を平壤に圍む、鳳山の守將大友義純先づ遁れ行長苦戰惡闘遂に支ふるを得ず營を焼き氷上を越へて敗走す、十二日京城の守將増田長盛、石田三

成、大谷吉隆等相議して諸將を京城に集合せしむ、十九日如松勢に乗じて開城に來り、二十七日小早川隆景、立花宗茂等と兵を合せ如松の軍を碧蹄館に迎撃す如松大敗して奔る。

二月十六日秀吉黒田孝高、淺野長吉等を渡韓せしむ、清正石田三成が釜山に退きて糧を得んとする議を退け、李如松を開城に破る。

三月十六日沈惟敬西江に來り再び和を講ふ。

四月十二日行長惟敬と龍山に會して和を議す、十七日行長釜山に至り秀吉の命を受けて名護屋に歸る、十八日諸將京城より退く。

五月七日諸將釜山に還る、十五日明使徐一貫等軍に従ふて名護屋に至り、韓王宣祖亦義州より漸く京城に還る。

六月二日秀吉清正に命じ捕虜の二王子等を返さしむ、二十八日秀吉平和條件七ヶ條を明使に報せしめ、明使去るに望んで内藤如安、小西如清等を同行せしむ、二十九日清正、行長、長政等晋州城を陥れ二萬人を屠殺す。

九月二十三日秀吉和議を危み清正等に使を派して守備を怠らざらしむ。

十一月三日清正安骨城を攻めて應援の明將劉綎を破る。

文祿三年九月二十九日福島正則等明の軍船と唐島に戦ふて撃破す。

十二月十四日派遣使内藤如安、小西如清等明主神宗に謁して和議を約す。

文祿四年六月朝鮮禮曹判書を使はして秀吉に國書を呈す。

慶長元年六月二十七日明使楊方亨、沈惟敬等伏見に至る。

九月羽秀吉楊等を伏見城に延し、其の捧呈する國書を見る、文約に違ふを憤り封冊を裂く、九日明使等大に驚いて和泉堺より船に乗じて歸國す。

二年正月朔秀吉浮田秀家、毛利秀元を總司令官とし再び朝鮮を討つ、十三日清正、行長先づ名護屋を發す。

七月十五日脇坂安春、藤堂高虎等朝鮮の船軍と唐島に戦ひて撃破す。

十二月二十二日明將楊鎬、麻貴等清正及び淺野幸長等を蔚山城に包圍す。

す。

三年正月四日明軍慶州に敗走す、五日秀家、秀秋、高虎、安春等朝鮮より還る。

八月十八日秀吉死す享年六十三才、徳川家康、前田利家等相議して徳永壽昌、宮木豊盛等を朝鮮に遣り諸將をして和を議して軍を旋させしむ、二十九日長政、三成、秀元等軍を率て博多に至り我軍を返らしむ。

十月朔島津義廣、子忠恒と共に明將董一元等を泗川に討つ。

慶長七年五月二十三日家康書を宗義智に與へて朝鮮と修交の事を促す、嗚呼征韓の將士韓地に留まる事前後七年、此の間楯風沐雨、勁敵と闘ひ、匹寒と戦ふ、其の艱難苦痛や蓋し思半ばに過ぎしものありしならん、然りと雖天英雄の壽を惜み絶大の壯圖亦た挫折するに至る。噫々

(三十四) 倭寇の事 文祿以前に此の舉あり

晋の穆公昇平八年、我仁徳天皇の五十三年新羅王奈句九年、新羅來貢

せず、我政府即ち竹葉湖を遣はして之れを責む、茲に於て竹葉湖大軍を率ひ、海を航して至る、舉朝爲めに驚懼惜かず、兵を出して防ぎ戦ふ。時に新羅軍中に策士あり、草木を集めて偶人數千を作り、皆兵杖を帯ばしめ、之れを慶州吐舍山下に列ね、別に兵千餘人は斧峴東原に伏せ、急に我軍を撃つ、我軍計を知らずして進む、伏兵時に起つて我軍敗走す。竹葉湖白鹿を獲て歸朝し事を我政府に報ず、政府大いに怒りて弟田道をして再び新羅を討たしむ、田道到るや忽ち兵を進め、四邑の人民を捕虜して歸朝す。世人之れを以て倭寇となす者あるも、要するに弘安以前に於ては、皇師常に征討の軍を起し、只其罪を問ふて事を糺し、敢て掠奪を加へず、之れ實に寇にあらず、韓史亦之れを書するに當り倭となして又た寇となさず。

抑も倭寇なるものは我北條氏の時代に於て紀綱弛廢するに乘じ、西海の邊民出で、韓を掠め又た討つ、即ち之れ寇の始めなりとす。

高麗忠定王の二年、固定巨濟に倭寇あり、合洽萬戸雀禪等迎へて之を

撃つ、是れを以て倭寇の嚆矢となす。爾來年々寇禍絶へず。

元の至正廿一年、即ち高麗恭愍王九年入寇せし者は其勢甚だ猛烈にして、全羅道沃溝より、京畿道平澤等實に十餘隊に及び、喬桐に迄至る、皇都爲めに震駭し、柳潑を以て京畿兵馬都統使となし、李春富を東江都兵高使、李成桂李氏太祖を西江兵馬使に任じ、坊里の壯丁を募りて軍となし、百官をして皆戦を助けしむ。

時に參政鄭世雲、百官の軍に従ふは諫官の從事、古例になしとして大いに争ひしも容れられず。高麗朝廷は實に衆を盡して防戦に力む。此の寇勢破竹の如くにして、八道の山川爲めに震動せり。之より倭寇の侵掠、愈々益々甚だしくして、明の洪武年間の如きは、二十七艘の艦隊、舳艫相叩みて來り、揚州に侵入し、留る事三日に及べり。韓廷又た兵を出して戦へども利あらずして敗走す、倭寇は其の初めに於ては慶尙、全羅兩道の邊境を侵すに過ぎざりしも、次第に年を重ねるに従つて、兵勢頗る熾んにして、遂に西北及び東南の諸道に及び、京畿の諸縣亦此の害を被

るに至る。

當時韓國の兵備弛緩にして諸兵戰に習はず、故に倭寇の至る毎に戰へば必らず破れ、攻むれば必ず敗す。連戰連敗の餘殆んど家國社稷の危急に瀕し、八道亦亡滅せんとす。韓廷の臣等、竊かに之れ日本國王の後援をなす處ならんとなし、寧ろ早く講和の策を講ずるに若かすと、即ち羅興儒なる者を遣し、我に和を乞はんとしたれども、遂に其の目的を達するを得ず。時に扶餘公州に倭寇あり、元帥朴仁桂之れに戰ふて死す。崔瑩自ら討伐を請ひ、寇を攻めて捷つ。然れども倭寇未だ退かず、寧ろ橫行甚だし。

是に於て韓廷又大いに諸將を部署し、崔瑩を以て海道都役使を兼しめ、桓祖を以て楊廣全羅慶尙道都巡察使となし、邊安烈を以て副とし、其の節制を受けしめたり。蓋し倭寇一度鎮浦に破れしも、再び勢を挽回し、猛進各地を攻陥し、掠奪殺生を逞ふす。三道沿海の地、爲めに瀟然一空、倭寇始末てより以來未だ此の如きは其の比を見ず。故に韓廷大軍を出さ

んとして、各部署を定め赴き撃しむ。

討寇軍漸く王都を發す、軍行遅々として春遊の如く、前鋒先づ敗走す、倭寇は進んで雲峰縣を焚き、引月驛に侵入し。聲言して曰く。

韓山の風光轉た美なり、我軍將に馬を干光の金城北上に進めんとす。

中外震駭す、是の時に當り、桓祖、安烈等と兵を率ひて南原に至り、敗戦の將卒を合せ、軍議して曰く。

倭嶮にあり、其出るを俟つて一撃破るべし、之れ即ち萬金の計なりとす。

時に李成桂座にあり、慨然として曰く。

帥は今や未だ賊を見ざるに既に恐る、賊に遇ひて未だ一戦を交へざるは、各軍責を奈何せんや。

即ち馬に乗じ、士卒を麾いて急に倭の軍營を襲ふ。倭軍亦嶮に寄り、銳兵を出して戦ふ事猛烈なり。李成桂自ら陣頭に立ち、大羽箭、柳葉箭を

以て射る。七十餘發、皆當らざるなし。倭軍中に一將あり。槊を横へて李成桂に肉迫せんとす、事甚だ急なり。偏將李豆蘭射て之れを殪す、成桂の馬亦矢に當りて仆る。即ち副馬に乗る、副馬亦仆る。乃ち又た易乗す。適々一流矢あり、來つて成桂の左脚に當る。成桂徐ろに矢を抜き、氣益々壯なり。時に又た一將あり、倭軍中より現る。年齒未だ十有五六、骨貌端麗にして驍勇比なく、白馬に乗じ槊を舞はして馳突し、向ふ所披靡す。

成桂之れを望見し、豆蘭に云つて曰く。

我彼が兜を射るべし、汝而して更らに之れを射よ。

馬を躍らして射る、兜總絶つて斜なり。倭將急に整ふ、成桂亦た射る、兜遂に落つ。豆蘭直ちに射て之れを斃す、是に於て倭勢頓挫、遂に大に破れて退く、流血山野草木を染て悉く紅なり。

(三十五) 神功皇后時代

馬山浦の孤雲台と騶山亭

皇后の四十七年三月百濟我に朝せんとして路を知らず、斯麻宿禰卓淳國に使用するに及び、百濟王使を發し貢せん事を約す、而して發す、新羅王途に百濟の使者を要し、貢を易へて我に朝す、朝廷新羅の貢珍奇多くして、百濟の貢下劣なるを怪み之れを詰る。新羅の使者實を以て答ふ。朝廷乃ち千熊長彦を以て問罪使となし、往いて新羅を攻めしむ新羅服せず。皇后大いに怒り、四十九年三月荒田別、鹿我別を以て將軍となし、兵を發して新羅を討つ、時に百濟の使者等新羅にあり、乃ち嚮導を命じ、先づ卓淳國に至り、兵を百濟に徵す。百濟本羅斥資沙々奴路して精兵を領し來り、軍機大いに振ひ、俱に新羅を討つて破る。

之れを韓史に見るに、我兵新羅の邊郡を侵す、戰艦海を蔽ふて至り、鼓撃の聲、旌旗の色、天を震はし、地に彩す、新羅王南解大いに驚き、

面縛して出て降る。叩頭百千謝して曰く。

設令ひ大陽西より出で、鴨綠江逆流するも、誓つて朝貢を欠かず、舟楫を乾かさず、馬梳馬鞭を天廐の隸に献せん、後世子孫若し此誓を更へば、天神地祇共に殛罰せんと。

之れ即ち皇后征討の時にして、其後又數々來貢せず、時には我使を襲して之に獻れて曰く。

早晚汝の王を以て鹽奴となし、汝の王妃を以て炊婢となさんと云ふ。茲に於て朝廷再び荒田別、鹿我別に命じて又た討たしむ。百濟王肖古、其の子と共に來援して意流村に會す。諸城風を望んで降る、千熊長彦等も亦來る。滿廷震慄し王出で、抽村に走り、使者をして來り云はしむ。言に曰く。

前月の言眞に戯れのみ、豈に師を興して此に至るを思はんや。

然れども之れを燒殺し、翌年二月凱旋す。皇后在陣の地は、馬山附近にて、同所の孤雲台は皇后の應神天皇を産みまし、處、麟山亭は時に皇后

の凭れし處なりと云ふ。

(三十六) 文祿役と關羽廟 其の靈驗を謝して

京城に南廟、東廟、北廟のあるは皆人の知る處なり、而して之等の各廟が、文祿役に相關する所多きは趣味ある問題ならずや。先づ其の相關する所を云はんと欲せば、夫の創設を説かざるべからず。

豊公征韓の大軍は、向ふ所敵なく、威風堂々八道を歴し、韓の國運將に累卵の危期に至りたるに不拘、晩年に於て幸に豊公の死と共に、漸く國運の全きを得たるは、之れ明軍の力にして、即ち明軍を守護する關羽の力なりと云はざるべからずとなし。其靈驗を謝して關帝廟を創立したるものにして、南廟の位置たるや、明將の陣地たりし所なりとす。即ち明の遊撃將軍陳寅、蔚山の戰に於て負傷し、歸京靜養して南大門外に陣す、陳寅は關羽崇拜者の主なる者なり。時に秀吉死し、我軍の歸國するや、之れ關羽の神護なりとし、先づ陳寅の陣地に工を起し、皇帝躬ら臨んで

國運の万歳を祈り、而して廟なる、然れども現時の廟は其後焼失の爲め新築せし者なり。南廟の工終るや、後四年にして東廟成り、北廟は文祿役と相關する事なきも、而も亦日本人に相關す。太皇帝即位十九年、我明治十五年暴徒西大門外なる我清水公使館を襲ふ。花房公使身を以て逃れたる時、兩陛下夢に開羽を見、動亂或は起らんとし、直ちに此の工を起し、翌年秋竣工す。翌十六年京城郵便局落成式に、関泳翼不意に刺され、市中混亂し、竹添公使兵を卒ひて宮中に入るや、韓兵の爲めに襲はる、陛下爲めに難を避けて北廟に入り給ふ。

(三十七) 梨太院の日本村 確たる証據物なし

梨太院は南大門を去る僅かに半里餘の南山の南麓にあり、四面山を以て圍む、之れ文祿征韓の役我軍中此處に停まりたる者ありて、其の後裔今日に至るも尙ほ存じ、日本人に對してもワイノムの語を放たず、且つ他村とも婚を結ばざる風習ありと云ふ。今此の詳細を尋ぬるに。

抑も梨太院は戸數百四五十戸餘の小村なるが、世の傳ふる處に依れば梨太院は韓人間にて日本人村と稱し、且つ村内兩三家に日本刀及び甲冑等を藏すと云ふ。然れども嘗て此の村に軍營を置かれたる事あれば、其際或は沒收されたるも知らざれども、現今是等を藏する所なし。而して村民の姓は梁、鄭の二姓多く他姓は僅かに一二に過ぎず。而して祖先の墳墓は漢江の對岸、東山里にあり。東山里は西氷庫より漢江を渡りたる處にして、墓碑は豎四尺巾一尺六寸の碑を中央にして、左右に梁氏、鄭氏の小墓碑七八基並ぶ。大碑には淑人金海氏附左、烈海將軍行忠武衛副司果梁公之墓とあり。其の裏面を見るに、公諱暹字江雲南原人、生於崇禎丁丑卒逝、辛卯享年七十五娶金氏、生四男四女、後先逝、娶李氏、生二男四女、長曰忠建、次曰忠善、三曰忠世、四曰忠宗棠、五曰忠萬、六曰忠望、一女適鄭萬雄、二女適鄭起相、忠建娶陳氏、生八女、無子、弟忠棠子、後碩養子、忠善娶張氏、生二男云々、康熙五十一年丑辰十一月日立とあり。康熙五十一年は今より百五十餘年以前なりとす。

抑も其の日本人村なる名稱の依つて來る處を聞くに、文祿の役小早川
隆景本陣を茲に布き、支陣を漢江の彼岸に置きたるも、糧食缺乏して本
陣を景福宮裡に移したるが、當時血氣盛なる壯士等制すべからざる陣中
の徒然に、附近の娼婦を弄び爲めに多くの私生子を擧げ、遂には情緒纏
綿凱旋の際に及んで、此の地に停りたる者さへあるに至れりと云へば、
甲冑日本刀等の未だに傳はりし家もあるべく、且つ其の子孫繁盛して今
日に至りしや又た必ずしも空言とは云ひ能はざるなり。
或は曰く。

文祿の役我軍京城に入るや、城内の商民畏れて散亡する者多し、故に
諸將相議して陣を城外に移す、城外の梨太院も亦諸將の陣營を列ねた
る所なり、二年五月我軍京城を退き、釜山に至り、沿海に分營せんと
するに當り、軍中の疾病者又は老年の者等、没落して衣服を變じ、以
て梨太院の村落に住せりと云ふ。

梁子と梨太院に附て考ふるに、東山里の墓碑に依れば、梁人金海金氏云

公々諱選字江雲南原人とあり。之れを要するに、我軍の降將沙也可なる
ものあり(慕華黨參照)大功を建つ、沙は退に通すべく、也可は後金姓を得
て、金海金氏と稱す。而して也可と共に降りし沙汝某なる者あり、之れ
亦武功に依つて金氏を得、同じく金海金氏と云ふ。也可は齡七十二才に
て鹿洞に死す。而して其の子孫相續いて同地方に存す、然るに沙汝某の
後半生に於ては、少しも現はれたる事なし、而も彼れ也可等と共に我軍
と戦ひしは事實にして、其終りを知らず、或は沙汝某此の地に止まりた
るには非ざるか。されば依然として日本人の後裔と云ふべし。之れ只だ
參考に迄で記す。

(三十八) 慕華堂 日本無双の不忠者

文祿元年秀吉征韓の大軍を起し、小西行長、加藤清正互に先鋒として
四月釜山に上陸し、迎戰連捷八道を風靡し明廷亦震駭す、時に清正の先
鋒の部將に沙也可と云ふ者あり。沙は姓、也可は其名なり、人となり經

幹大にして力亦絶倫、年二十二歳、兵三千を卒ひて軍に従ふ。也可幼より學を好み、讀書百卷儒道に造詣し、竊かに明の文物を崇拜する事久し、而して我國應仁以來群雄四方に割據し、虎視眈々、弱肉強食の戰國時代を受け、文物亂れて行はれず、三綱五常地を拂ひたるを見て、益々明を慕ふ事切なりしが時會々秀吉大軍を起し先づ朝鮮八道を討ち進んで明を攻めんとするや、也可大いに喜び、軍に従ひて渡韓し熟々國情を見るに、外寇多端の際衣官文物依然たり茲に於て沙直ちに一書を節度使朴晋に送り軍器を携帶し部下を從て韓軍に投降せん事を乞ふ。朴晋大いに喜び之れを許す、也可蔚山の人徐仁忠徐夢處等と共に謀を合せ兵を募り、急に清正の先鋒を襲ひ大いに之れを破る。後ち北上して京城に至り宣祖に謁す、宣祖引見嘉賞して置かず、遂に従二品嘉善大夫に叙し、再び勅に依りて慶尙道に至り我討韓軍を防ぐ、東萊梁山、機張等に轉戦して功あり。而して猶ほ銃を造り火藥を製し以て軍に分つ、韓國火銃の傳來は也可に始まると云ふ。蔚山に陣し大いに戰功あり、我軍の首級を得事三百餘級、

都元帥權傑御史韓俊謙其の功を宣祖に報す、宣祖特に姓を金、名を忠善と賜ひ正二品資憲大夫に陞叙し汝等も亦姓を金、名を誠仁を賜ひ、從二品嘉善大夫に叙せらる。

八月右兵使金應瑞金忠善の令聞を耳にするや書を送つて之を迎へ、兩者一見故舊の如く肝膽相照せり。文祿三年(廿二年)忠善金應瑞の陣に留る事數旬、時に日本軍の軍威日に益々盛にして、韓軍之れを如何ともする能はず。翌慶長元年に至り忠善瓶城に移陣す、時に明の大軍南下し韓軍の士氣稍々振ふ、忠善此に於て紅衣將軍郭再祐等と共に行長が部將玄蘇を竹溪に攻めたるも利あらずして退く。翌二年に至り金應瑞に従ひ清正の兵と戦ひ亦勝たず。年の十月金應瑞と再び兵を合せて瓶城の我軍を攻む、詭計に陥り將士の死する者多く明將麻貴之れを以て金の節制に違ふを責めて斬らんとす、忠善令狀を麻貴に送り應瑞を救はんとす

其の書に曰く

伏て願くば吾倭將の頭を獲て以て金應瑞の命を贖はん。

麻貴其の志に感じ特に之れを赦す、此夜忠善部下百餘人を傾し密かに城を踰へて我軍營に侵入し、不意に起つて我軍を撃つ、刀を揮ふて首を斬る事無數、歸りて之れを麻貴に示す麻貴大に喜び金應瑞を赦す、金威泣して忠善の大節を謝す。慶長三年春正月忠善麻貴の命を受け宗對馬守義智と飯山に戦ふて勝つ、時に右道の日本兵既に洛東江の下流を涉り靈山、昌寧、玄風、清道等に進軍す、忠善都元帥權慄の命を受け金應瑞と共に密陽に陣し日本軍と對抗す。慶長四年柳成龍出で、觀察使たり、忠善即ち兵器の不完全、防備の薄弱を述べ自ら金繼忠等と共に各道各邑の陣地を巡察し大いに軍事に力む。慶長五年に至り秀吉薨去の後徳川家康故豊公の遺命を以て征韓の諸將に傳へ速かに兵を收め、陣を撤して歸朝を勸む

日本軍歸國するや忠善は大邱を去る四里鹿洞に第を開き屋を構へ慕夏堂と號し永住す、同年媒する者ありて晋洲牧使張春點の女を娶り草庵に隠る、事二年、三十一年愛親覺羅氏の銳鋒屢々、北韓を侵掠するより自

ら進んで十餘ヶ年間北韓防備の任に當る。三十六年宣祖昇遐し光海君立つ、四十一年忠善京城に歸るや光海君後苑に引見し其の勢を憤ひ正二品正憲大夫に陞叙す、忠善聖恩を謝し再び鹿洞に歸りて住す。天啓中光海君在位十四年失政を以て位を追はれ、而して仁祖立つ、四年平安兵使兼副帥李适反對黨に惡まれ遠く寧邊に貶さる、李适之れを怨み密かに不軌を計り三月和兵二千降倭百三十(降倭とは文祿慶長の役日本兵の韓國に止まりし歸化人なり)を率ひ都元帥張晩を平壤に破り豁然南下して急に京城を衝かんとす、然れども遂に途中に誅戮せらる、時に降倭の將に除牙之と云ふ者あり驍勇を以て鳴る、捕吏恐れて近く能はず除牙之遂に南走して慶尙道に至るや、忠善之れを聞き出で、密陽嶺南嶺に迎へ温言徐るに謂つて曰く

吾亦素と汝と共に日本人なり、汝逆將に誤られて今や將に再び日本に歸らんとするか、宜しく終日大いに盃を上げて汝を送るべしと。

除を誘ひて密かに毒酒を勸む、除之を知らず大醉して臥す、忠善急に壯

士を招いて殺す、仁祖聞いて大いに喜び直ちに除の爵領を與ふと雖も忠善辭して受けず。崇祖九年北虜南下の報あり驚いて京に上れば崇祖遂に蒙塵してあらず、虜と戦ふて大いに破る、後虜と和約なるに及び再び鹿洞に歸り十五年九月三十日齡七十二歳を以て死す、嗣子散元外四男あり子孫相繼ひて今猶ほ存す

(三十九) 日韓史上の釜山 釜山と日本との關係

韓國の南端にして我邦と最も相接せしは釜山なり、従つて古今の歴史上に於ても亦其の史蹟の存するもの多し、即ち我應仁の末高麗忠貞王の即位四年より、所謂倭寇なる者來襲甚だ多く、邊疆爲めに枕を高ふする事能はざるより、恭愍王十七年講究使夏生なるものを對馬に送り和交を求め、且つ邊防の任を托せり、時に我正平二十三年なり、約成り對馬の主宗慶同年十一月を以て使を恭愍王に送りて親を表せり、之れ即ち宗對馬守と韓國との間に於ける修好誠信の嚆矢なりとす。後ち嘉吉三年、韓

の正統癸亥八年に至り、從來不成文なりし修交の訂盟を改めて成文的協約を成立す、稱して嘉吉條約と云ふ。其の文に曰く。

正統癸亥條約

- 一 島主の處毎歳米大豆共に二百石を賜はる事
- 一 歲遣船は五十隻を以て限りとす、若し止むを得ざる事あり其事由を報する時は數外更らに船を送るを許す。

而して韓國は對馬に割符を送りしより、四國九州其他諸藩の船舶にして苟も韓國に航せんとするものは、何れも皆對馬の勘合印を持たざるべからざるに至りたるを以て、之より倭寇の難漸く絶へ韓の邊疆亦稍々堵を安んずるに至れり。而して我使船の來往漸次盛にして貿易亦稍々見るべきに至るや、倭館と稱して對馬人の爲めに三ヶ所の居留地を指定す、即ち慶尙南道熊川郡齊浦、蔚山郡監浦、東萊郡釜山浦(釜山浦は今の古館則ち草梁と釜山鎮との中間なる一寒村なり)之なり

永正七年に至り故ありて邦人等皆居留地を退き隣交再び断絶したるも、大永年中に至り和交又た成り壽浦と定められし居留地は釜山浦(古館)に移さる、時に天文十三年なり。而して文祿に至り隣交亦断絶せられたるも慶長十四年に至り又舊交に復す、元和四年釜山浦を以て邦人の居留地と定めたるも、萬治元年に至り同所は舟船の碇泊便ならざるより、邦人等居留地移轉の事を建議す。寛文十二年に至りて韓國漸く之れに益し、續いて其の移轉執行をなす、之れ即今の釜山居留地之なり、延寶三年起工し同六年に至つて終る、今を去る事實に三百餘年以前なり、

後ち明治九年二月二十六日に至り、日韓通商章程成り、三月二十二日更らに釜山港借入契約成り翌十年一月三十一日を以て交換す、之より先明治元年三月二十三日我政府の宗對馬守に賜はりたる御沙汰書に曰く

今般王政一新總て外國交際の儀朝廷に於て御取扱爲在候に付ては朝鮮國の儀は古より來住の國柄益々御威信を被爲立候御旨に付き是迄の通り兩國交通を掌り候様家役に被命候故朝鮮兩國御用筋取扱候節は外國事

務補の心得を以て可相勤旨被仰出候御國威相立候様可致盡力御沙汰候事但王政御一新の折柄海外の儀別て厚く相心得盡弊等一洗致し屹度御奉公可有之候事
尋で同月又左の御沙汰書あり

宗 對 馬 守

今般被廢幕府王政御一新万機衆斷を以て被仰出候に付ては今後朝鮮御取扱の事件等總て朝廷より可仰出候條此旨朝鮮國へ可相達御沙汰候事明治元年三月我朝廷の御沙汰書ありてより後ち、宗藩にては相良大差使を遣し、尋で我政府も亦外務省出仕森山茂、吉岡弘毅、花房大蒸等を遣はし、王政復古と共に萬機の親政を報すと雖も、東萊府伯等之れを以て格例にあらずとなし、何の應ずる處なく我國使亦要領を得んとして滞在數日、而かも依然として得る處なし。斯の如くして荏苒歲月を經過し居たるに、忽ち江華島に於ける韓兵の我軍艦揚雲號の砲撃となり、明治九年黒田全權大使井上副使等は船艦を卒ひて急行仁川より京城に至り、即

ち韓政府と大いに談判する處ありたり。爾來三十四年を経て今の釜山を見るに至れり、之れを明治九年頃に比せんに、其の變化、夫の進歩但し驚くべきもの夥多なり、公貿と云ひ私貿と云ひ潜商と云ひ、方六丁餘の城内の一部に僅かに移館の功勞參判使津江兵庫の追遠忌の外は城廓外に一步たりとも出づる事能はざりし一小都か、今日の大勢を來すに至れるは思半ばに過ぐるものありと云はざるべからず。爾後日清戰役に於ける、日露戰役に於ける、釜山港が如何に我軍機上の要港なりしが露國一度絶影島租借の事ありてより、我國上下の驚愕如何なりしを見るも、日韓の軍事交通上に於ける釜山港の位置並に價値は既往の歴史に於て明かなる處なりとす

(四十) 秀吉毒殺説 可驚珍談

東萊の士に梁朝漢なる者あり、文祿の役城主宋象賢等と共に行長と戰ひ死す(本書第一東萊の勇士參照)。而して朝漢の孫敷河、時に年十二才、

我軍の虜となり、日本に護送され、秀吉が名護屋の陣に至る。敷河將に斬られんとす、秀吉慇懃召して之れに韓語を學ぶ、三月にして稍々其語に通ずるを得たり、以て大に喜び是より秀吉に愛せられ、常に近侍す。敷河の談に曰く、秀吉は常に三層屏風を背にし、高座に居し、左に銃、右に劍を置き、而して弓矢の上に槍を懸く。時に兵を興して役煩多しと雖も、敢て關せざるもの、如く、近臣の人々と常に古事を談説して樂となす。秀吉に五人の姫ありと雖も一子無し。兵を擧るの歳偶々一子を得命じて秀頼と云ふ(韓書看羊錄に曰く、秀吉の嬖臣姫と通じて生む)。

丙申の秋 敷河韓使の至ると聞き、秀吉に乞ふて之れと會見す、韓使は忽ち沈惟敬なり。秀吉館より宮に至り惟敬を引見す、惟敬常に一丸藥を持つ、秀吉恠ん問ふて曰く。

汝の携ふる物は何ぞ。

惟敬答へて曰く。

臣萬里に使し、常に偽濕の憂あり、時に此の藥を用ゆれば、忽ちにし

て氣勇み、身體軽く、精神極めて爽快を覺ゆ、故に日夕座右を放たざるなり。

秀吉聞て恠まず。

其れ眞に不死の藥なり。吾れ名護屋より歸城し、頗る少氣を覺へ、常に心神樂しからず、其の藥を用ゆれば奈如。

惟敬の曰く。

之れ實に靈藥なり、臣今殿下に獻すべし。

惟敬直ちに囊中を探つて一丸を秀吉に示す、秀吉敷河に命じて持ち來らしむ。近侍の諸將中丸藥を弄して頗る珍となす者あり、熟視すれば藥上に細字を書す。

秀吉問ふて曰く。

之れ何の書か、其の微細なる態くに絶たり。

言終るや自ら楊枝を以て藥を割く、惟敬眺めて曰く。

臣共に其半を嘗むべし。

秀吉之れを與ふ、惟敬受けて嚙下し、良久し頸を締め、臂を伸ばし神氣爽快の狀を示す。茲に於て心を安んじ始めて秀吉亦取つて口に入れ、水を索めて嚙下す。翌朝に至り惟敬に會ひ又た一丸を求めて嚙む。然るに此の丸藥は猛烈なる鳩毒を以て製せしもの。惟敬館に歸るや直ちに他の藥を飲み、而して毒を下して全きを得。秀吉其鳩毒なるを知らずして腹し、是より身體健ならず、彌々久して遂に病床の人となり。即ち醫を求めて驗鍼するに出血せず。

秀吉恠で曰く。

安んぞ人生に血液無からん、吾將に炙すべし。

則ち内室、令姫、嬖妾等に注艾し、忽然笑つて曰く。

嗚呼、吾れ遂に起すんば、馬尾數把を淨水して一握となし、死せば其の喪を秘し、腹を剖き腸を出し、臟腑を盪洗し馬尾を以て之れを縫ひ屍を酒瓮に納めよ。

秀吉遂に死す、諸姬等是れに従ふ、而も後數月にして臭甚掩い難く、終

に其の喪を發す。秀頼時に七才なり。

由來韓人の嘘偽に巧なるは世既に之れを知る、然りと雖も此の説は當時目撃せし一韓人即ち敷河の談なりと傳ふ。元より荒誕無稽の方言なるならんも、只珍説として茲に掲げ、世の史家の參考に供せんとするのみ、其の眞偽は先輩學者の説を待つ

日 韓 古 蹟 終

目次

目次

一、日韓外交の破綻……………一

一、秀吉の離間策……………二四

一、媾和使の渡日……………六二

一、自名護屋至堺漢……………七八

一、清正と惟政……………一二三

附 録

一、懲忠錄……………(柳成龍著)……………一九三

一、懲忠錄卷之二……………二二五

一、懲忠錄卷之三……………二六七

一、懲忠錄卷之四……………三〇六

一、組後雜誌……………三二四

(1)

目次終

續日韓古蹟

奥田鯨洋著

日韓外交の破綻

御前會議の紛糾——と別黨の權争

運命を山崎の一戦にトせし秀吉は、天正十三年遂に立て自ら信長の後繼者として天下を收む、百戦一敗なく宇内を統一し關白となり、猛將勇士靡然として其の膝下に集まり、天下漸く無事ならんとするや、慧眼なる彼は既に天下の形勢を洞察し、劍戟急に收つて諸將髀肉の嘆あらんか、更らに其の内憂の生せんことを恐れ、心中翳に憂ふる所あり、茲に於てか彼亦奇策無かるべからざるなり。由來日本の島國より起つて外に其の志を樹てんと欲する者は、先づ朝鮮を選ばずんば非ず、即ち輕舸能く對馬を發し、數日ならずして彼地に至る實に易々たるの故なればなり、彼の應仁及び、元龜、天正の交、不幸志を得ずして野心勃々たるの士の群

を成して數々明韓の海岸に來襲し、彼等をして其の防禦に困ましめし等、堂々たるの師に非ずと雖も既に其の渡航や此の如し。而も對馬の如きに至つては、久しく朝鮮と交通貿易を以て立つ、其の商工上に於ける關係、彼我の敦睦は遙に我中央政府に對してよりも勝りし處あり。秀吉早くより茲に見る處ありて既に業に征韓討明の壮志を藏す、蓋し得意満々たるの、彼としては將に當然の事と云ふべし。

秀吉竊に此の壮志を藏すると雖も、未だ其の發表と實行とを見るの機無し。而も齡已に五十を逾へて嗣子なく爲めに常に後顧の憂あり、止むなく中納言秀次を入れて猶子とす。然るに天正十九年四月、突如愛妾淀の分婉に依つて一子を得、彼の得意亦思ふべし、否彼の意得のみに非ず、權勢比なき彼の大祝福は日本の大幸福と化し、后宮國母左右の大臣攝家清華は勅使として秀吉の邸に祝賀を傳へ、在京在阪の諸大名のみか、東北西南の諸國より使者參集する者悉く慶賀の言を傳へざるなし。然るに五月中旬に至り秀吉の令弟從三位大納言、大和紀伊和泉三州の牧、豊臣

秀長卒去するや、秀吉其の訃を聞き痛哭し聲々として樂まず、家を秀次に譲り自ら太閤と稱するに至れるが、不幸は英雄の身邊に注集し同年九月愛寵比なき一子亦藥餌に親しみ九月二十日遂に死す。先に秀長を失ひし秀吉は今亦一子を亡ひ彼れの勇膽剛氣を以つてしても猶能く此の悲痛を忍ぶに堪へず、茲に於てか彼は人生の慕なきを感ずると共に、彼が最後の大活動を試みんと決心せしなり。即ち彼が平生蘊蓄する大野心を發表し實行すべきの機は至れるなり。換言すれば此の大悲痛は秀吉をして征韓興軍の期を速ならしめし大なる要素とも謂ふべきなり。

抑も日韓の隣交は遠く我崇神の朝に始まり、自來彼我聘使の來朝する實に絶ゆる秋なかりしも、我應仁以來國內干戈兵亂の斷續して、殆んど絶ゆるの時なく爲めに其の修交も廢棄するに臻れるが、秀吉海内に覇を稱するに至り而して竊かに志を朝鮮に延べんとするや、先づ其の情を探知せざるべからず。即ち天正十四年橘康廣を派して先づ修好の舊に復せん事を言はしむ。其の書に曰く。

吾使を毎度朝鮮に派すると雖も、朝鮮の使者我に來らざるは我を鄙する者なり、今方天下朕が一握に歸す云々
韓廷見て大に驚き、且つ其の語の倨るを怒る。蓋し當時日韓人の交通は絶へずして相往來せしと雖も令甚だ嚴にして韓廷未だ之れを知らず、從て秀吉なる者の何人なるかをも知らざれば政府此書を見て大に驚き且つ怒りしと雖も康廣既に書を以て到る、最早如何ともすべからざる也、茲に於て前例に依り使者接待の法を講ず、
宜祖の曰く。

日本は篡弒の國なれば、使者は接待せざるも可なり、宜しく大義を以て之れを慰諭し從二品以上を與へ其國に歸すべし。

朝臣更らに密議し奏して曰く。

化外の國なり責むべからず、使者は例に依つて接待する可ならん。

宜祖之を許して康廣を迎ふに禮甚だ厚し。康廣時に年五十餘、容貌魁偉鬚髮半白の老人なり。上京の途中館驛に至れば必ず上室に舍し、舉止倨

傲平時の日本使節と異なり見る人皆之を怪む。韓國の古例として凡そ日本の使節來りて其通過する途中は、境内の民夫槍を執て道を夾み、以て軍威を示すを例とす、康廣仁同(京釜線若木)東北を過ぐ時に槍を執る者を見笑つて曰く。汝が輩槍竿太だ短かしと。而して尙州に到るや牧使宋應洞盛宴を開いて歓迎す、康廣宴に趣の時妓生等の樂を奏しつゝ、整列するを見應洞に云つて曰く。

老夫數年干戈の間に在て鬚髮盡く白し、君は妓樂の間にあつて何の憂ふる處もなきに而も猶ほ皓白なるは如何。

大に應洞を譏る。後京師に至るや韓庭宴を設て之を待つ、康廣一日禮曹判書の宴に出で、酒酣なる頃胡椒を筵上に散す座に侍するの妓生伶人等争ふて之を探る。康廣館に歸り嘆息し通譯に語つて曰く、

汝が國亡ぶ可し、紀綱已に毀る、亡ずして何をか待たん。

京に留る數日既に答書を得て歸國せんとするや、朝廷更らに曰く。
水路迷昧にして使者を送り難し。

康廣意外の書を得て憂色あり然れども止を得ずして歸る。秀吉既に第一回の使者に於て先づ韓廷の意のある處を慥めんとし、返つて彼の答書の我を辱しむるを見るや、心中憤激に堪へざる處あり。直ちに征韓の師を起すは容易なるも、外征は彼畢生の大事業なり、猥りに輕舉すべからず、更らに有力なる使者をして修交を名とし彼の地の情況を視察せしむるの必要あり。茲に於て爾來朝鮮と比較的接近せし對馬の主宗義智及び柳川豊前守調信並に秀吉の愛僧禪師玄蘇等を使者として、再び修交を言はしむ。義智等孔雀、鳥銃等を持ち韓皇に謁して以て修交の好を結ばんとす、然れども其の裏面に於ては韓廷にして聽く處非ずんば只自由行動の最後の通知を爲さんとするに在りて而も此の特命全權大使たる義智は年少氣鋭の勇士也。先に迷昧の言を以て橘康廣を放還せし韓廷は、更らに此の使節を受くるに當つて、大に熱慮せずんばあるべからず。一行の將に南大門に入らんとするや、京中の士女其の風容を見んと欲して雲群する者實に城中より漢江河畔に至る、義智行列堂々直ちに入

城して東平館に入る(東平館は南山下倭館洞なりされば現今の警務總監部より京城日報社附近ならん)韓廷其の只ならざるを見群臣を闕下に集めて議す。韓皇先づ歓迎の意を表して義智に二品を送り以て遠來を勞ひ、其の傍ら修交の如何を諮ふ、諸臣敢て修交の不可を唱ふる者なし。領議政李山海禮曹判書柳成龍等力めて修交の可を主張す。柳成龍は文祿、慶長の兩役中殆んど韓廷を背負つて獨り其の奉公を全ふせし、當時廷臣中の隨一と稱せられし之士也。前參判李山甫は其の非を主張し議論紛々として決せず、然れども其の久ふするは反つて使節に誤解を生せしむるの甚なれば、先づ吏曹正郎李德馨を宣慰使に命じ、東平館は行いて義智等の腹中を探らしむ。德馨は當時の才人にて其の宣慰使となるは彼の最も得意とする處なり。德馨義智等と相會するや、彼れは得意の快辨を振つて義智等に先じて提議して曰く。

修交の議真に可ならんも、數年前貴國の軍我全羅道竹島を襲ひ、島將李太元を殺し島民を捕ふ、而も是れ我邊海の民沙乙背同(沙火同とも稱

す何れにやなる者漂流して貴國に至り、而して貴國五島の軍を誘致し以て此の害あり、我朝廷之れを憤る、先づ是等の虜會叛民を刷還し、然る後修交を議するも未だ以て晚しとなさず。

義智聞て然りとし、其の意を諒し直ちに調信を歸らしむ數月ならずして調信韓民の日本に在る者を捕て京城に来る。其の間に於て韓廷頻りに諸臣を集めて修交の如何を議す。而も朝議未だ決せざるなり。宣祖直ちに沙乙背同等を城外に縛して悉く之れを斬り、義智を賞して乘馬一頭を送り、猶ほ引見して宴を張る。茲に於て義智、玄蘇等初めて宣祖に會ふ、時に未だ修交の議猶ほ決せず。

是より先き柳成龍は大提學の故を以て國書を選を命せらる、然れども朝議未だ決せざれば徒らに日を送るのみ、彼遂に聲を生せん事を恐れ、宣祖に謁して速かに修交の議を決せん事を啓す。翌朝に至り知事、邊協等亦時期を失して後日の悔あらん事を啓し、宣祖左右に計るに亦一人の否を云ふ者なし。茲に於て修交の議漸く決するに至り、而して直ちに國書

を撰し以て使者を擇む。即ち大臣黃允吉を以て正使となし、司成金誠一を副使となし、典籍許箴を書狀官とし義智と俱に發せしむ。

時に前提督官趙憲なる者春川の諷所にあり、韓廷特に使を派すると聞き乃ち上疏して其の不可を極陳すると雖も聞かれず。庚寅三月韓使一行は義智等と共に京城を發し四月釜山より舟にて對馬に至り滞在一ヶ月に及ぶ。義智先づ我威勢を示さんとし、一日一行を山寺に招き以て盛宴を張る。一行先づ行いて坐すも義智未だ來らず、漸くにして輜に乗じて至る、金誠一大に憤怒して曰く。

對馬島主は乃ち我國の藩臣なり、我等使命を奉じて至る、何ぞ其の慢侮の此の如き、吾決して此の宴を受けず。

席を蹴つて立ち、允吉等も亦續去す。義智大に驚き直ちに輜夫を切つて來謝し、是より一行は漸く敬意さるゝに至る。成一は使臣中の硬骨男子なり、秀吉の逆意に觸れたるも亦恐らくは彼なるべし。

義智一行を導て水行四十餘日壹岐に至り、博多、下の關を過ぎ七月二十